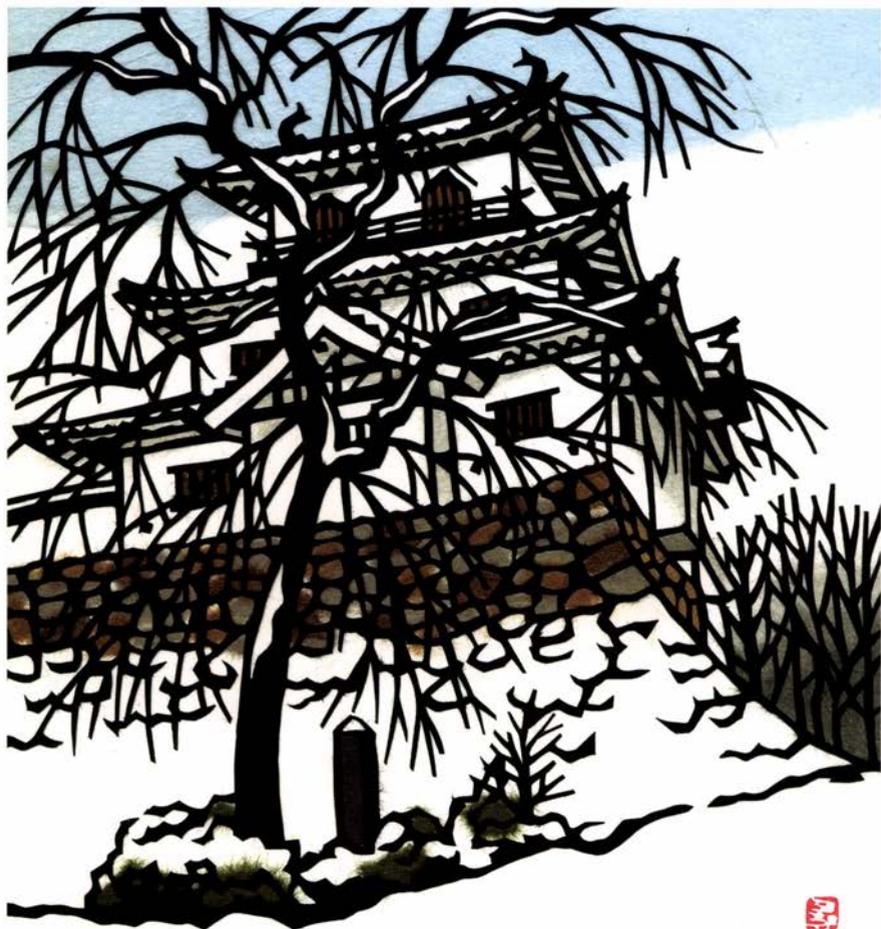


川柳塔

平成二十八年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇六五号



日川協加盟

特集 こんにちは新同人です

No. 1065

二月号

第四回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第四回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者(各題二句 共選)

課題吟 「包む」 政岡 日枝子(川柳塔社)
川上大輪(川柳塔社)

「重い」 菱木 誠(番傘川柳本社)
新家 完司(川柳塔社)

「赤井花城(ふあうすと川柳社)
小島 蘭幸(川柳塔社)

雑詠

投句要領 規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料 一〇〇〇円(切手は不可)

投句締切 平成二十八年二月二十日(金)消印有効
送付先 〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇―

川柳塔社 誌上大会係 宛

TEL/FAX (〇六)六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題秀句に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア (ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

第34回没句川柳供養大会

小島 蘭 幸

鳥取砂丘が近付いてくると、私達一行を乗せたマイクロバスは大渋滞に巻き込まれていました。少しずつ進んでいると左前方に青く輝くイルミネーションが見えて来ました。遠くからではありましたが、今年で最後になるかも知れない砂丘のイルミネーションを見るのが出来たのです。

私は以前、新主幹に聞くのコーナーで、最後の晩餐には何を食えますかの問に対して、蟹のフルコースと答えた記憶がありますが、蟹の宿網元の前夜祭の料理は、その上を行く、正に蟹の食べ放題状態でした。

蟹食べる時は飲んではいられない 蘭 幸

平成27年12月20日、第34回没句川柳供養大会の会場の左正面には祭壇があり、約三万句のがきが積んであります。喪主あいさつ、弔辞に続いて読経

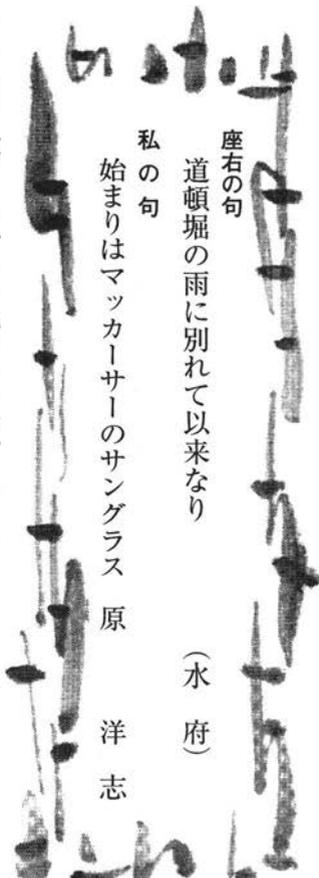
の中を焼香、私も川柳塔社を代表して焼香、没句の供養をさせていただくことが出来ました。

私は「敗者復活吟」の選をしたのですが、何故この句が没になったのと思う程、佳句が揃っていました。本日の出席者の皆さんは、自分の作品を大事にされているのだなあとつくづく思ったことでした。

酔っぱらいには抱かせてくれぬ赤ん坊 完 司
抱きしめてくれたセーター抱いて寝る 和 子
手花火も犬の散歩も夢となる 春 江

私は、みはら川柳奉行の野村賢悟さんと一緒に懇親会にも出席、川柳ふうもん吟社の皆さんと親睦を深めることが出来ました。実は最初、マイカーで行く予定でしたが、移動時間を有効に使いたいと思い、新幹線、特急の中、鳥取駅、蟹の宿で、締切りに追われていた原稿を二つ仕上げる事が出来ました。原稿を書きながら、そういえば薫風先生も、よく旅先で原稿を書かれていたなあと懐かしく思い出していました。

没句川柳供養大会、今度出席する時は、数珠を持つて行きます。 合掌



川柳塔 二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「白石城」

■巻頭言 第34回没句川柳供養大会……………	小島 蘭 幸 …… (1)
いま『川柳雑誌』がおもしろい……………	川 端 一 歩 …… (2)
川柳塔(同人吟)……………	小島 蘭 幸 選 …… (4)
川柳塔の川柳讃歌 ③④……………	木 津 川 計 …… (43)
自選集……………	…………… (44)
温故知新……………	…………… (47)
水煙抄……………	川 上 大 輪 選 …… (48)
新川柳鑑賞 ④⑧……………	麻 生 路 郎 …… (68)
橘高薫風句抄……………	…………… (69)
英語 de Senryu ⑤⑨……………	吉 村 侑 久 代 …… (70)
民族の詩歌 ④……………	三 好 專 平 …… (71)
俳風柳多留一二篇研究 32……………	…………… (72)
愛染帖……………	新 家 完 司 選 …… (74)
檸檬抄 「成り行き」……………	三 浦 強 一 ・ 長 浜 美 籠 共 選 …… (78)
一路集 「招 く」……………	早 川 遡 行 選 …… (81)

いま『川柳雑誌』がおもしろい

川 端 一 歩

南大阪川柳会12月句会で誌友のSさんが「川雑とは何のことですか」と会長に聞いていました。「川雑は『川柳雑誌』の略で川柳塔の前身です。」と答えられたことでしょう。

路郎先生が亡くなられて五十年以上、今日の同人や誌友が『川柳雑誌』知らないのは当然でしょう。私はふと思いましたが、九十年以上永々と続いている川柳塔社の財産は何だろうと、何を財産とするか個人差があると思いますが、少なくともそこに席を置いた同人、誌友の何万人の人たちと柳誌に残された作品の数々ではないでしょうか。作品は川柳だけでなく評論、随筆、対談、講座等々すべて財産であり宝だと思えます。

『川柳塔』誌を調べるのはそんなに困難ではありませんが、『川柳雑誌』はどこに行けば読めるのか、手近で見ることが出来るのは、麻生路郎先生が大阪市立中

一路集〔要領〕	武本 碧選	(82)
〔工夫〕	出口セツ子選	(83)
初歩教室「道」	山口 光久	(84)
川柳塔鑑賞	竹治ちかし	(86)
水煙抄鑑賞	斉尾くにこ	(88)
せりりゆう飛行船 ⁶²	新家 完司	(89)
『麻生路郎読本』余滴 ⁽³³⁾	栗原 道夫	(90)
特集 こんにちは 新同人です		(92)
■随筆 ティータイム ⁵ 反復法など	水野 黒兔	(99)
インスピレーション・ナビ 印象吟	大西 泰世	(100)
朝日なにわ柳壇 今年の十秀		(102)
一月本社句会		(103)
句会燦燦	岩崎 眞里子	(107)
各地柳壇(佳句地十選/高瀬霜石・久保田千代)		(108)
柳界展望		(121)
二月各地句会案内		(122)
■編集後記(ひとこと/藤後卓也)	朱夏・勝弘	(124)

座右の句

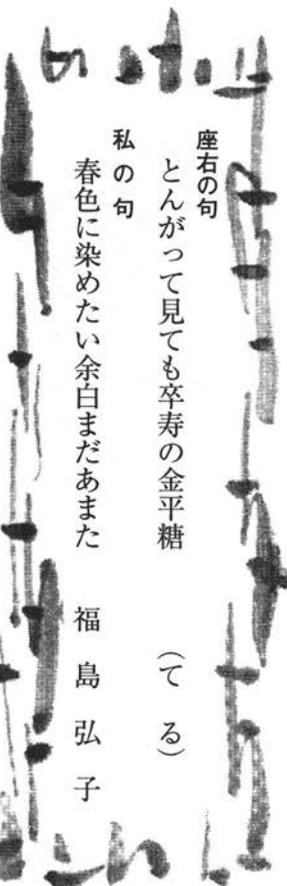
とんがって見ても卒寿の金平糖

(てる)

私の句

春色に染めたい余白まだあまた

福島 弘子



中央図書館に創刊号から終刊号まで寄贈されたのが揃っています。もう一つは川柳塔社にあります。本社にあるのは当初不揃いでしたが、塩満敏さんから預かってきた『川柳雑誌』を了解を得て不足分を寄贈してもらい全部揃いました。『川柳雑誌』の中身を一言で紹介できませんが、川柳以外でこんな内容が掲載しているという手引き書があります。

福田山雨楼さんの『論説三百題』これは川柳塔社のノーベル賞ものだと思います。私は昨年この『論説三百題』を調べの中でいい出合いをたくさん頂きました。その一つは、河野春三の『川柳の背後に』(昭和三年一月号)に出合えたこと。小島六厘坊を調べるのにも大いに役立ちました。山雨楼の『川柳十徳』にも出合いました。

ふあうすとの光武弦太郎氏は『鬼手仏心』で「川柳を本気でやる気があるなら、もっと先人の業績を学べ」と言っています。私たちの手近にある『川柳雑誌』から、秀れた先輩たちの句と柳論にふれようではありませんか。われわれ路郎の曾孫弟子の軍団よ。



小島蘭幸選

和歌山市 木本朱夏

カレンダーの残り時間が攻めて来る
関節の外れたギニョールはわたし

芳しき夜の林檎と見つめ合う

にくしみの連鎖野分きは吹きやまず
飯の世と知っているから泣かないわ

一枚の絵に閉じ込めておくことば

大阪市 谷口 義

何の副作用だかまだ生きてます

外で飲むビールは女でもうまい

ハンドクリーム首にも塗っておく

切り取ったところに深い意味があり

水ぐすり飲んで正気に戻ります

下方修正して今年も出直そう

松江市 藤井寿代

ポストから一〇〇万本のバラ届く

ポジティブに生きよう5年日記買う

マイペース守る私という器

聞き流す女の武器もありました

不器用に生きて団子虫のままに

ブラジャーをはずせば私ラ・フランス

堺市 栗原道夫

バス停の生徒と見てる寒夕焼

抽斗の中でも迷っている羊

ラーメンの湯気の中なるおじいちゃん

老涙が滲み出そうな金平糖

三日月に跨り降りてこない猫

六十歳諸手を挙げて挙げたまま

河内長野市 山岡 富美子

追伸のあの一行が発火点

冒険へさあ旅立ちの真練る

錠剤がつかなく命のアラカルト

善人にかこまれ老いが加速する

コマ送り刹那を生きるシャボン玉

落ち葉掃き風が剛腕みせつける

大洲市 中居善信

温暖化まだ生きている冬の蠅

もう少し歩きましょうか温い冬

組さえも合わぬジャンボを買っている

柳歴は五十周年祝う春

村の鎮守で新嘗祭をするそうなの

年一度の縁を思う年賀祝む

沖繩県 森山文切

優しさに縛られ首が回らない

一線をそろり爪先だけ越える

天井に僕の形の染みがある

沖繩の海だ後悔など捨てて

暖冬は地球の妥協だと思ふ

置いた手が攻める形になつてゐる

鳥取市 森山盛桜

偉大なる普遍ブランコすべり台

激変は無理か熟柿のまま朽ちる

作業着のまま近所のカフェに行く

靴を脱ぐ裸足と靴の無いはだし

鉄砲は紙ゴム水で充分だ

エキサイトしたのは昭和までだった

鳥取市 福西茶子

和装してみたが大股直らない

ラリルレロ言えぬ二歳と遠い耳

苦手にも笑顔会釈ができて老う

無防備な姿よ午前二時の妻

武士道は知らぬが卑怯だけはせぬ

ボコボコの夫婦だけれど半世紀

堺市 柿花和夫

シヨック療法今日は岩戸へ消えてやる

飲み過ぎて胴体着陸にて帰艦

追及をされて嬉しくなる噂

トライせず失敗もせず残る悔

窓際の椅子に肘掛け付いてない

褒め上手に微笑でガード固めてる

弘前市 高瀬霜石

パソコンもスマホもいらぬひとり旅

まず米がありきだろうさ日本国

味噌汁とご飯わたしも寅さんも

段々畑ニッポン人の底力

人口が減つてゆくからバスも減る

ローカル線と呼ばれずたれてゆく私鉄

大阪市 古今堂蕉子

勝利には無心勝ち切るには執心

言いたい事言つて仲良きやそれでよし

生き方の濃さかこだわり捨てぬ人

寂しかろうと耳鳴りの応援歌

舌も足ももつれほどけぬのが困る

調子良い私にも苦手さんが居る

東かがわ市 川崎 ひかり

呆けてない年相応と言う呪文

強弱の手綱の先に夫の首

戻れないように柩に釘を打つ

波乱万丈生きた昭和の骨拾う

少し無理すると手がつる足がつる

松山市 古手川 光

体調も伝える手書き年賀状

三面に今日も命の軽い記事

持ててはる技とポーズとお名前で

自爆テロ洗脳されて鬼になる

たまには健保使いなさいという病

西予市 黒田 茂代

冬山の裸木みんな死んだふり

我慢の菌くいしばってる氷中花

スランプと気づかずスランプの底に

強かになれと自分に言い聞かす

有縁無縁こころ自由に遊ばせる

高知市 小川 てるみ

めでためめでたで初春の陽を浴びる

収穫祭昼のお神酒もいいものだ

カラオケで少し充電して帰る

スローモーになった丁寧になった

長寿更新終活はやめにする

唐津市 坂本 蜂朗

金婚の妻はいつしか操縦士

父逝った歳に入院する不安

先に死なせはしないぞと食管理

父の歳越え四苦八苦生かされる

補修した心臓踊り出す美人

唐津市 山口 高明

三百年つづく祭儀の孔子堂

馥郁と新酒が匂う試飲会

老境の僕にナンバー不必要

承知して居ても治らぬ不摂生

要らぬよになつて出てくる深仕舞い

熊本県 岩切 康子

吹きこぼれ友の電話は恨まない

今寄つてて会つててとは嬉しいよ

安らかな今日で居たく誘い断つ

安い旅大きな買物してしまい

鏡三日月今宵金星掬わんと

札幌市 小沢 淳

病だれ一つ二つで威張れない

サプリメントに今更頼る柔でない

再発をしたらの覚悟出来ている

健康に歩けばいいは知っている

開拓の三代目ピルの隅に生き

札幌市 三浦 強 一

弘前市 稲見 則彦

家計簿が義理人情をチェックする
気力体力落ち円満と言われても

家計簿の愚痴を聞いている赤いペン
修正ペン過去の話を突いてくる

女三人スマホの指が忙しい

ご機嫌を伺うように少し晴れ
記念日はいつもやむやむや縄暖簾

結納の席引き締める柳樽

三次会個人情報渦となる

ポランティア出前川柳して元気

青森県 松山 芳生

弘前市 岡本 花匠

開眼へ三本メの手の温み

立春のころも和む夫婦みち
雪しんしん寒さに耐えるじゃつぱ汁

手のひらで掬う銀河のありつたけ

仁王見て正氣に戻る盆の窪
ふれあいて笑福のわざ身に受ける

がさがさの老いの心を癒す菊

卒寿まで福豆拾う迷い坂

にぎやかに鳩も鴉も棲む都会

戦前が聞えるビクターのラッパ

戦前が聞えるビクターのラッパ

黒石市 相馬 一花

弘前市 今 愁女

究極のねじれ国会まだ続く

年の暮れ捻挫の足を引き摺って
申年は災い去ると言うけれど

ニコ中の父に云われてたばこ止め

地球からIS去るを願うのみ

海難にライフジャケット売り切れる

岩木嶺に雪降り止まず山眠る

カリスマと自惚れている割烹着

夜明け前除雪車の音目が醒める

大物の御機嫌をとるダンゴ虫

弘前市 浅田 隆樹

弘前市 須郷 井蛙

英語より手話ならできそ国際化

デイサービス拍手を出来るお婆ちゃん
女房の検閲があり文安堵

赤カプの香り粉雪吸いに来る

往復の五分へ真冬の重装備

雪が降る赤いりんごと黄のりんご

デイサービス業を数の競い合い

タクアンを漬けたゆつくり雪よ降れ

高台に住んで住みよい街じゃない

赤ワインたまに私を虚飾する

弘前市 高橋 洋子

暇もなく動いて老いのボケ封じ
便利グッズ買ってはみたが捨てる羽目
風向きがどう変ろうが僕は僕
詐欺電話ズバツと見抜き自画自賛
落葉くるくるの街は錦の万華鏡

弘前市 福士 慕情

遡上する鮭の鱗が陽を弾く
原石をキラキラ光るまで研く
居酒屋に逝ったあいつの指定席
柏手の音が決まらぬ願い事
快適な暮らしが出来ぬ年金者

さいたま市 星野 育子

外出前お呪いするルーティーン
イベントで体内時計乱れがち
家事にトリプルスリーあり主婦自慢
チラシ増え無駄にはしない鶴を折る
辛い治療終えたら話す先のこと

東京都 川本 真理子

これはもう捨てようかなに返事なく
行かないと泣く声徐々に遠ざかる
どちつかずまだ今頃は真ん中において
米を研ぎ今日は宇宙を考える
結論は出ぬままなぜかホツとする

東京都 まえで とよこ

十二月ポインセチアはうれしそ
めざめてまたうとうとねむり日がくれる
難民支援戦後の寒さおもいだす
難民のふりしてパリをめざすとは
東京タワートリコロールにともります

横浜市 菊地 政勝

保母さんに伝わっていた夫婦仲
保険屋が余命余命とそそのかす
有り難くきれいに食べる娘の料理
年末の道は血栓多発する
五郎丸まねて拝んだ初詣で

富山市 島 ひかる

妹の写真を胸に登る山
悔んでも惜しんでもみな過去の過去
友達のひと言ずつにある癒し
プラス志向へ悲しみを埋める
悲しみを白一色に包まれる

可児市 板山 まみ子

富士山を見ると自然に頬ゆるみ
私もテニス錦織のもテニス
兄弟に法事でもなきや会えぬ距離
腰さすり小春日和の庭仕事
我慢して伊達の薄着はもうしない

愛知県 早川 遡行

死ぬ時は死ぬさ今宵も旨い酒
肩書きがないので作れない名刺
新雪の北アを望む蕎麦の里
晩酌の二合を至福とする余生
漬物でお替りをする囲炉裏端

犬山市 金子 美千代

面会謝絶スツピンの休息日
退屈をしない毎日有り難い
良い歳を重ねたらしい顔の相
どこでどう会うかも不思議なる縁
キラキラネームその後の事は考えず

犬山市 関本 かつ子

新しい手帳に先ずは初句会
反省をしたか枕が聞いて来る
家族葬と知って喪服を片付ける
自己流の寄せ植え目立つとこに置き
もう少し生きなきゃ孫が幼な過ぎ

京都市 清水 英旺

愛犬は僕を空っぽにして逝った
妻の背に保湿クリーム塗りこめる
真夜中の靴音妄想かき立てる
スマホ族に背を向け読書する車中
日の丸が元氣いいのはスタジアム

京都市 西村 益子

はつきりと名前が言える大丈夫
イケメンの医者のおの代診日
築八十年まだまだ仲良く根競べ
矢のように返事返って来るメール
頭堅くなかなかうんと言えませぬ

京都市 藤井 文代

肥えたいのに羨望受けるSサイズ
一件落着電池切れです長電話
意に反し小さい方で喜ぶ胃
反論の機会くれない置手紙
待てばよかった今ならイエス言えたのに

京都市 榎本 宏子

粗供養に故人の好み入れてある
赤ん坊にころのくもり洗われる
街の貌も変る少子化高齢化
閉店のお知らせ軽いサインペン
雑念をいっばい秘めてある写経

京都市 三宅 満子

行かぬのに世界の天気聞く深夜
エスカレーター乗る時まだ初心者です
散ってなお赤・黄・緑・競い合う
モーツァルトに日曜の朝起こされる
禅僧が素足で掃除落ち椿

八幡市 今井 万紗子

新春に小さな家族ふえました
笑い過ぎ少し反省して帰る
何ごとも無くミラクルもなく十二月
よう笑ろてバツと咲かせて逝くつもり
纏れ糸愛の欠けらで結び合おう

長岡京市 山田 葉子

サックスに酔おう眠りにおちるまで
フラのドレスまとい日常から抜ける
胴巻きにカード一枚あればいい
唇を噛んで忘れることにする
お似合いの二人まわりの目もぬくい

大阪府 桑田 ゆきの

髪染めて心に元氣湧かしおり
枯菊のほのかに香り残しおり
湯豆腐の湯気を吹き吹き京言葉
名刺の落葉の嵩も一景に
冬薔薇の唯一輪が凜とする

大阪府 野田 栄呼

僧の説あの世信じて良いものか
川柳と出合い若さを維持してる
なごやかに嗜好びつたり夕餉膳
再会の友の若さに目をみはる
しっかりと残り人生謳歌する

大阪府 初山 隆盛

ご無沙汰を漏れなく照らす初光り
年金に容赦無用のお年玉
盆梅の置き場所変えて孫を待つ
終着の駅に迎える友は無く
親孝行平均寿命越えました

大阪府 米澤 俣子

取り立ててこれということせず師走
亡母の歳越えて五欲まだ消えず
スマホの虜母性忘れたネグレクト
大女優原節子と逝った昭和
傍目ほどワタシ呑気じゃないんです

大阪市 池上 清治

マイナンバー恐れる程の金はなし
貰う歳暮溜めずに配る医者が好き
老人の溜まりに予算追いつかず
喪中葉書に賀状は呉れと書いてある
ジャンボくじ外れてホッと安堵する

大阪市 井丸 昌紀

大ききの揃ったイチゴ甘くない
あきらめたわけやない毛を増やすこと
スマホなら使えてペンは使えない
導いた答え思いもよらぬもの
マイナンパートイレに貼って眺めてる

大阪市 宇都 満知子

母の味やっぱり旨いうちごはん
北風に阿吽で決まる今日は鍋
悲しくもないのに涙むかい風
歳重ね気楽の中にある孤独
いじめるもいじめられるも迷い道

大阪市 内田 志津子

イケメンに心が揺れて震度3
決めたのに芯がないからすぐ迷う
母さんの冬の記憶は大根煮
慌てない大事な記憶たんとおある
じわりくる老後に足も年金も

大阪市 江島谷 勝弘

お手紙の記念切手がやわらかい
朝ラッッシュ僕がいちばん高齢者
食欲がある当分ボクは生きるだろ
坂になると電動自転車がほしい
ペン牝豚が十年たてば消えている

大阪市 榎本 日の出

脳みそを空っぽにすりゃ匂が生れ
燃えつきて静かに土となる花よ
青春を燃やしそこねて今老春
主義主張違っているが同じ趣味
すつきりとなりました歳の順でした

大阪市 榎本 舞夢

五郎丸のおかげ旧友集い合い
偶然か故意か思わぬ人と会う
はやぶさ2 ニューズ気持も弾みます
新年に向い掃除買物張り切って
予定表乗り切るために精を出す

大阪市 大川 桃花

用意周到いつも持つてる晴雨傘
月末のピンチのいだ玉子丼
切り抜きに介護情報増えてくる
地球規模で広がる恐怖テロリスト
友のメール寂しいことが多くなり

大阪市 奥村 五月

惚れた時こんな男と知らなんだ
機関銃妻の黙まりなおおしい
残す物無いが頑固はまだ残る
神様も血を血で洗う争いに
家計簿は文句言う時妻の武器

大阪市 笠嶋 惠美

あくせくをやめる薬が効かぬから
お人好し人に合わせて負けている
腰痛むびつくりぼんのレントゲン
中途半端生きる覚悟に死ぬ覚悟
新しい八十歳になる誦文

大阪市 川端 一步

寅彦の隨筆を読む十二月
いま一度ペンが震えるほどの恋
握手する右手羨む左の手
平均寿命とどいた途端また伸びた
妊婦さんの署名に涙こぼれそう

大阪市 熊代 菜月

父さんに勝つて母さん孫に負け
氣いつけや私今でも活火山
孫の武器バアバ大好き類にチュ
丸見えの心自慢に生きて居る
あれそれで通じる人はもう居ない

大阪市 小谷 集一

長生きをすればするほど欲が出る
思い出を入れておきたい玉手箱
言い訳をする度影が瘦せてくる
大あくび左脳で軋む音がする
日向ぼこ終の住処を持つ至福

大阪市 坂 裕之

キヤッチボール互いにそらしすぐ終る
ああしんど朝一番のハーモニー
都合よく聞こえる妻の耳便利
ボール投げする子が欲しい町になる
ラッシュ時歩も歩きスマホで駅を出る

大阪市 佐藤 忠昭

傘寿まで杖を買うまい傘代用
年金で杖を買わずに酒を買う
私の句三省堂刊に掲載だ
無断だが名誉と思ひ許したる
寝る時間減らして苦吟ヤセマセン

大阪市 田浦 實

日に一知散歩と読書欠かせない
挑む相手自分自身と知った喜寿
新しい体験ばかり老いの日日
見栄勝氣捨てれば老いに力つく
もう変えぬスローライフへ切った舵

大阪市 津守 なぎさ

本棚の整理で亡母の哲学書
マイナンバー忘れてならぬ仕舞場所
カニカニにつられ車窓の雪景色
伊勢海老とアワビお節の格づけに
あかつきに期待ふくらむもの作り

大阪市 津村 志華子

まだ翔べる余生へ旗を振ってやる
長生きをして冥利とも不安とも
付和雷同ドミノ倒しになるわたし
日の目見ぬ生涯だった藪つばき
スマホから届く旅路の雪景色

大阪市 寺井弘子

タクシーの機嫌が悪いワンメーター
丸した訳分からぬままのカレンダー
飼い主の仲は無視して犬の恋
仲直り切っ掛けつかむロゼワイン
終活も視野に明日への坂のぼる

大阪市 寺本実

記念日を忘れ一品減らされる
検査値がぶつくり酒を断ちました
ファスナーと戦闘中の試着室
赤飯だ黙って訳を考える
草刈りの後は雀の遊園地

大阪市 栃尾奏子

告白のきっかけ探すチョコレート
チョコを買い手に入れておく参加権
不戦勝より完全燃焼系
用意したチョコは自分で食べました
来年も懲りずにきつと恋をする

大阪市 原田すみ子

繰り返す日常なのに出来不出来
目分量暮らしに効かす塩コショウ
竹の子に笑われるほど着膨れる
思い込み何度も痛い思いする
少しづつスピード上げて年の暮れ

大阪市 板東倫子

貧困と孤独はもはや切れぬ仲
銃持った愛国心はおことわり
孤老死と聞いても涙出ぬ仲間
早起きのプラスマイナス考える
マイナンバーより欲しいのはマイ職業

大阪市 平嶋美智子

寒風はうつむく人をあざ笑う
追風をもらい希望の第一歩
する事があって老いてる暇がない
七十五年心に刻む開戦日
七十年飢えをおなが覚えてる

大阪市 藤田武人

懐の鳩がポツポと種明かし
ただいまでいつものママに戻ります
顔見てるだけでほっこりするあなた
ポツケから溢れ出そうな思いやり
騙されたフリして魔女と添いとげる

大阪市 藤原千恵子

何年ぶり友はいい歳重ねてた
指示だけなら私にだって出来ますよ
指ほどの芋も存在主張する
侘び寂が少し分かるかさ湯する
此の一年茶筌供養で締め切る

大阪市 伏見 雅明

朝夕のラッシュに耐えてちびた靴

大国は勝手に地図を描き直し

スマホには人惹きつける魔もの棲む

風呂敷にこっそり包む羞恥心

創業の苦しみ壁に美化される

大阪市 升成 好

幸運のドアを開いた無の心

躰きに学ばず何度でも転ぶ

私にこだわりがある酒の爛

寺巡り歩幅に徳がついて来ぬ

我慢する貧乏性かも知れぬ

大阪市 松尾 柳右子

新しいカレンダみつめ夢描く

いつまでも元気もらうよ良く食べる

目薬をさすの忘れぬ八十路代

元氣にと朝の体操つづけてる

雀鳴く裏庭寒くなつて来た

大阪市 山本 加お里

隠しても心の揺れは顔にでる

ラグビーはわからないけど五郎丸

砂時計さらさらさらと老いしのび

変わった名ルビをつけなきゃ読めません

賑やかに餅つきしてた昭和の子

大阪市 吉内 タカ子

秋晴れに心を洗う歩幅乗る

秋夕日きれい過ぎます明日を待つ

誕生日若返りやと服祝い

断捨離と孤独の心春を待つ

好きな事さして貰える恩返し

大阪市 若本 安代

旅プラン膝と腰にも聞いてみる

温暖化十年先の四季の彩

この足で歩く嬉しさ気付く旅

過疎の地に降りそそぐ如星の数

赤ワイン頂き昼寝ボケ防止

堺市 奥時 雄

二日酔いしたことがない定年後

傘寿なら神も許そう昼の酒

昼の酒待つから頑張れるブルー

元日は朝から神と酌み交わす

三ヶ日血糖値には目を瞑る

堺市 加島 由一

地ビールが詩人にさせたひとり旅

住所録喪中がきをチェックする

カラオケが上手になった淋しがり

仏壇に婚活の事言い出せず

生きてれば身体に悪いこととする

堺市源田 八千代

看取りまでを見事なる連携プレイ

夫婦なればこそ出来た在宅介護

私と同じ食べ物供えます

私の慰労会してくれる友

歯をくいしばり働いて来た余生なり

堺市澤井 敏治

屠蘇祝い酔いが醒めたらえっさん

死を意識やつと謙虚になれました

お喋りすずめ春を探して鬼ごっこ

人を救せぬ心の鬼に豆を打つ

なまはげの文化に鬼は生かされる

堺市遠山 唯教

寛容と融和でテロに脅えない

いい仕事したと合格ほめてやる

負け犬のまだ人生は終らない

脱皮して変る姿をみてみたい

不便だが不幸ではない日を惜しむ

堺市内藤 憲彦

人は人自分のまんま生きて行く

初孫の腕の温もり忘れな

川柳を生き甲斐にして呆けられぬ

父卒寿僕より空気読めている

火星から地球の汚染見られてる

堺市村上 玄也

病院とスーパーへだけ乗る車

雨の日と夜は運転しない主義

違反ならちよくちよくするが無事故です

高齢者の事故に返上考える

免許更新脳トレをして受けに行く

堺市矢倉 五月

ピリオドを打つ手かすかにある未練

トンネルを出たか久々パン焼く娘

信じてる人が旗振るついて行く

結論が出るまで隅で石になる

ITに弱いが情けにも弱い

池田市栗田 久子

両腕をひろげ春風を胸に

ストレスが消えたその後の身の軽さ

リズムよく切る千切りのころよさ

振り返る過去がぞろりと長くなる

過不足のない人生の星まわり

和泉市横山 捷也

鉛筆を削って初心に戻る朝

庭石の良さが分かって来た夫婦

真実を知ってる人の苦笑い

つい本音漏らして弱み握られた

真実を隠し毒舌振るう人

茨木市 島田 誠一

一本のタクトで師走描く第九
忘年会話題も酒も酔をとる
十億円当てても庭で茄子胡瓜
まるでサンタ爆買いをしに来てくれる
後のまつりなんぼ悔いても開戦日

茨木市 藤井 正雄

プランだけ立派金には触れてない
勝っているから毒舌気にしない
言い訳の汗とハンカチ見抜いている
心配りも終えて幹事の深夜風呂
君付けがさん付けになる恋二章

大阪狭山市 矢野 梓

越前のそばが届いて年の暮
忘年会行ける幸せ冬帽子
忘年会楽しい友と相席に
子の電話医者如くに風邪を問う
友逝きてもう書く事のない賀状

貝塚市 石田 ひろ子

庇われても悲し知らん振りも辛い
針に糸通り屈託が消えた
歳時記にちよつと拗ねてる温暖化
物干しの夕焼け今日のプレセント
イルミネーション追っ掛けしてるマイカーで

河内長野市 植村 喜代

お蔭様お蔭様でと日が暮れる
シヨートステイ夫の愚痴を聞くケイタイ
成るようになるしかないのこの世です
長女一人でも頼れる有り難さ
川柳のお蔭少しは楽しんで

河内長野市 大島 ともこ

手探りで今日を占う夜明け前
偶然を重ね歯車回り出す
日本の良さ改めて知る海の外
愛犬の最期に己重ね見る
お別れですジュンの私を離さぬ

河内長野市 梶原 弘光

マジヤバイ老人会で言うてみた
セーフティバントが好きで野球観る
誕生日に測ったように逝った人
迷ってる顔して腹は決まってる
一年中理由をつけて飲むビール

河内長野市 木見谷 孝代

吟行へ用意周到名幹事
車椅子押して和やか吉備路旅
いい出合い趣味が暮らしを深くする
齢重ね母に似すぎてぎよつとする
茶の間からパートへママの冒険だ

河内長野市 黒岩靖博

大声は出るが歩幅は小さくなり

年齢に合わせ歩幅は伸び縮み

スポットを浴びるカラオケ歌手気取り

一粒も無駄にするなど亡母の声

花の巴里テロにおびえて暮らす日々

河内長野市 坂上淳司

花の都に背筋が凍る多発テロ

大根葉切り捨て帰る若い女

コンビニが便利と孫は嫁取らず

3Kの外科医は髭で笑つてる

冒険の一手甚敵唸らせる

河内長野市 谷久美子

分け合った苦勞話に盛り上がり

古都京に押し寄せ集う異邦人

晴天に恵まれ集う吉備の為(川柳吟行の旅)

ささやかな暮らしの中にある平和

播かずとも苦勞の種は増えてくる

河内長野市 辻村ヒロ

検査結果妻に感謝の言葉添え

それなりに迷つてみてもいいものだ

自前の歯さくさく旬を満喫だ

ゆつたりと私に戻す美術館

夫婦から親友になった五十年

河内長野市 藤塚克三

忘れっぽい記憶装置も年なんだ

聴いてるが痺れで法話うわの空

バタバタと検査済ませてお正月

電池いらん掃除ロボット僕の役

へそくりの諭吉の基地が一つ減り

河内長野市 松岡篤

役人にミスなど無いと思うミス

政治家が一番演技上手いかも

信仰心無いが賽銭して自問

古希迎え料理で妻の弟子になり

苦勞したかけらも見せぬ苦勞人

河内長野市 村上直樹

また薬増やす加齢という病

スマホから雑学仕入れ脳に活

パリもテロもう出来ない空の旅

しあわせはほんわか妻と摂る朝餉

いざ駒を花も実もある八十路坂

河内長野市 山室光弘

ルビコンを渡れば戻る橋がない

酒タバコせつせと国に貢いでる

手のこんだ自筆の賀状お洒落です

心の隙間おいでおいでと夜が呼ぶ

計れない義理の重さと人の愛

岸和田市 岩佐ダン吉

すぐ許す私の弱さなんだろう

ルールだと言われて僕は空を見る

地球儀はたつたひとつだ抱いている

星がふるただそれだけの里なのに

言いつ分は聞こうひとり言うてくれ

岸和田市 雪本珠子

時と場合そつとするのも思いやり

眠れない夜に聴いてる夜想曲

友の訃に我が身の余生推し量る

元気かとそつと三日月問うてくれ

ベランダで星の眩き聞く夜更け

四條巖市 吉岡修

モンゴルに混じつてるのが上位陣

ごほう抜き末席からも夢見てる

ここからは虎穴ここらでひと思案

肩書きが取れて世間が広うなる

こちよこちよと天狗の鼻に試したい

吹田市 太田昭

嘘を言えぬ間柄にもある内緒

お世辞でも褒められたくて汗をかく

マイナンバーを貼られ棺に入れられる

前略もかしこも書かずメール打つ

断捨離で消えてしまった自尊心

吹田市 大谷篤子

冬至の寒さに胸の扉を閉めておく

老い姿重い荷物を急な坂

十指みな元気感謝のグーチョキパー

はばかり杖をついて歩いてる

決心はつかぬ終りのベルが鳴る

吹田市 木下敏子

気がつけば少し背骨が縮んでる

ほどほどの筋トレをして夢を見る

ひと呼吸おいて丸い言葉尻

元気だと墨滲ませて書く賀状

手の届く所だけ拭く大掃除

吹田市 須磨活恵

手作りのコロッケほくほくみな笑顔

囲炉裏カマド心の奥の風景画

長生きをしませう春の靴買いに

迷いごととにかくお米研いでおく

冬越えの鉢を大事に春を待つ

吹田市 野下之男

おお怖いだけど行きたい花のバリ

戦争を飽きずにしてるこの不思議

お申さん今年は頼むこの日本

負けた日は歌番組で生き返る

間違つても他人の庭は通るまい

吹田市 山本 希久子

歳時記とゆっくり暮れてゆく八十路

童心にかえる金平糖の角がとれ

ドラマ始まる小さなホテル小さな街

自分重ねるかすかな風に散るもみじ

シンバルが鳴りふん切りをつけました

高石市 浅野 房子

この世での修業足りぬと生き残る

図書館に御無沙汰をして何年か

食事時暗いニュースは見たくない

糖尿病無いので甘い物食べる

痛いこと言いたくないが痛いのだ

高槻市 井上 照子

十二月八日じゃがいもごはん思出す

かなぐり流はがき一枚心こめ

五七五励んだつもり満足だ

遠い耳ひよつときこえた鐘の音

年だけの豆多すぎてまたあした

高槻市 片山 かずお

教えられてもカニやサソリに見えぬ星

笑い声窓を覗いてみたくなる

左利き盃を持たせば出る笑顔

昔は出るが昨日が出てこない加齢

行く末がグルグル回り不眠症

高槻市 島田 千鶴子

几帳面な夫にまかす障子貼り

ゆつたりと小春日和のカフェテラス

気が付けばビルの谷間に咲く椿

子どもらが見てる背筋は伸ばしとこ

電子音聞き分けている台所

高槻市 初代 正彦

悩みごとお地藏さまに訊いてみる

お開きになってポロツと吐く本音

電飾に華やぐ街の裏通り

今も宇宙膨らんでるといふロマン

群れなして海を生き抜く雑魚の知恵

高槻市 杉本 義昭

植樹した森は平和な森となる

テロ破壊テレビゲームのように見る

目くばせをしてうやむやにする話

へそくりの近くを妻が掃除する

閉校の庭に記念樹根を下ろす

高槻市 富田 美義

病院の全科巡って歳デンな

回診に雑音サツと吸い取られ

炬燵にて杖を持たずに巡る夢

白内障オペ終え握手爽やかに

オペ無事に終えてお脳も再稼働

高槻市 富田 保子

手のひらへ今日一日を叩きこむ

自分にも人にも厳しい夫いて

握る手が揺れて一つの命閉じ

うまい唄聞けた相手も星になり

日帰りツアーあれもこれもと欲張って

高槻市 原 洋志

仮面つけ少し人間消してみる

老いたなあ涙まっすぐ流れない

交番のポインセチアに道訊ね

シヤネルだけ残して影は遠ざかる

菩提寺へときどきはたきかけに行く

高槻市 安田 忠子

美味しい物いっぱい食べてよく笑う

私の字はつきり分かる書道展

親バカで娘の出した本を買う

簡単に絵手紙で書くお札状

クラス会小さくなっていた美人

豊中市 水野 黒兎

銀色の波紋となつて冬が来る

反省会ほどなく酒の会になる

冬至湯に浸り今年を顧る

数独の途中で今日も日が暮れる

少年は地図の余白に夢を描く

豊中市 江見 見清

結果よりトライをしたことに拍手

片付けのメモ一枚が邪魔をする

押入れをびっくりさせた不意の客

二人の耳寄せる水琴窟の音

留守居での初日は卵かけごはん

豊中市 藤井 則彦

ぶつけ合う意見で強くなる絆

千切れ雲に疼く仄かな老いの恋

自分自身を知つていそうで知らぬ僕

幸せに生きたと最期言うつもり

贅沢なランチのあとは眠れない

豊中市 松尾 美智代

古希の背をまだ頼られている励み

ライバルに刺激もらつているやる気

幸せも不幸もずっと続かない

頼りない私ですが意地もある

紅葉に輪廻転生など思う

富田林市 片岡 智恵子

翔んでみたが羽根は重たいものを知る

交番所いつも留守です平和です

起死回生何ごとも楽観視して

リクルートスーツ励ます春の風

小窓に誘う名月をひとりじめ

富田林市 関 よしみ

五風十雨で幸せになる野菜
大根の白さ素直さたくましさ
冬枯れにときめきを刻んで入れる
柵をひよいと跳び越え現在地
自画像は紅を入れると完成す

富田林市 中井 アキ

ほこほこの孫の意見を聞いている
夕やけこやけ亡母に近づくとっこいしょ
合掌の指から夕陽落ちてゆく
耳鳴りが続く亡夫が呼んでいる
カレンター埋まり少々気が重い

富田林市 中崎 深雪

難病とつき合いながら暮れてゆく
調子良く歩けるとこよなく嬉し
せて心は健康でねと友の会
お陽さまにやさしく抱かれ日向ほこ
忙しいけれどけじめのつく師走

富田林市 中村 恵

一点の翳りも無いという笑顔
何も彼も曝けてしまう聞き上手
鬱の日の服は明るい色にする
遠い日の囁き耳底に残る
年齢に制限のある見栄虚栄

富田林市 肥山 一文

早朝の心を洗い経を読む
心中を洗い清めて座禅組む
正直に生きてこられたこれからも
お互いにうっかりばかり若い二人
うっかりがもう慣れてきた老夫婦

富田林市 山野 寿之

香を焚く妻から愛を誕生日
翌松に未来を託す愛の水
ここだけの話喋ったのは障子
断捨離は出来ぬ思い出でんこもり
落葉踏む音もボエムの山の寺

寝屋川市 富山 ルイ子

八十五歳もう無理しない無理出来ぬ
完治してうれし私にご褒美を
元気です賀状に踊る五七五
花燃ゆの美和の生き方参考に
老人ホームまた行こうかなボランティア

寝屋川市 平松 かすみ

無料券勿体なくて一万歩
バラ園はたったひとりで淋しがり
亡き兄の勧めてくれた健康器
生きてれば何歳だろう指を折る
ヘルシーに感謝素食がよいのかな

寢屋川市 森 茜

春を待つ苔へふんわり敷松葉
ほっとして落葉大地に還っていく
痛む背なはかなくなってくるのです
豆屋さん閉店煮豆にも歴史
起きたたての腰しらずとおもむろに

羽曳野市 安芸田 泰 子

門松もツリーも立てて三世代
決心がつかぬか苔固いまま
腕相撲孫に手加減されている
ときめきを抱いてゆつくり封を切る
話したいこと山ほどあつて一人なり

羽曳野市 宇都宮 ちづる

宅配弁当独居の母の異変知る
柳誌読む私を囲むスマホ族
バリアフリーお掃除ロボが散歩する
モンドセレクション取った地酒はちびちびと
人格が変れど欲しい十億円

羽曳野市 徳 山 みつこ

青い空かきませないでオスブレイ
忙しく動ける老春期最中
長生きの予感断捨離控え目に
介護の悔いを洗い流して星雲よ
くるみ餅でお茶いかがです友を呼ぶ

羽曳野市 永田 章 司

入院で時間たっぷり句は出来ず
身嗜み心の乱れ隠せない
自家製のおせち料理は貴重品
戦場へ行かず戦争する時代
民主主義ロスと思える金も喰い

羽曳野市 藤 原 大 子

物忘れ予防のメモも置き忘れ
納得をするもしないも私です
三猿はよそう一杯友つくる
柿の種蒔いて挑戦する寿命
夕焼けにほっと笑顔を貰つてた

羽曳野市 三 好 専 平

123特別意味はありません
結婚もまずはテストという時代
目には目の恐怖がつづく神の国
陋屋に老人ひとりだけの村
ここにことしているような犬に会い

羽曳野市 吉 村 久仁雄

グレイゾーンの中に正解潜んでる
絵のような景色ですぐに飽きぐる
ふわふわと生きて尻尾をつかませず
責任を負わない街にみんな長け
細胞の一つ一つが怠け癖

東大阪市 北村賢子

マイナンバ―覚えられないので仕舞う
月の表面スマホで鮮明に写る
空ろな日いつもの猫がやって来る
猫たちに我が家のペランダはオアシス
日溜りの猫しあわせな夢を見る

東大阪市 佐々木満作

交差点たった十秒何故待てぬ
林立のコンビニ食うか食われるか
テロップに知り合いの名が出たまさか
矢印の通り進むとどん詰まり
三人のカラオケ声が嘎れるまで

枚方市 海老池洋

サヨウナラ節子にゲゲゲ北の湖
知らぬが仏偽装の杭の上に住み
犬猫医増えて産科医減る寒さ
結婚記念の松にも苔のつく米寿
夕焼けの坂で人間取り戻す

枚方市 小林わかこ

回復に向かう途中の美味いお茶
思い出を辿ると祖母の温い膝
生きていると思う涙が涸れずある
温かな言葉一つで減る葉
挨拶のあの優しさに借りがある

枚方市 伊達郁夫

ちよつとだけ摘めるほどの幸探す
追いかけてみたのは秋の好奇心
枯れ葉落ち土を舐め岩を舐め
引き算に指が震えている余生
良い爺になろうと少し無理をする

枚方市 丹後屋肇

賀状拝辞束になつて喪の葉書
天候が営業マンを振り回す
饒舌が溢れ出ている句の余白
エレベーター知らぬ同士の緊張度
年金削減抗議に耳を止めている

枚方市 寺川弘一

パソコンが好きあつという間に削除する
ボールペンより修正ペンが早く減る
あなたとデートいつも素うどんだけだった
なんとなく妻はわたしを嫌つてる
透明になれるクリームありますか

枚方市 二宮紫鳳

我が未来論吉にたくす宝くじ
残り福達者で生きている証し
来年に期待促すカレンダー
老いの坂歯止め効かせるウォーキング
その笑顔幸せ行きのバスポート

枚方市 二宮山久

病み上り元気で登る鞍馬山

童謡を聞くとおふくろ思い出す

夕暮はなぜか吹きたいハーモニカ

孫電話葉に優る快復度

母の味やっとなせせたか妻の歳

藤井寺市 鈴木 いさお

奔放に生きてバランス崩さない

きやらばくを焚けば遙かな母の香よ

モノクロの画面の中の父と母

釣り糸を垂れて句想を練っている

ふる里は三英傑を生みし国

藤井寺市 高田 美代子

履き易い靴を選んで旅支度

いい加減な返事は出来ぬ性格で

日本産の大豆を撒いたオニワソト

雪やコンコと灯油売りのくるま

マンネリになりそうだからビツクリ箱

藤井寺市 伊藤 アヤ子

紅葉が染めた参道踏みしめて

減らしてはならない金と骨密度

病院で元気ですかと聞かれても

限界を感じ乍らも止めれない

縁側で仲良く眠る犬と猫

藤井寺市 太田 扶代

唇の乾きで冬を知りました

つらい話にまだ後編があるなんて

十二月ちつとも焦る事はない

十二月母の思いと娘の思い

母の形にいつか似てきた玉子焼

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

便箋の折り目すっきりした決意

字余りな慰め方をしてくれる

肩肘張ってどこかさみしい妹よ

言い勝って少し孤独の中にいる

マイナンバー何故か正気でいられない

藤井寺市 田付 絹枝

時止まり寿命も延びる舟下り

舟下り土手の柳も聞き惚れる

佐賀藩の魂宿る九年庵

絶景が包む庵に侘と寂

滝の音赤じゅうたんが詩情生む

藤井寺市 津田 シルク

女子の喧嘩言葉を挟むすぎがない

その一言で生きる力を得たリング

あれは浪費だったと今頃に気付く

猿まねの人間猿が見て笑う

欠点はございませんと鼻が言う

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

ふる里に立てば自然と深呼吸
責任ない他人に送るいい言葉
縁側の日向は老いのお友達
テロよりも恐いと思う温暖化
友逝つて施設と金の話など

藤井寺市 吉 田 喜代子

隣り合う中国人とつまむ鯨
憧れの君は一足先に消え(原節子)
十二月炬燵を出すと動かない
冬夜中失礼したい御手洗い
行きましよう十日えびすの残り福

藤井寺市 若 松 雅 枝

平凡に生きて白寿が近くなる
抽出しに幼いわたし眠ってる
我が晴着夜なべに縫ってくれた母
母を思えば不要の晴着捨てられぬ
わくわくと老いの行く先内科外科

箕面市 酒 井 紀 華

ひとり遊び上手になつて引きこもり
桐タンスかすかに残る母の影
憎めない人欠点ひとつ添いとげる
ガリ勉が恋を忘れた東大生
胸はつて歩いて転ける落し穴

箕面市 出 口 セツ子

幸か不幸か倒れる前にする手術
検査から即入院の年の暮れ
後悔をせぬよう毎日行く見舞い
私と子にいろいろ託している弱気
失敗もめげずあしたへするトライ

八尾市 高 杉 千 歩

二ヶ月の鬼よゆつくり話しましょ
英霊のいのち貰うて卒寿なり
おとし玉二千円札不思議がり
訃の葉書老衰ばかりと限らない
日々進化好奇心だけ衰えず

八尾市 寺 川 はじむ

洗脳が世界を掻き乱す怖さ
いよいよにまだまだだよという薬
便利さの裏で恐怖が待つネット
金やんの喝本物かニュータイガー
地球儀を眺め回れば皆平ら

八尾市 宮 崎 シマ子

初詣でそれぞれ違うプラン立て
遅咲きの小ぶりの花は色もよし
前を向くしかない戻れない歳だ
気安さに虚礼廃止を言いかわす
この着物にこの帯一応出したけど

八尾市 村上ミツ子

昨日今日小春日和よありがとう
もはや対岸の火事ではないぞテロ
お断りしても正月やつてくる
ふところの風邪がなかなか治らない
注ぎ足したお世辞盃からこぼれ

八尾市 山根妙子

朝シャンのかすかな香りすれ違う
伴奏はピアノ倍賞千恵子聴く
結弦が舞う氷しぶきの静やかに
原節子悼み昔の恋痛む
気の迷い紅葉の寺に置いてくる

神戸市 上田和宏

クリスマス宵の神戸に生のジャズ
ダンス靴履けば背筋がピンと伸び
眼の保養だけで鎮まる恋心
期待した成り行きにならないダンス
食べ切れば資源残せばゴミと知る

神戸市 奥澤洋次郎

病名の花が咲いてる喫茶店
東京へ企業戦士になりゆく
公平な貧乏ならば我慢する
諍いの愚かを問わず山紅葉
原発の灯とミサイルの一発と

神戸市 能勢利子

甘いなと叱ってくれた人恋し
利息だけで生活出来る筈だった
ルミナリエ重荷になってきた神戸
南天が赤くなつたと鳥の声
居るだけで空気が和む夫だった

神戸市 松井文香

バラ色の明日を信じて膝手術
気合入れ術後の一步踏み出そう
一日の長さリハビリにて耐える
病室の窓で走れる明日を見る
退院の早さ養生できぬ主婦

神戸市 山口美穂

小春日和脚へ発破をかけている
大晦日心に借りを持ったまま
千両万両初春待つように色をつけ
こぼれ種の葉牡丹だから我慢する
喪中というあいさつさみし掌を合わす

神戸市 山崎武彦

追い風にひらりと乗った草の絮
CTを透かして主治医黙り込む
あの星へつづく回廊ルミナリエ
みの虫になってゆらゆら冬籠り
自分史の青春袋綴じにする

明石市 糀谷和郎

落葉踏むかさかさ僕の噂する
くちばしでつつく疑い深い性
少し空気抜けたボールは手になじむ
決心がつかぬ炎が揺れている
日ノ丸の白に平和を縫い込める

芦屋市 黒田能子

この歳で知らない内緒まだあった
産まれたていのちとつても柔らかい
いい波だわたしのために打ち寄せる
ドラマならハッピーエンドこのあたり
十八歳選挙権だけ一人立ち

芦屋市 竹山千賀子

お願いにゆらり頷く仏の灯
おしゃべりの輪から抜け出しほっとする
傲慢が浅瀬で転び溺れてる
核心に触れると止まるペンの先
石ころに瞬発力を試される

尼崎市 市坪武臣

初恋は心の底に包み置く
失敗が仲間意識を強くして
骨折り損それでもきつと花は咲く
まあまあと仲に入って採めに採め
ジャンプする明日への助走欠かさない

尼崎市 加川靖鬼

ポツリポツリ雫が話しかけてくる
大根の白さまばゆい天日干し
ぐつぐつと鱈ダイコンで誕生日
紅一点嵐の種になる気配
のら猫の今日一日を無事に生く

尼崎市 藤井宏造

帰り道赤提灯が邪魔をする
気がつけば旗振り役にされていた
動揺を見せないために目を閉じる
工面した六千円でジャンボ買う
廃線のレールの錆へ冬日差す

尼崎市 藤岡りこ

いつだって気分は十も若いのに
ペット用私のドレスより高い
ドレスより鉛を喜ぶ七五三
はつきりと聞くのが恐い内緒事
若ぶつてスマホ手にして四苦八苦

尼崎市 山田耕治

蠟梅の垣根の下の朝あるき
球根を犬のいぬ間に埋めておく
来年も来られますよう初詣で
一泊二日ばくは悲しい犬ホテル
好きですと今日は引き金引きましよう

加西市 金川宣子

五郎丸ラグビー界を背負つて立つ
年末の赤穂浪士が好きな父

アラフォーの卵子が焦るお年頃

五線譜のように陽気な母のしわ

言い過ぎた口にチャックを締められる

川西市 大坪一徳

有り難や今日も昨日とほぼ同じ
のほほんと生きているから句が出来ぬ

まあいいか先のことなど儂や知らぬ

嫌なこと三猿主義でクリアする

照れ隠しつい乱暴な口をきく

川西市 山口不動

朝起きて日にちと曜日声に出す

癒しです無念無想の落葉掃き

我が街は明日も晴れるよ夕茜

小春日やテロからはるか遠く住み

義弟来るテレビ音量高くする

篠山市 酒井健二

カニ食いに行くにも気合要りそうなおつちよこちよい私の影に叱られる

割りばしがきれいに鳴って吹っ切れる

日替りの星座占いなら出来る

厭戦をなお駆り立てて舞う枯れ葉

篠山市 酒井真由

軸足がぶれる修業がまだ足りぬ

変身をとげたか坐禅組んでいる

夜半さめて聴くまぼろしのジャズピアノ

いそいそと迎えてくれた義姉が逝く

真珠選るように黒豆選り分ける

三田市 足立つな子

胸中のもやもや癒えてひつじ去る

無理しない思うに任せ暮らすこと

ポジティブな口説き上手に絆される

患つてなお意気盛んな年の暮れ

父白寿諸手をあげて勢揃い

三田市 石原歳子

夕日みて遺影に淋しさをもらす

暗証番号見事に銀行で忘れ

健康の記事を切り抜くのは自然

ポストまで走る捻った句を持つて

ありがたい霜焼けしない温暖化

三田市 上垣キヨミ

無礼講苦虫噛んでいる上司

嫁ぐ子の手紙に頬を伝うもの

生きてさえいれば楽しい世が巡る

高級なおせちに箸が躊躇する

代引が届くやすやす受けた留守

三田市 尾崎 一子

今日佳き日二人を照らす金屏風

非戦の翁妖怪友に冥土旅

人生を照らし続けている祈り

三食に満足母の眠りが美しい

悲しみに秋が素通り夕焼ける

三田市 北野 哲男

ダイヤ婚生命線の良き長さ

Uターンゴム長愛し達者です

賀状では駄洒落の友も畏まり

寝てからもやっていますクラス会

争った彼の遺影へ手を合わす

三田市 久保田 千代

振り出しに戻る勇気をまだ捨てず

高速道路逆走だけはしたくない

土壇場に座り直したのは女

いつまでの命か孫はもう出来ぬ

民生という名で近所様子見る

三田市 野口 晶子

万歩計付けずに歩く冬の朝

虹に棲む鬼出ていかずいまだ雨

戯れ言がはかなく見える愚直者

違和感もなくなり武士の老い

この先も朝に夕餉に税を食む

三田市 福田 好文

爆買い族バーゲンセール目もくれず

望郷の念を加齢が深くする

負けないと絶対取れぬ銀メダル

火葬場がウエイト制を考慮中

長文の弔電名前しか読まぬ

三田市 堀 正和

マイナンバー国から届く迷子札

妻は鶴僕はヒコキ折っている

了解と二文字だけの子のメール

菓子よりも土産話をして欲しい

計画を百歳までに練り直す

宝塚市 田中 章子

三度目の話初めて聞くように

一人では背負いきれない悩みある

燃やすゴミと一緒に燃やしたい悩み

葬儀にはチャップリンの曲と娘にたのむ

合格の欲び両手輪を描く

西宮市 秋元 てる

年のせいと逃げ廻るのも飽きて来て

卒寿にもそれなりの絵がと励まされ

車検はいい人間ドックは高値すぎる

不覚にも後ろ姿に背かれた

ああ今日も一日生きた温い床

西宮市 足立 茂

定年で賞味期限が切れました
タバコ一本吸えば仕上がるカップ麺
重箱の角をつついて孤立する
「何とかしろ」社長の指示が飛ぶ黒字
夜遊びが過ぎて寝不足金不足

西宮市 緒方 美津子

MRJ 離陸しました感嘆符
菊日和蹴鞠蹴る音天翔る
にわとりは卵取ってもおこらない
嫁に杓文字渡すと餅はピザになり
お節のコマーシャルと綱引き中

西宮市 片山 忠

老人に生きる課題が多すぎる
煙草より吸うた自分を責めなさい
赤を着る夫軟弱すぎないか
朝ドラにちよつと気になる過去の人
いじめ癖つくくと人相まで変わる

西宮市 亀岡 哲子

集う日の笑顔ミックスベジタブル
ロボットを使いこなして生きんかな
ドクターにご無沙汰ばかり年を越す
のほほんといひにち葉がよく効いた
梅田発西宮までサンセット

西宮市 福島 弘子

待ちかねた新米を捏ね「だまこ鍋」
老いの舵楽な方へと行きたがる
時々は充電しとこう喜寿の坂
招き猫の御利益露賞もらう
町工場の工夫が宇宙飛んでいる

西脇市 七反田 順子

ジャズの街ニューオリンズに行きたいな
ごきげんでジャズを聞いている山の神
ロボットがヒト科さしおきぬきんでる
鐘の音が古刹の庭に染みていく
リング柿ミカン人參かぜ予防

姫路市 古川 奮水

一泊の旅をする気だ有志寄る
ミステリー行先なんぞ異議は無い
揺れるバス車中の御酒は控え目に
憧れた坂でも年か重い足
これ以上吞ますと旅が暗くなる

奈良県 安福 和夫

久々の岡山弁に亡母浮かぶ
ふる里へタイムスリップ話咲く
趣味以外アポに追われぬ日々楽し
世話要らず何はなくとも五七五
生意気に英語川柳模索する

奈良県 渡辺 富子

譲られた席ではのほの読む詩集
ほんわか春運び込む娘のメー
寒風へ立ち向かう杖軋み出す
病む夫のゴッホの模写へ冬陽差す
夫の絵体調を知るパロメーター

奈良県 谷川 憲

カレンター良いこと願ひ付け替える
不器用に生きた証の角を持つ
キーンザワザワ居座ったままの耳鳴り
花園の負けたチームへ大拍手
はやいては戒められてまたほやく

奈良県 加門 萌子

ときめいた去年だったか自問する
好奇心だけは無闇に持つて来た
わたくしと夫どちらが先に逝く
深情けの友は介護に明け暮れる
よく出来た人には神は荷を課すか

奈良県 阿部 紀子

香の為身代かけた女がいる
伽羅の香とはなんぞやと入門を
香を聞く芳醇に身を和ませる
源氏香深い知識を求められ
香道は稽古を超えて深みあり

奈良県 大久保 眞澄

脳みそが欠けて神経太くなる
代謝異常か物忘れだけ進む
内緒話なぜか聞こえてしまう耳
夕焼けがきれいこうしちやいられない
八起きめは杖と人の手借りました

奈良県 辻内 げんえい

ISに欠片さえない和の心
師の逝去喪中はがきで知るつらさ
ひしひしと迫りくる古い立ち向かう
押し付けられそれでも嬉し孫の世話
学芸会主役の孫が「ぜひ来てね」

奈良県 米田 恭昌

祝日の国旗右翼よばわりされている
間違い電話孤老嬉しく放さない
夫々の持ち味出しているおでん
雨男も老いたか旅は晴れ続き
歳末に届く訃報に籠締める

生駒市 飛 永 ぶりこ

三猿の教え新たに初詣で
下呂のお湯ほんにすべすべ我浄め
舞い込んだ蟹のセツトの福の神
三百人夫の歌も様になる
あほですな気忙し増えるお人好し

榎原市 居谷 真理子

和歌山市 磯部 義雄

独りではない絶望は許されぬ

ポジティブに生きれば口も手も動く

人間の哀れ服着て靴履いて

白黒をつける議論に湯気が立つ

はしゃごうよ嘘のツリーに嘘の雪

元旦にびっくりぼんの計報来る

天折の君は翼を持っていた

記憶よりメモを片手のお買物

女人結界オトコ脆くて正直で

花植える鉢と相談して決める

香芝市 大内 朝子

和歌山市 上田 紀子

梅一輪ぼつと希望の香を放つ

この指に止まれ幸せきて止まれ

ちっほけな目標抱いて生きる糧

拳骨を開けば澄んだ青い空

七人の敵も年取り庇い合う

暖かい言葉を探す冬の街

凹む日は派手な色着て闊歩する

誰一人へこむ私に気が付かず

身についた笑顔で丸いおつき合い

言い足りず中途半端に新年度

桜井市 安土 理恵

和歌山市 喜田 准一

重ね着の一枚ふえる里暮し

こだわった視野の狭さが気に掛かる

うたた寝に毛布をかけるほどの愛

夢遠くトイレばかりが近くなり

妙薬を内緒でポトリ冬至粥

里の夢紡いで明日を切り拓く

背筋ピン大股歩きしてごらん

溜め込まず愚痴は一気に吐き出そう

泣きたくて雪を見たくて湖西線

改善と言うてもカネの要る話

大和郡山市 坊農 柳弘

和歌山市 楠見 章子

見て聞いて食べてゆっくり除夜の鐘

カレンダーの印病院だけじゃ無い

その先の修羅は語らぬ屠蘇の味

色々あったけれども今はもう時効

ありがとうが生きてる門松のお洒落

手も足も使いレトロな暮らし向き

愛された記憶の中は雪化粧

冗談が解る男で良くもてる

聞き役の位置で達者な母の笑み

温い手に触れて力みが失せていく

和歌山市 坂部 紀久子

原節子と青春時代同じです

お世辞下手同士で長いお付き合い

眠くなってきたから眠る有難さ

その他多勢に慣れて努力を欠いている

勧誘の電話と喋っただけの今日

和歌山市 武本 碧

ゆとり教育低学力の置き土産

親指の存在感が照れている

ハンドルの遊びに乗っていたジョーク

指先のペン舐舐が吐く深呼吸

双六の上がり始まりかも知れぬ

和歌山市 玉置 当代

風向きが変わり予定が狂いだす

目標へこつこつ進むかたつむり

赤い実を求め小鳥が来る師走

指をさすかなた平和な日が昇る

三猿のようにはいかぬ天の邪鬼

和歌山市 土屋 起世子

雑用の好きな婆ちゃんよく持てる

頑張りや無理するなよと息子言う

外税のラベルで脳を鍛えてる

断りが見つからなくて集會に

充電も漏電もして子等去った

和歌山市 福井 菜摘

たとえばの友の助言が温かい

土壇場を笑い袋で切り抜ける

崖つ縁絆がくれた縄梯子

回り道いつか生かせる時が来る

感動を静かにたたむ裏表紙

和歌山市 古久保 和子

ブランコに夕日と僕と家の鍵

地下街で迷い都会が嫌になる

大股で歩くと迷い吹つ切れる

吊り革でいっしょに揺れる他人様

秋ひと日皇帝タリヤ咲いた庭

和歌山市 堀 富美子

笑い袋おすそ分けする昨日今日

独り居も師走の声が忙しない

くじけそうなひと日に温い友の声

喜怒哀楽セーブして行くむつかしさ

残された命を燃やす花の意地

和歌山市 松尾 和香

エンピツが走る人生道しるべ

ひとり旅夕日が包む今日の幸

兄弟の記憶をつなぐ里の家

記憶辿れば会いたい人の顔ばかり

女心揺れて八十路の別れ道

和歌山市 松原寿子

切り替えも出来ずに憂い引き摺って
振り向けば闇が迫ってくる不安

胸の穴埋めるホットな立ち話

季節はずれの花から貰う日のパワ―

ここからの切符人生賭けてみる

岩出市 藤原ほのか

残照に祖国を想う羅針盤

揺れながら一筋の路登りきる

うすれゆく記憶にしがみついている

遠い日の記憶支えに生きてゆく

会釈され記憶を手繰りよせている

海南市 小谷小雪

三日ほど喪中はがきへ独り言

隅っこで菌みがき朝を企画する

峠から結び直そう靴の紐

あなたにもお疲れさまをさし上げる

いつまでも息子は母の恋人だ

海南市 堂上泰女

歌第九やつばり性に合っている

黄昏れて感謝ばかりが口に出る

小一の挨拶倍にして誉める

まだ欲があるから生きていけそうだ

紅葉が永観堂を偲ばせる

紀の川市 宇野幹子

他所の子と比べはしない子は宝

まっすぐな貴方が恐い導火線

七回忌居間にも戻る笑い声

さよならも言わずポトリと寒椿

静電気ピリリと君が近くなる

紀の川市 北山絹子

雲が流れて連れ添う人の丸い背

夜が伸びて肩の凝らないマンガ読む

就活へいよいよ腹を据えている

草枯らし蒔いて一息つく農夫

大黒柱今は威厳を損なわれ

紀の川市 楠原富香

色あせた過去ぬり替える花紅葉

理想には遠いが青い鳥といる

未来への梯子外した原子力

想定外の中で健気に生きている

ゆとりある未来夢見るこまねずみ

紀の川市 辻内次根

中国を想った頃の杜甫李白

渋柿の太木がある古い家

握る手を開くと風はもういない

天辺で人間界を観るカラス

樹を伐ってどこに干しても日が当たる

田辺市 岡本昇

夕映えに金糸銀糸のすすきの穂
迷彩服似合っています安倍総理
包丁の切れ味知っている刺身
おおきにと舞妓で持っている京都
落陽と軍艦島はよく似合う

鳥取県 石谷美恵子

文化祭参加疲れが心地よい
文化の日までは大事にされた菊
働こうまだ炊事場で役に立つ
たとう紙へ眠る娘の七五三
盃を伏せやり合ったなあ亡友よ

鳥取県 岩崎和子

早やわたし米寿まじかの背を伸ばす
年のせい午後は眠くて目を閉じる
寒くても皆んな我慢の冬を越す
北国の次兄旅立ち寒さ増す
雪積もる窓辺に義姉が只一人

鳥取県 斉尾くにこ

日暮れまで遊んでツンと淋しくて
アドリブは効かず文脈などもなく
おかえりなさいと炊飯器が鳴った
なぐさめがあると信じて弱音吐く
ポツンと残る未消化の覚え書き

鳥取県 竹信照彦

北海道の雪懐かしや山陰路
煩惱の起伏が創る自由吟
感動もやはり煩惱なんだろう
放浪も煩惱なのか山頭火
のほほんと炬燵で一句錬る私

鳥取県 西谷悦子

庇い合う短所普通のことになり
子育て期旬であったと今思う
虚勢張るわたしに誰も気付かない
人間の森をフワフワ泳いでる
思想の違い我を張らないで妥協する

鳥取県 細田裕花

残高がぶつくりとある体脂肪
脛の傷夢を齧った跡である
辛口がボンボン真実は痛い
おしゃべりな舌は雑食系である
冬木立夢の続きを抱いている

鳥取県 松川行男

鈴虫が支援の餌を残してる
思考する発言すれば痴呆だと
それ軍歌思い出してる首を振り
歌わない妻が横から寝息たて
赤い羽根胸に飾れば冬木立

鳥取県 山下節子

憎み抜くほどの恨みはありません
天変地異狂わせたのは人間か
ローカル線一つはずして帰れない
聞き上手ぎくしゃくの仲治めまず
嫁姑何でぎくしゃくするのかな

鳥取市 池澤大鯨

五体満足揃った蟹でウン万円
重いもの選んで買ったら脱皮前
なんぞごと無ければ蟹は食べられぬ
カニカマボコ黙って供せばわからない
カニじゃないを売り物にする美味である

鳥取市 加藤茶人

投稿でまだ元気だな友思う
失敗は金で買えない宝物
長生きもほどほど願う安楽死
母として満点妻としてはゼロ
五郎丸ポーズで寄付の金募る

鳥取市 岸本孝子

冗談が気安く言える顔でない
談話室入ってみれば喫煙所
半額の売切れご免なら並ぶ
中味どうあれ結納飾り派手にする
崩し字の上手と下手は紙一重

鳥取市 岸本宏章

松葉蟹が並ぶと活気づく市場
これからの夫婦男女と限らない
折り入つての頼みに弱くなつてきた
一本杉なぜか私に見えてくる
川柳がいのち演歌もまたいのち

鳥取市 倉益一瑤

美しい地球に核という魔物
写真展無言で平和訴える
毘だなど甘い話を聞いている
頑な心とかしたのは涙
ドラマのようにしたい私のエンディング

鳥取市 鈴木一弘

生涯は折れて曲つて尊ばれ
飾り窓開けて地獄が見えてきた
おそろしや神のみぞしる下剋上
神だのみノリト経文道しるべ
一心に祈ることだま風にのれ

鳥取市 田中憧子

いつ見ても同じ姿勢の母介護
記憶力寝たきりの母衰えず
十数年介護してもプロじゃない
黄信号で止まるとクラクションが鳴る
仔うさが私の母性目覚めさせ

鳥取市 棚田 大

いがみ合う落ちこぼれたらまたこぼれ
雪道は芸術的に作りたいたい

あちこちに恋心生む秋の山

不景気でも恋の話に活気湧く

紅葉が世をホットにし去っていく

鳥取市 谷口 回春子

散歩する心はいつも別世界

善人と言うが本音はお人好し

年金暮らし時代遅れも板につく

川柳が前頭葉を占拠する

孫二人両手に華と恵比須顔

鳥取市 中村 金祥

マイナンバー漏れても俺は騙されぬ

予防接種受けに行つては風邪もらい

子と読んだ絵本を見つげ涙ぐむ

死んだふりしてもお腹は空いてくる

憎しみを慈愛に変える母の顔

鳥取市 永原 昌鼓

現役のパトン渡せぬ主婦の椅子

人間は欲張り金も名も欲しい

ポランティアまずは絵本の読み聞かせ

母ゆずり背中也丸く老い進む

恙無く今日も暮れたよ有難う

鳥取市 夏目 一粹

気の弱い月だ見ぬ間に消えている
つぎはぎの夢みていつも叶わない

初対面また会えるかも会えぬかも

巻き戻し無理と知りつつ巻き戻す

辛抱の二文字が遠くなつてゆく

鳥取市 西川 和子

また歳を貰いガタガタ増すばかり

鼠目に見ても若いと言えぬ影

歳月に屋根も柱もガタガタに

ありがたい困いの中で生かされる

生き抜いて可も無く不可も無く終る

鳥取市 春木 圭一郎

助けたり助けてもらい今がある

嫌だった辛かった事記録する

胸を張りいつも上向き生きてるか

幸せにつながる背中真つ直ぐに

幸福な人の近くにいて学ぶ

鳥取市 平尾 菜美

都合いい天下りですもどかしい

ときめいた夢が未来へ突つ走る

類もつて集まる草に乾杯を

美しく老いたいこの身もどかしい

はばたけぬ夢たぐり寄せ抱き締める

鳥取市 山下 凱柳

ボケてないわね妻が毎日確かめる
全没に納得できぬまま帰る
財産を残し子供がもめにもめ
右カーブちよつと気になる総理殿
都合悪い事聞かぬようしてゐる耳

鳥取市 吉田 孔美子

スカートの折目向学心燃えた
シャツにしわズボンに葉っぱやばいかも
類焼の償い道は真っ直ぐに
万華鏡のような顔で聞いている
壁Downのポバイの腕に目眩する

鳥取市 吉田 弘子

晩秋の斜陽味方に冬仕度
親孝行死語になつてく年代差
パソコンが何だ手書きに情を込め
少子化の未来を変える育児法
晩さん会文化遺産が仲間入り

鳥取市 両川 無限

大空をキャンパスにする子の未来
終章へ結び直している絆
未来へと向かつて落ちる砂時計
スニーカー履いて輝く今日にする
シャネル五の香りと毘に落ちました

倉吉市 猪川 由美子

句作りの可能ならちは脳錆びず
生きるとは失うことと認識す
貧困の文字が紙面によく躍る
念のため卵子凍結やつておく
マイナンバー新しの詐欺が流行り出す

倉吉市 牧野 芳光

油断して頭の中に巣ができる
大会が終りクラゲに近くなる
天文台星の小言を聴いている
老人は後姿で胸を張る
老境へ行く毎日が初体験

倉吉市 山中 康子

家事炊事嫁に任せているお蔭
一対一で話し透き通る耳
よく噛むをモットーにする一人膳
爆買いを横目に向かう見切り品
納得の妥協仕方なしのだきょう

米子市 吉田 陽子

重箱に一泡ふかそお正月
断捨離をしたり柚の木植えたりと
好きだよと言ってくれない人が好き
母を看た姉だ私が引受ける
キャッシュレス社会財布に顔がない

米子市 後藤 宏之

遅しく時々わるいこともする
片付けの侍呼んで大掃除
よく嘔んで食べていますかスケジュール
過密スケジュール身体泣き出した
胸さわぎあの人が酒追加した

米子市 後藤 美恵子

パブル期に騒いだ街が眠ってる
三途の川渡る信号赤のまま
本を読む奉仕が老化防止する
マスクせず街を歩けるありがたさ
故郷の川昔話が流れてる

米子市 竹村 紀の治

相応に摩耗している蝶番
戦争を見てきた人が惚けてきた
じわじわとくるから困る認知症
人間ドック申年の命乞い
無駄だとは思いますがブルウォーキング

米子市 中原 章子

ゆっくりと考えやっと思ひ出す
親しんだ湯呑みが割れて寿命知る
失った哀しさからは逃げられぬ
健診に自慢のできる骨密度
まだ生きる下着買ひ足し年暮れる

米子市 成田 雨奇

宝くじドーベルマンをまず買おう
消費税また上がったも酒は飲む
予防線張って待つのに妻無言
うまい酒耳に琴の音流れだす
初デートはじめて挫折知った夏

鳥根県 伊藤 寿美

ささくれた冬の踵を撫でている
昨日のことが思い出せずにいる日記
贅沢に馴れた暮らしの骨密度
亡夫も独りで聞いていますね除夜の鐘
飽食の街で飢えてた少女A

松江市 石橋 芳山

ミキサーの中でアラブとユダヤ人
会話する双曲線は交わらず
ドストスと階段降りてくる不安
裏側を見たがるなんて爬虫類
全身に独りが染みてくる深夜

松江市 小川 注湖

お節料理伊勢海老の腰真つ直ぐだ
僕の叫び分かってくれた山こだま
平和だな仕事があつて飯を喰う
新卒の師走靴裏減っている
高らかにセンター歌う君が代を

松江市 川本 畔

病む友を思う夕暮れフライパン
久し振り大根少し厚切りに
膝のこと誰もが病むと言うけれど
少しだけ貰い泣きして送り出す
十二月暮れは早し泣きやすし

松江市 松本 知恵子

さらさらとシニア講座でペン動く
わだかまりコショウの粒が引つ掛かる
柚子の香をほんのり添えておもてなし
蜘蛛の糸ブツツリ切れた善と悪
夕焼けの終り湖畔は賑わって

松江市 松本文子

バラの香り慕い続ける野辺の花
一日一善クリップで止めておく
勝っても負けてもナムアマダブツと生きていく
その器ではなかつた坂を下りていく
一粒の一人だ負けてはいられない

出雲市 石倉 美佐子

例えばの話は下手な雪だるま
獅子舞が来る笛や太鼓で賑やかに
赤白の椿で吾が家も美しく
きゅつきゅつと帯が鳴ってる三ヶ日
八十路坂夫と共に歩く路

出雲市 伊藤 玲子

真っ赤に燃えポインセチアも幸祈る
初売りの声の賑やか独りには
鉛筆と跳ねて寂しさまぎらわす
年金月待ってる孫もわたくしも
貧富みな平に雪の優しさよ

出雲市 岸 桂子

みかんむく手からしずかに冬が来る
人生は成るようになる波の音
名月を眺め心の錆おとす
花に水花は感謝の彩で咲く
スタイルは抜群ながら出雲弁

出雲市 小白金 房子

一番列車渡る鉄橋灯におきる
ひと枝の榊に宿る感謝祭
大根の美肌を刻む冬の味
割り箸に我が家の味がしみている
古着から思考を生かす裁ちはさみ

出雲市 多久和 敬子

冷や汗を拭くハンカチが小さくて
勝つ事を覚えた孫の目に涙
父越えた母越えるまで頑張ろう
不器用さ頑固さまでも似た二人
お喋りは苦手スマホのゆび達者

出雲市 竹 治 ちかし

悔やみ欄載つておかしくない齡
平凡な暮らしも老いの幸と知る
カニカマと言う名の蟹でない悩み
子育ての早さは終えてから気付く
話したくないと話している黙秘

出雲市 富 田 蘭 水

残菊に残り時間を合わせみる
忍という一字が余命生かして
死ぬるまで恋は人生秘でかざる
米寿を祝う無常の明日の風
ありがたい余命がつなぐボランテア

雲南市 松 本 昌

生きる事こんなに辛い検査受け
生きている喜び検査異常なし
昼か夜か胃ろうの友よく眠り
つかの間の晴れ間に老妻草むしり
雪花菜食べて思ひは戦中派

岡山県 池 田 たか子

それからを聞かない友の手が温い
価値観は違つたままに半世紀
すり切れた数珠に別れの数知れず
弱音など吐くとな月が冴え渡る
スランプか認知の兆しかも知れぬ

岡山県 田 中 恵

それ急げ進めと影が指図する
悪友がそろそろプラン立てにくる
見計つて葱や大根提げて来る
腹ペコの猫が帰ってくる日暮れ
絶世の昭和の美女も天国へ

岡山市 工 藤 千代子

マッさんからあさへふる里が変わる
シルバー手帳誰にも見せたことがない
大掃除昔と遊び暮れてゆく
血の臭いする地球儀を捨てようか
無駄使い多いと日本叱られる

岡山市 丹 下 凱 夫

腰掛けた椅子がぬきさしならぬ席
居酒屋のいつもの席に敵がいる
電飾の街路樹くたびれ果てている
不摂生過ぎて血圧トランポリン
身体髪膚トラブルばかりする

岡山市 永 見 心 咲

聞き合い腐ってしまう箱みかん
フライングまたしてしまふ恋一途
オリオンが近い綵花が降ってくる
さで終わる昔話は耳朶に棲む
怖いのもぐら叩きに精を出す

岡山市 前田 恵美子

困ったら朝日の中をただ歩く
肩の荷の重さ忘れて草むしり
松茸を買ったと写真撮る夫
テレビ見に近所の子供来た昭和
泣けたならきつと楽だが笑う顔

笠岡市 藤井 智史

休日の最後はいつもサザエさん
婚活で三点シユート決めてやる
難問に珍問 恋は進まない
来年は春を掴むと占い師
漆黒の帳の前で愛を待つ

広島市 岸本 清

天空の庭で味わうバーベキュー
採りたての野菜のような今朝の妻
たいがいのブームは女子が火をつける
戦力にならぬが僕は妻の駒
旬の物食べて季節を謳歌する

竹原市 石原 淑子

古書店の隅で見果てぬ夢を見る
公園のとどこころにトランベツト
おでん鍋囲んだ笑顔もういない
古里の鳶にまかせた母の家
宇宙葬汚すことにはなるまいか

竹原市 岩本 笑子

雲がきれいな仕事帰りの夫といふ
南天の赤は希望の赤だろう
砂時計夢の移ろうままにして
趣味多忙ゆらりゆらりと句を作る
表裏手のひらにある人生譜

府中市 藤岡 ヒデコ

新米に白菜漬けて進む食
頭より胃腸の方が良く動く
最後の晚餐味噌汁を所望する
誇張せぬ自分に合うた万歩計
未来の事心配しても語らない

宇部市 平田 実男

戦力にならぬのもいる永田町
つまずいた石がだんだん小さくなる
プラス面ばかりではない子と同居
女運良かったことは妻に伏せ
アテントをしている友を笑えない



麻生路郎
読本

『麻生路郎読本』

A5判 514頁

頒価 三〇〇〇円(郵送料共)

希望者は事務所まで

川柳塔の

川柳讃歌

⑬

木津川 計

吾もまたかくあれ夕映えの紅葉

中崎 深雪

七十歳の井上靖が日本経済新聞に寄せた。「一日の終わりに夕暮れがやってくるように、人生の終わりに夕暮れはやって来る。夕暮れは落日に飾られたり、残照に彩られたりして、なかなか華やかなものである。人生の夕暮れもまた同じであるに違いない。……こうした老の華やぎのあとに、死は冷酷に、あるいは厳然として控えている」と。井上靖は肺癌になり83で静かに逝った。深雪さんも「夕映えの紅葉」のように美しく、やがては従容と。

終点です情け容赦のない電車

安土 理恵

詩人岡本弥太の「白牡丹図」である。「白牡丹の花を捧げるもの／剣を差して急ぐもの／日の光青く果てなく／この道をたれもかへらぬ」。昔は果てない道を歩いたが、今は終末行きの電車に乗り、かへらぬ旅を続ける。

井上靖に戻るなら、「冷酷に、あるいは厳然として控えている」死に向けた旅は、ある日「情け容赦」もなく「終点」を告げられるのだ。マドンナだった理恵さんにも待つ終わりのある旅である。遠い先でありますように。

蕭蕭と無縁社会の風が吹く

奥澤 洋次郎

永井荷風は遺言状に「一、余死する時葬式無用なり。死体は普通の自動車に載せ直に火葬場に送り骨は拾うに及ばず。墓石建立亦無用なり。新聞紙に死亡記事など出す事元より無用。一、葬式不執行の理由は御神輿の如き靈柩自動車を好まず、又紙製の造花などつけたる花輪を嫌うためなり」と記した。59年4月30日、胃潰瘍で吐血死、79歳だった。血族すべてと義絶、無縁の先駆けだった。

蕭蕭と吹く風だが洋次郎さんには温風が。

ほほえみを磨いておこう君のため

武本 碧

川崎洋の詩「ほほえみ」を思い出す。「ピールには枝豆／カレーライスには福神漬け／夕焼けには赤とんぼ／花には風／サンマには青い蜜柑の酸／アダムにはいちじくの葉／青空には白馬／ライオンには縞馬／富士山には月見草／塀には落書／やくざには唐獅子牡丹／花見にはけんか／雪にはカラス／五寸釘には

薬人形／ほほえみ には ほほえみ
碧さん、優しく柔らかいほほえみを磨こう。
「君のため」だけではなく、貴女のためにも。
敬老の日だけ老人らしくする

竹村 紀の治

老いを褒める言葉は実は少ない。老練、老成、長老、好好爺というふうだが、既にめられ、自嘲的な言葉は残念が多い。老残、老衰、老翁、老廢、老朽、老眼、老兵……。

老残の老人が国に見棄てられようとしている。「経済の格差は雪崩のように進行しつつある」と五木寛之は現状を見ようとしない老人たちに「高齢者たちの将来は、いま何の保障もない」との警鐘を鳴らし続けている。

紀の治さん、敬老の日は老人らしい達眼で。

希望者を募れば惜しい人が辞め

伏見 雅明

働く世代も容易ではない。約4割の非正規雇用でこの国は維持される。するとどうなるか。40代の息子がリストラで親元に戻ると80歳の父親の生活保護が打ち切られた。非正規で働く30代の子ども2人を養うために定年後も働き続ける父親……。昨年のNHKスペシャル「老人漂流社会 親子共倒れ」の悲劇だ。雅明さん、世の中転倒ですね。僕は泣きた

い。
〔上方芸能〕発行人

自選集

小島蘭幸

師の句碑に会うわたくしの句碑に会う
父の墓から見える幻の塔だ
うしろ姿がやさしくなったねと妻よ
ポーナスが出たのかケータイが鳴らぬ
おかあさんがいないさみしいはるがくる

新家完司

逆走せぬようポケテストを受ける
難民が流れる深い深い闇
テロ対策コタツで丸くなっている
自立心旺盛ひとり屋台酒
胴体着陸ボタンキューと眠る

津守柳伸

ルミナリエ亡母の笑顔がだぶります
柿たわわ小鳥ついでむ談山寺
ストレスを消すしば漬を切りきざむ
洗濯日ハミングが出る秋日和
主婦として試行錯誤の炊飯器

遠山可住

責任はない じいちゃん子ばあちゃん子
ばあちゃんのご馳走はまだ戦時中
九十のあとは忘れて盆が来る
古希からの風 何色に染めようか
過疎二人お地藏さんと見る夕陽

都倉求芽

赤い花だけがあちらを向いている
もみ消した手のひらいつまでも渴く
マイペース甘さも少し混ぜておく
反射テープまさしく老いの靴である
またしぐれ傘お借りする日がつづく

土橋螢

丸坊主では侍はつとまらぬ
仏さんの前で膝を崩して畏まる
美しい花 美しい仏さま
唇を噛んで耐えねばならぬこと
当然のように夫婦をしています

西出楓楽

七十七方程式がまだ解けぬ
隠し味ほどの嘘から発芽する
マニユキアでもしようか心塞ぐ日は
べんちゃらに刺と毒とが盛つてある
いい一日だった夕日に手を合わす

仁部四郎

八十路きて別人と識る妻の顔
鏡には八十路の顔の裏見せぬ
八十路日本の歴史拾い読み
国籍を八十路半ばで自覚する
自分史の目次八十路でまだ未定

林瑞枝

波の高い台場に立って亡父を呼ぶ
笑顔よし女医さん兄のお気に入り
東京から帰った兄の良い笑顔
バスに乗りおくれ農家の茶に招ばれ
プランコを降りると砂に蟻の列

前たもつ

金星を見上げあかつきどの辺り
降誕が根付かないままクリスマス
何んでも嘔めと入歯齒科医に送られる
程々の年金うれし定年後
いつまでも変わらぬものを追い求め

政岡日枝子

日々広がっていく少年の地図よ
青年になって地図にも彩がつき
完全な地図にするのは三代目
肝心な処が抜けている地図に
だんだんにどうでもよいと思う地図

三宅保州

落葉樹お前も裸一貫だ
じっとして雪を見つめている金魚
ハチャトリアン限定仮面舞踏会
パトカーを追跡行く先を探る
劇薬と貼った秘蔵のウイスキー

宮西弥生

足元のゴミも揺れてる年の暮れ
ざくざくとネギも言葉もきざみかた
四角にも丸にもならず隅に居る
どの彩を足しても熟女にはなれず
葡萄酒めらめら飲んで火になった

八木千代

りんりん
抽出しの中から鈴が呼んでいる
しばらく鳴らす相談したい事もあるし
響くものだけを尋ねてきた旅路
りんりんと響く小さな鈴に遇う
りんりりと身の内からも響くもの

両川洋々

安保法の先に赤紙きつと待つ
被災地のネジをあの日に巻き戻せ
ワインには媚薬を少し混ぜておく
支持率は下げても消費税を上げ
オキナワの基地よジュゴンを泣かす気か

板尾岳人

なんやかや言うても母は美しい
美しい母の乳房をもう一度
空気銃で後方支援するいくさ
禁じられた遊びしている神が居り
竹槍をテロ集団に輸出せよ

奥田みつ子

秋晴れ吟行その名も床し妙心寺
細枝に真紅の紅葉いたいたし
ドレスよりエプロン似合う娘に育ち
はつきりと返事の出来る子が二人
ふつくらと卵に目鼻初孫よ

川上大輪

欲しいのは若さ欲張りなんだから
父の歳そこから先の道がない
花が咲くまでの楽しみだつてある
あちこちにアベノミクスの罿がある
出棺後マイナンバーが届けられ

小西雄々

何も無い部屋でも母がいて温い
火の息は見せず隣とお付き合い
口ひらく蜷に欲しい物がある
可愛げの無い受付は社の空気
雨傘を差すと兵隊らしくない

斉藤 焔

そして花束をしつとり抱く冬野
いのちって重たかろうな土人形
あくまでも白にこだわる雪うさぎ
どの子にも輝く未来くれる星
ふるさとの香りいたたくスチューベン

第4回 広島県川柳協会誌上大会

課題と選者 (各題2句・3名共選)

「祈り」	┌───┐	小松 好子	共選
		高橋 鬼焼	
		北川 拓治	
「自由吟」	┌───┐	福田 淳子	共選
		林 武志	
		新家 完司	

投句要領 規定の用紙(コピー可)または

B5用紙に2題4句を連記のこと

投句料 1,000円(定額小為替)作品発表誌呈

締切 2月末日(当日消印有効)

投句先・及び連絡先

〒739-0612 大竹市油見2丁目2-29

弘兼 秀子 宛

TEL/FAX 0827-52-7611

主催 広島県川柳協会

川柳阪南創立30周年記念川柳大会

○4月3日(日) 11時30分開場

○阪南市立文化センター サラダホール
(南海尾崎駅下車山側徒歩5分)

○事前投句「森」日野 愿 選
ハガキに1句 2月29日締切

○宿題(各題2句 欠席投句拝辞)

「拳」岩佐ダン吉 選

「たまご」岩田 明子 選

「骨」川上 大輪 選

「買う」永井 玲子 選

「動く」三宅 保州 選

○出句締切 13時

○13時45分

○披講 15時予定

○会費 2,000円(軽食を準備しています)

◇事前投句は専用ハガキまたは普通ハガキ
で下記まで

〒599-0204 阪南市鳥取1046

辻本 久宛 TEL 072-472-0465

主催 川柳阪南

2016 ふあうすと川柳大会

平成27年 年間賞発表

日時 4月10日(日) 午前10時開場

場所 兵庫県民会館 9Fホール

神戸市中央区下山手通4-16-3

TEL 078-321-2131

宿題(欠席投句拝辞)

「郷愁」小池 一恵 選

「残る」大堀 正明 選

「狙う」赤松ますみ 選

「閃く」川上 大輪 選

「流れ」津田 暹 選

「隙間」岡田 篤 選

「雑詠」赤井 花城 謝選

出句締切 12時(各題2句)

会費 2000円(記念品・発表誌呈)

(昼食は各自でお済ませください。地下に食堂あり)

懇親会 5000円 17時～ 当日受付

主催 ふあうすと川柳社

温故知新

「高杉鬼遊川柳句集」から

保険屋の言う万が一が気にさわり

パチンコにまたしてもあう返り討ち

八月の日記と重く生きのびる

招待状手ぶらで来いと書いてない

人間の親子を猿に見てもらい

薬屋でうんこのかたさなど申し

長男にまだ嫁がない春の街

考えて大きい方を人にあげ

元旦や総理を知らぬ奴風

十二月ヒラにはヒラの宴あり

気の弱い男を囲む赤い羽根

縄のれん通天閣に空がある

しあわせな余生とおもう冷奴

パソコンの世に営々と辞書を作る

鬼病んで人の情けが背にたまる

病みあがり鬼の気弱を笑うなよ

横文字を訊ねる友が一人いる



川上大輪選

松山市 郷田みや

踏み出した一步に付ける星マーク
もぐら叩きスピードアップする師走
マスターキー今日はこのドア開けてみる

ただ聴いてあげるだけです寄り添って
引き際にそつと苗木を植えておく
原点に戻り損ねて非常口

大阪市 平井美智子

晩ご飯食べた記憶が消えている
ローン完済明日はゲートボールの日
痛いのは治療している隣の歯
遺言の書き方講座受講中

天国へゆく近道が消えている
駅前蕎麦を啜って終える旅

八王子市 川名洋子

旅先の風が素顔を油断させ
眠れぬ夜心の乾き吹き出す
人並みの暮らしの中に居る安堵

足元の小さな幸が背伸びする

遺産分け後ろで誰か小突いてる
大胆なタッチで余白埋めている

大阪市 横山里子

急がねばネコの居ぬまの障子張り
ケセラセラ鯛の頭信じゃない

脇役も気楽でないとカスミ草

永遠に続くものなどない夜更け
化粧して今日も上手に生きてみる
疼きだす記憶の底の古い傷

松山市 神野きつこ

ピカピカと元気をくれる観覧車
ベッドからパノラマ見てる羊です

四人部屋ナースの声を盗み聞き
病室で迎えたくないクリスマス

お見舞の家族が帰り白い壁
子の部屋で見ではならないものを見た

佐賀県 真島久美子

気の利いた言葉が底をついてきた
どの種も光を持っていない不思議

春までの重荷は全部人のせい

北風はひらきなおっているんだね

ボジティブに跳ねる冷たい雨である

同じ曲ばかり聞こえてくれれば春

貝塚市 吉道あかね

私を丸洗いする除夜の鐘

年賀状だけで続いている仲間

皮下脂肪たっぷり溜めて冬籠り

この人の横に並んで自然体

温もりの落ち葉を抱いて山眠る

スツピンの味方をしてる風邪マスク

岡山市 藤成操江

同窓会じじばばの目はみな遙か

錠剤を足しつっ遊ぶ今日あした

諸々の絆の中で揺れている

奥様と言われつい耳傾ける

行く先はどうあれ今を手で囲う

冷静を通す笑顔を出し

和歌山市 倉橋悦子

繩のれん潜ると昭和吹きだまり

遠吠えを忘れて今やマスケット

おいそれとゆかぬこの世の得手勝手

癒やされた義理で出向いた美術館

友見舞うロボット犬のお出迎え

滑稽がおもて表紙になるわたし

池田市 上山堅坊

思うこと一途に吐いて一行詩

叶わぬ夢抱いているから生きられる

失言を妻に形状記憶され

会釈されハテとたぐっている記憶

食べ物に迷い迷っている平和

聞きとれず愛想笑いが増えてゆく

三田市 上田ひとみ

約束はおぼえていないふりをして

教えてねあなたの秘密ひとつだけ

幸せだったと気づいてはいけません

ゆっくりとわかり合えたらそれでいい

さよならに心当りはないのです

足跡は残さずふっと消えました

泉大津市 助川和美

地球儀がソ連のままの我が机

北風に焼き芋売りが暖かい

子供から安否の電話貰う歳

蒸したオル床屋で眠るここちよさ

蛸焼を夜食と称し独り者

子が五人サンタさんにも予算ある

松山市 柳田 かおる

新しいわたしを探す斜向かい
立ち位置を模索している途中です
背伸びしてスミレの花をふんづける
ステップアップしそう三色ぼーるべん
自問する今日の日使いこなせたか

大洲市 花岡 順子

神様へマイナンパーで願ひ事
諦めることで踏み出す第一歩
締切が迫ると頭痛ひどくなる
留守番のつぶやき猫が聞いている
宝くじ夢を見るにも金が必要

西予市 西田 美恵子

字余りの様な今年を畳み込む
弱点ばかりについてカラス街に住む
人間を忘れたようないい笑顔
いつもポストに何か届いている多忙
朝昼晩食べて幸せとは何ぞ

北九州市 小松 紀子

牛歩です楽しんでます五七七五
おーいお茶言うのはやめた暇がある
馬鹿がつく正直ものでちと困る
緩和ケア頑張つてネは禁句です
広い様でせまいですね人の縁

福岡県 本田 さくら

カマキリの横切り見取り発車する
誕生日今日だけ幸のプチケーキ
落葉コロコロ近所の噂連れてくる
フィギュアスケート妖精たちが舞い踊る
保育園で学ぶ良いこと悪いこと

登別市 小林 碧水

義歯ビタリ上手にお世辞言えそうだ
人間ってなんだ高い鼻低い鼻
傾いた命薬の手を借りに
しんしんと雪父のこと母のこと
米櫃に米いっぱい眠くなる

弘前市 高森 一呑

私のアキレス腱は泣き上戸
ルーティンにわかラグビーファンふえ
特売日妻は別人 鳥に成る
体力を鍛え終活にそなえる
指切りをするたび小指疼きだす

弘前市 吉川 ひとし

杖使う事はなかった母が逝く
角取れた分だけ弱くなった舌
悩みのタネ亡父に蒔いてた日の日記
天気予報昭和の下駄はよく当る
泣き虫に虫歯我が家は虫だらけ

塩竈市 木田 比呂朗

逃げ回る体力も要る鬼遣らい
石頭信念ですと言いかえる
終章に大きくぶれる自己評価

どうしても必要になる削除キー
ジョギングの春へ靴だけ先ず準備

横浜市 川島 良子

イニシャルを消した十二月の別れ
躓っていたのはわたくしのこころ
締切りへ溜め息一つまたひとつ
他人事と笑えぬこれが現実だ
神さまもこころ変りをするらしい

伊勢原市 小田 幸子

頭なせに行けば良かった今思う
そこに親なく町並に変わりなし
シッポ振る君と歩んだ何千里
老人がかさ差しかける連れの犬
時刻む道連れは犬ただ歩く

豊橋市 藤田 千休

ブランドに身を包んでも痩せ蛙
大津波と竹篋返しは後でくる
貧乏を世襲したのか兎小屋
スカンクもお尻を向ける自衛権
北風に全部流した蟠り

大阪府 小栢 こずえ

この晴れが朝の寒さを連れて来る
初雪を喜ぶ心まだ失せず
悩み事薄らいで行く青い空
止まったら動かぬエンジン操つて
太陽が元気を出せと誘い出す

大阪府 神野 千恵子

平仮名の海でひろくあさく生き
紙風船ボーンと息の音がする
高齢化開いたままの玉手箱
曖昧な言葉になぜかほっとする
両輪がそっぽを向いて頓挫する

大阪市 柴本 ばつは

甘い夢みんな捨てるとききた寒波
脳回路右往左往になる寒さ
四苦八苦なんとかひとり生きてます
耳も歯も目もお金がかかる老い
孫たちの手作りチョコが仏壇に

大阪市 高杉 力

ミシユランに旨いたこ焼き教えられ
なんぼやと思うは安かった自慢
ウーロン茶の奴が一番よう喋り
言い過ぎて今日は独りの苦い酒
さよならが言えず元気でねと別れ

大阪市 田 中 ゆみ子

できること指折り数え生きていく
チャレンジを称える三日坊主でも
真実はどちら毎日と朝日

相槌を打ってぐったりした受話器
怒らせてみれば吐き出す胸の内

大阪市 橋 本 典 子

ジャム作りふつふつ煮えて笑顔呼ぶ
里いものつるつる白き可愛らし
風邪をひき居間の隣りで独り鍋

ここ大阪母は何度も確かめる
落葉手にうっとり過去を散歩する

堺 市 羽 田 野 洋 介

ランチとは言うがホテルの豪華版
中身よりバッグが自慢昼食時

小さくても持ち続けたい希望の灯
仕舞いこみ過ぎて割引期限切れ

増やすのはまず断捨離をやってから

河内長野市 穂 口 正 子

魂を宿すからだが劣化中
老人に成って分かった気が焦る

溜め込んだ物をどンドン処分する
採め事の種をぼろりと軽い口

喜びの種をそこらに播いておく

富田林市 小 出 修 三

散乱の玩具跨いで雨戸繰る
引き算にお手玉加えボケ防止
帰るなり家でストレス撒き散らす
トランプに試されている記憶力
日々感謝している妻に逆らえず

羽曳野市 磯 本 洋 一

七五三祖母が孫から紅借りる
凧が吹いて雀が肩寄せる
億の字が並ぶ新聞誰の金

小さい秋追っかけて来た冬將軍
野仏に囁き通る山ガール

羽曳野市 中 川 ひろ介

チョイ悪と医者に言われた不整脈
忘却は神の意志とかクリスマス
イルミネーション競い原発忘れてる

本番に強くなりたいルーティン
あこがれた晴耕雨読楽じゃない

東大阪市 織 田 登 子

脳の中用量過多でパニックに
ダイエット早くしないと手遅れに
コンビニの一人おでんもいいもんだ

スキンシップ孫の心を解きほぐす
何も無い差し上げるのは笑顔だけ

箕面市 中山春代

任せたよその一言で頑張れる

恵方巻きは食べられませんおちよほ口

消したかなあわてて解く靴のひも

庭だった大阪駅でまた迷う

一匹に財布をはたくカニの宿

神戸市 富永恭子

痛みから逃げる私を追う灸

落ちつけと亀が私に喝入れる

てっぺんに一つ残され疼く柿

蜘蛛の糸脳細胞に絡みつく

ラップした私を開けにくるピアノ

尼崎市 清水久美子

恋せよとポインセチアに煽られる

根回しをしたなと思う滑り出し

名案がおりてくるまで横になる

一向に冬眠しない欲の虫

心してその他大勢から抜ける

篠山市 藤井美智子

まず笑顔今朝も鏡がアドバイス

夫の遺影表情変えたように見え

何回も聞き直しするこれも古い

ロスタイム沢山使った捜し物

逆風へ帆の向き変えて明日の海

三田市 今西廣子

お歳です生きる難易度高くなり

マイペースネコも悩みがあるらしい

お似合いですね筆筒の肥やしました増える

父さんよりもメタボのポチに主治医いる

デコボンの頑固ひと味違います

三田市 九村義徳

頼寄せて天使の寝息感じて

嫁がした娘がなんでもないと頼ぬぐう

ウォークマン足はリズムを刻んでる

他愛ないドラマに涙流す年

歩く人見ると師走感じます

宝塚市 太田としお

忙しなる師走年の瀬聞くだけで

反対反対本真に自由ありがたい

好きなこと熱中しても疲れない

自問自答何で生まれて何で死ぬ

仏さま僕は一体何ですか

香芝市 山下純子

下り坂ころげるほどに円くない

トロフィーのリボンが褪せて疲れ気味

我が孫も難民の子も同じ目

ゴミ出しも身づくろいする近所の目

孫帰り部屋片付けて寒さ増す

紀の川市 山東 日出男

解き明かす度に新たな謎を生む
愛してる言わず聞かずに五十年
肩寄せて米口が並ぶ万国旗
ライバルの長所短所を見極める
救急の医療現場に待ったなし

鳥取県 飯野 菖子

狭くても嫁がもらった城の中
盆栽が私の留守に目をまわす
盆が来る帰っておいでふる里へ
終戦も七十年の歳月が
吹く風にまかせて飛んだ種子でした

鳥取県 児玉 規雄

賽銭に反比例する願ひ事
神頼み住所名前を告げてから
読経の声は御布施の額次第
サーピスは出来ませんよと無人駅
人生はドシラソファミレドで終る

鳥取県 下田 茂登子

家族葬隣り近所の絆消え
頑固とは言わず真面目と言っておく
六十年添うて別れてまだ恋し
もう一度抱かれてみたいそう思う
川柳の友がいるから生きられる

鳥取市 大前 安子

やっと咲く一輪の花誰か見て
少女期の夢起こしてみよう申の年
歩き方工夫してます万歩計
大根の干し方さえも一工夫
隠し味ウフオホホの家族愛

鳥取市 津村 律子

褒め言葉くすぐったいが頑張れる
持久戦ポケットにアメ入れて出る
口答えさせて下さい今が華
主婦だもの強い小言も言っておく
その先が見えているので黙ってる

倉吉市 岡崎 美知江

言えぬ愚痴派手にノートに書きなぐる
ここだけの話が派手に舞っている
派手な服一度気取って着てみたい
おにぎりとお母の姿が大好き
姿より心と言うがでも女

倉吉市 堀 かずこ

誓いたてグチは言うまい泣くまいぞ
失敗もやり直したらいいじゃない
ふり返るあつという間に時は過ぎ
検査する結果待つ身の置きどころ
しあわせは笑顔の私にやつてくる

米子市 生田和之
ハイタッチしたさに通うボウリング

発酵もせずに古い行く背なの黴
手を抜いた味と暮しが心地よい
石段の手擦り頼りに社寺めぐる
故郷に活性残しゲゲゲ逝く

米子市 見山温子
ありがとうを忘れず過ごす老い二人

孫が来る自慢のレシビ膳の上
師走の風吹いて懐寒くなる
若作り鏡にうつる黴の数

皆元氣伸よしこよしセレブです

島根県 福岡左余

冬野菜自慢の出来に奮い立つ
若その声につられて出る旅行
うちの塀退職金で光つてる
湖の夕陽見たさに嘘をついて出る
歳忘れ健脚畑に夢を掘る

松江市 山根邦代

未練等言わぬ紅葉のいさぎ良さ
黴の手を撫でて摩って元氣出す
人は人自分とは別と思うこと
幸せの計り心の中にある
三食をゆったり食べて今日の幸

雲南市 菅田かつ子

久し振り役者揃って盛り上がり
井の中へニユース知らせに来た雀
寂しげに送る姿へ振り向けず
風当り茶碗が一つ欠けました
気の急ぐばかりとうとうかたづけ

安来市 原 煩惱児

青虫が試食してくれキャベツ畑
何糞と呆けが戦をしています
爺独居リングも柿も丸齧り
たらならの折り叶わぬバチンコに
年の暮れ身内知人の多い葬

瀬戸内市 東 横 ますみ

わがままな小指で今もまだ一人
角曲がるまでは仮面ははずせない
順番通りいくとこの世はつまらない
それからどう生きようか椿咲く
ぶれてから人間らしい顔になる

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

趣味一つ豊かな心になる私
風便り信じて歩く独り旅
花の種まいて心の傷いやす
バーゲンでつられて買って着ない服
丸木橋吊り橋所詮独り旅

尾道市 小畑宣之

輝きは一等星でなくて良い
十八番ではないよこれしか歌えない
聞くよりも自分の歌う曲探し
スイーツを見て別腹の虫が鳴く
眠れぬ夜一秒間の長きこと

尾道市 日谷寛

あすがあるから星空が美しい
鮮やかに芽吹く柳の芽が光る
貫禄の句だな下五にある力
忍従の母の戦を風が押す
まっとうに生きると温い春の風

竹原市 若年幸子

呆け方も人並みですとご冗談
組みあげたドミノを壊す恐いテロ
縄暖簾君待つ酒が揺れている
針箱の底に亡母の愛がある
びっくりりぼん娘と一緒に住むと言う

竹原市 土井輝恵

老人が老人会に入らない
夫との平行線を笑う臍
夕食を作っていますボランティア
週一度チャンネル権を主張する
マイナンバー私わたしと叫びそう

三原市 鴨田昭紀

周波数合わせて和む聞き上手
数々の修羅場潜ってきた背中
斜めから見れば容易に解ける謎
何気ない言葉が耳に突き刺さる
逆さまの印がわたしの答えです

三次市 伊藤寿子

お宝ですか持っていますとのれん見る
初代の恩しかと胸に刻み生き
明治から平成の世へのれん継ぐ
孫の絵が家業を継ぐと感じられ
プロポーズ受けたらのれん消えたかも

山口市 中前幸子

丸木橋いつかあなたと渡りたい
早朝からスキップで来る冬の鬼
幽玄の伝説を舞う鬼女の面
雪に阻まれなかなか返らない筈
捨て切れぬ煩惱青い炎を抱いて

山口市 増田めだか

半額にすぐに飛びつく白昼夢
紅葉狩りライトアップに蹴躓く
名案が浮かびお酒がすすみだす
彼の姿見たくて通う朝の道
忙しさ母は子供が見えてない

松山市 栗田忠士

無欠勤無事故無違反無位無冠
煩惱が消えそうもない除夜の鐘
老いてなおマイナナーに縛られる
A4に描ける程度の夢を追う

松山市 近藤修二

遠花火見事に咲いて平和だな
水の流転命の叫び見逃せぬ
振り時計微妙な距離を計りかね
憧れのシルクロードにあるロマン

今治市 渡邊伊津志

大地震次は我が身と覚悟する
焼き芋の声は聞こえる老いの耳
背負い込むと雁字搦めの義理となる
生半可な意見言うなら黙っとけ

高知市 三谷松太郎

生命線ぐるっと回って戻らぬか
ちよこちよこと変節したが同じ路地
半枯れに何が効いたか芽を吹いた
出かけよう重い肩の荷うち置き

唐津市 岩崎實

セーターに心の糸も絡め編み
落葉散る箒片手に思案顔
難民の子供の笑顔空しくて
戦争を知らぬ世代のこの平和

唐津市 吉富節子

米寿だと祝ってもらい悪づくめ
即席が多く工夫が消えてゆく
友の来て励まされてはついほろり
ひ孫までスマホ夢中で返事なし

佐賀県 門井孝

カニリング電話セールス国なまり
パソコンを触れば狂う老いの腕
ゲゲゲにも生命があつた物語
大掃除何処から思案日が暮れた

佐賀市 清水園實

宝くじ発表日にはそわそわし
亡き妻と出合いも感謝三世代
モヤモヤは気分転換リフレッシュ
柔軟性あれば人生もつと楽

熊本市 杉野羅天

温暖化冬に暖房いらぬけど
阿蘇涅槃モヤで優しい顔の冬
こぢんまりセンブリ採っている夫婦
ハンドルを首で切ってるそのつもり

山鹿市 前田幸子

車椅子まだまだ生きる面がまえ
転ぶなよ痛いはずは母さん自身です
二人して酒を交した夢だった
曾孫の名思い出せずに暮れる秋

色づきを待つていたのにもう落葉
山鹿市 米加田 恭代

大らかに笑つてから元気がす
デラックス旅行空より陸が上
アイラブユー嘘でもいいの言われたい

山鹿市 柳 田 白 沙

白鳩が幸せよぶと飼いはじめ
強くなる涙のぶんの計量器
絵空事小犬もネコも信じてる
似合つてゐる私は黒子たおやかに

シドニー 坂 上 のり子

雑草のまま気ままそれでいい
元気かな遠くて会えぬもどかしさ
注目の和食ですけど私流
もう忘れ元に戻った飲みっぷり

札幌市 斉 藤 宏 子

木枯らしが枕に響く夜の底
私と野菜も鮮度苦勞する
かおる杉蔵人折る酒作り
順調に加齢進んで物忘れ

札幌市 富 永 恵 子

から松の林をぬけて詩人など
背を伸ばし歌が聞こえる旅つづく
言の花咲かせてみたい本のせな
長旅で我が家の味がふとよぎる

弘前市 工 藤 京 子

早起きをしない日にする休刊日
いの一掃すませば後はほんわかと
あやめるな人の命は物じゃない
越冬の白鳥を見る親子づれ

男鹿市 伊 藤 のぶよし

水母プカプカはじめなど知らんぷり
ああ安堵十月十日のでかい声
返すなら笑顔に矢張り笑顔です
限界地点々続く廢墟跡

つくば市 嶋 本 喬

両親の墓参三都の紅葉旅
白内障軽いと言われ祝盃だ
上下へ出ない杭でも叩かれる
傾けど世界遺産にビルなれず

東京都 高 岡 弥 生

生きている目的を持つ子に育て
子供なら思い通りにいかないよ
思春期の揺れる心を垣間見る
父親に反抗してる子が愛し

横浜市 巖 田 かず枝

精神の確かな内に遺言書
消費税ほんとは無しにしてほしい
好きな物違う二人が四十年
顔じゃないなんて言うけど本当は

横浜市 長 島 亜希子

くちコミで募集老人ばかり入る

広重の絵見比べ歩く東海道

説明がなければ庭のただの石

湿布貼るついで一発喝を入れ

佐渡市 高 野 不 二

寒いのに灯油が下るとは不思議

結婚祝子にして貰う五十年

貰った分だけ出して置く賀状

ケイタイにしばらくはたたくはない余生

江南市 脇 田 雅 美

仏前で誰にも言えぬ話する

ブランドでも似合わないかもしれない

バルコニー夢の種蒔くプランタン

あけすけに会話ができる友と飲む

京都市 櫻 崎 篤 子

つくづくと我が家はよろし六帖間

にげ廻るほどの借金してみたい

人様をおさわがせして救急車

もう少し生きていいのね阿弥陀様

大阪府 高 木 道 子

貧乏性勿体ないの詰合せ

廃校になる学び舎を舞う枯れ葉

五郎丸のポーズで赤子泣いている

暖房に睡魔と法話がせめぎ合う

大阪府 畑 中 節 子

老眼鏡外して脳も一休み

蔦紅葉低い土塀を包み込む

いたわりの言葉頂くほどに老け

何もせぬ事に疲れて日が暮れる

大阪府 磯 島 福貴子

どっこいしょ二歳の孫が真似て言う

受験生正月明けが正念場

逝きたいなピンピンコロリ惜しまれて

ボロ出ないチョイピンボケの写真好き

大阪府 梅 里 南 天

作者死すお化けは死なぬ永遠に

手をつなぎ歩く魔界を鬼太郎と

お天気のお姉さん泣くと雨が降る

ガン予防番組ばかり目に止まり

大阪府 大 治 重 信

暗記にはマイナンバーは長すぎる

頼み事順に並べて初詣

行く末は鍋も火燵も原子力

酒やめて煙草もやめてクリスマス

大阪府 中 島 栄 子

気儘亭主傘寿にやっと人並に

グチャグチャと雪どけのよう妻の愚痴

美しい襟足からの出る色気

洗い髪ほのかな香り愛おしい

大阪市 平賀 国和

子の世界垣間見たよな披露宴
いつの間にか血圧計が友となる
憎しみの連鎖は止まず嘆く民
憧れの欧州旅行遠くなる

大阪市 前川 善之

晦日そば饅だしにも母の味
国作り老人スキル有ればこそ
出来るなら世界平和の初夢を
正月はヒマを潰しに神参り

大阪市 松田 聰

人生は定年からおもしろい
いい言葉生きてるだけで丸儲け
持て余すやつと届いた十二桁
人権を口にしながらする差別

大阪市 宮村 満寿恵

悪夢さめ自分に戻り安堵する
実る秋田の神様に感謝する
師走には信号さえもいらいと
ラブレター渡せぬままにポケットに

大阪市 吉田 知之

妻他界仏の縁と日々読経
兵舎跡今は病院二度の縁
ニュース類見出しだけでもこと足りる
好きな道九十四で五七五

堺市 山崎 早苗

冷蔵庫わたしのアイス消えている
治療器にアイドルの名をつけてみた
気がつけば喪中葉書が増える齡
頭にも用意をしたいスベアキー

堺市 大和 峯二

目指すことあって元氣は捨てられぬ
多数とり何でもすると愚の政治
伸びしろをたくさん残し古希磨く
感謝心笑顔にのせて贈りたい

交野市 田岡 久幸

永遠のほほえみ残し原節子
要領はわからなくてもみんな逝き
かえり見て何の不足もない身分
毫碌がばれたか席を譲られる

河内長野市 森田 ひろこ

金星へ寿命を超えて夢のせて
微笑むと鏡の中に亡母が居る
ほらまいて借金増やす腑に落ちぬ
貢がれて娘はブランドの海に墮つ

河内長野市 渡邊 修

黒ネコが師走の街を飛び廻る
稀勢の里綱を取るなら今でしょう
寝床無く風雨に耐えるゴミ屋敷
寡黙だが自慢話はよくしゃべる

電球一コに町の電気屋さん

岸和田市 宮野 みつ江

ダンボール五杯分感謝し捨てる

電話一本飛んで来る友嬉し

我が家の生き様透かしゴミ袋

高槻市 鳥居 宏

責任が消えて眉間の皺も消え

シンフォニー小さい音にもある役目

忘れたいことははっきり思い出す

効くのだと信じていれば効く薬

高槻市 三谷 白黒

子供等のおはようさんはうれいね

ラブラブだ娘嫁いで二人きり

エアコンは孫が来た時使います

いやだなあ定刻通り目がさめる

豊中市 荒木 郁子

便利だな言い繕いのうまい口

善人のポーズも肩が凝りだした

フラダンス先ずは自分が癒されて

未から申に任せて夢紡ぐ

豊中市 荒巻 夢

お気をつけてこのひと言で通う店

年金で秋刀魚一匹たべ平和

街中で家族と出合い照れ笑い

次世代へ引き次ぐ命枯葉踏む

仲直りでも目の奥にまだ火種

古地図手に武士になりきり江戸闊歩

災害へ分割せねば首都機能

栄転を真紅のバラが祝つてる

豊中市 貝塚 正子

木枯しに追いたてられて冬支度

パパの指しつかり掴む紅葉の手

シャンソンの扉を開く枯葉舞う

似るもんか反抗してた親不幸

豊中市 源田 啓生

ころころと何故か嬉しい栗御飯

電子音今日もお前に急かされる

介護の手男の矜持未だ残る

川柳が私に残る格闘技

寝屋川市 荒川 鈍甲

自公して軽減税の猫だまし

年金運用株でごっそり穴あけて

空爆で憎しみ連鎖終らない

わが国に二百年持つ他国基地

寝屋川市 大同 美江

骨董を売って世界を廻る夢

予報士の言った通りに傘持参

今日もまた断捨離電話掛けてくる

道の駅あわて買い足しバスに乗る

豊中市 上出 修

寢屋川市 岡本 勲

倦怠期曇りガラスで丁度いい
老いらくの恋もガラスの如く割れ
化粧品ブランド品でもこんな顔
豊さの海で少年溺れそう

羽曳野市 安本 美喜

おふたりの宛名の書ける幸せさ
お互いに惚けないように叱り合い
新年の平和を願う賀状書く
年賀状今年限りを口癖に

枚方市 坂本 ミヨノ

クリスマスケーキと花を独りじめ
木守柿鳥につつかれやせてゆく
散歩道夕焼け拌み走ってる
好きですと言えず黙秘で笑顔する

枚方市 松原 保

横綱が小さく見えた猫だまし
親分の顔色見てるチルドレン
今日また残念ながら予定ナシ
無理ですよこんな給与で嫁さがし

箕面市 大浦 初音

よく寝た娘今も三食昼寝つき
こつこつとやった努力は裏切らぬ
雑草にもちゃんと名前はあるので
やる気ない時に出てくるどうせ無理

箕面市 寺井 柳童

旧街道賑わい戻る道の駅
左折かな右折か迷い直進す
おごつたる請求書見て財布見る
針に糸通すキツクの五郎丸

八尾市 田邊 浩三

看板につられて入る迎え酒
看板に偽り無しと書かないで
マイナンバー数字で管理される世に
爪楊枝使える人が羨まし

八尾市 前田 紀雄

チャルメラが恋しい二次会の帰り
妖怪がウヨウヨしてる永田町
十億円当れば遺書は残さない
十把一絡げ後期高齢の輪

八尾市 山川 寧

朝寝坊ゴミ回収車通り過ぎ
優しさが届く友から小さい柿
さようなら青い山脈肩組んで
一生をマイナンバーで操作され

神戸市 井上 忠貞

ゴミに網人とカラスの知恵くらべ
焼鳥よりおでんが恋し冬の酒
老いらくの恋の炎を夢に見る
喜寿迎えクルマは止めて歩きます

お彼岸にはあちゃん二人大あくび
口にこそ出さずに信じ50年

神戸市 輿水 弘

幸せですこんな猫に慕われて
思いつのかけらが芽吹く国訛り

神戸市 玄 番 美恵子

出雲そばお国訛りも旅の味

足腰を伸ばし句会の輪に入る

健診日延ばして明日の旅仕度

澄みきった空気歩幅を大にする

神戸市 細川 花門

携帯が梅田で待つという誘い

梅地下を出れば狐の嫁入りに

雨宿りさせて下さい曾根崎署

道草が好きで乱視でへそ曲がり

神戸市 山根 弘子

恋心未練の炎まだ消せず

ハンドルが少しブレだす老いの坂

世渡りが下手な女で浮いてます

共白髪どこへ行くのも二人づれ

尼崎市 藤田 雪菜

日曜日孫来るうちが華と聞き

不揃いのりんごと里が届けられ

留守番へ声さわやかに入れておく

百均の便利なグッズ持ち歩く

悪いとこ似ないでほしいDNA
あの世にも居酒屋ないと困ります

伊丹市 平井 富夫

ごめんやす何時もお客ビールです
ゴミ出し日手伝わないと捨てられる

小野市 藤原 泰宏

六度目の干支を迎えて又奮起

口封じ言いたいことは明日にする

その家の様子が分かる上がり口

入院をしてみても分かる靴の音

川西市 日野岡 和之

幸せを運んでほしい年賀状

野の花が何より似合う苦勞人

やってみせやらせてみせる心意気

失言は本音でないと嘘重ね

篠山市 佐々木 勇

新聞がゆっくり読める日曜日

二十年この手に馴染む草むしり

味噌汁の美味さは顔に出ています

善し悪しの区別ぐらいいはまだ出来る

篠山市 永井 かほる

冬がきた大根の葉も美味になり

達筆の友の手紙は捨てがたい

貧乏な頃の写真の良い笑顔

秋の味覚買物籠につめこんで

三田市 多田 雅尚

ツリーにも紅葉飾れる温暖化
青春期夢を語ったジャズ喫茶
下町のロマンを乗せて飛ぶ宇宙
長生きをLEDと勝負する

三田市 辻 開子

外気浴隣の落葉かきあつめ
今日もまた寒さがきつい暖のもし
経過よい言葉信じる身も軽い
半月をあけた我が家と呼んで

三田市 宗福 清司

年の初めに誓った作句またもダメ
愚作とは言われない抜けないだけで
無理せずに本音で歩むマイウエイ
邪心かどうか素振りで分かる古希なもの

三田市 東内 美智子

蕪蓄のつもり息子にしてやられ
きみまろの女は変る四十年
徒競走グリコのポーズゴールイン
くどい程言うた筈だが嫌に釘

宝塚市 井上 風花

毒キノコ色鮮やかに人誘う
ウキウキとガラポン回し外れ玉
布袋さまお腹ポッコリ福を呼ぶ
腹立てず笑顔につこり米寿です

宝塚市 丸山 孔一

町内に山車の曳き手が居る誇り
スマホだけ見るな空には飛行雲
物溢れ全て受身の子の未来
年相応忘れ転びも致します

三木市 山口 久子

きのう晴れ今日は雨降り床の中
時流れ自分の歳も忘れがち
わが心境昨日今日との区別なし
ひ孫が九人わが家は幼稚園

南あわじ市 萩原 狸月

散骨で化石になれぬ骨が増え
耳で聞くいくさ血を見ず死体見す
巢立たせて脛の痛さをなつかしむ
金星となって実った日々の汗

奈良市 尾畑 なを江

ほどほどが良い決断をする目安
土鈴の音遠い昔の物語
コンサート最前の歌手に握手され
いつからかカラになってた冷蔵庫

奈良市 高橋 敬子

この次も飾れるかなと申を置く
言わ猿を忘れた口がよく動く
どれが我いろいろの申絵馬に見る
影踏まぬようしていても影が寄る

奈良市 高橋 仁志

公園の猿は過保護の肥満体

申年はテロないことをただ祈る

誕生日孫の手づくり紙凧

安眠を朝の寒さがさまたげる

和歌山県 森下 よりこ

楽々と生きて来たんじゃないみんな

ご近所にうつ老人が増えている

バランスをとって迎える老いの坂

フィギュアスケート見てるお菓子を食べながら

和歌山市 北原 昭枝

おはようと鏡に言っている元氣

うるさいが何だかんだの思いやり

泣き笑いちいさな幸があたたかい

穏やかに話をきいているゆとり

和歌山市 平田 元三

金メダル錆びていまいかドーピング

無い袖は振れないんだよ怪電話

道交法犯せぬプロのドライバー

容疑者のノーで始まる取調べ

岩出市 村中 悦男

本年も妻の通訳生き甲斐に

父母の年越えて二人の初詣で

食べ方も教えて野菜さし上げる

急がない二人っきりの三が日

田辺市 大峠 可動

初春の折り脳波に間引かれる

木が枯れて言葉ひらひら路地を去り

老いの足主治医の声を持て余す

ふるさとの地図に夕日の紅い彩

鳥取県 岡村 孝明

妻旅行ニユースを聞いて胸さわぐ

この暮し我が運命と自覚する

定年前肩たたかれて職を辞す

重労働終わりにわいわい汗がふく

鳥取県 橋谷 静江

二人居て同時に忘れ物をする

着るよりも眺めて帰る百貨店

老いて来て何も出来ぬが貯めて待つ

痛いところ次つぎできて医者通い

鳥取市 奥田 由美

こつてりが好みの舌にきた病魔

通話しか使わぬ夫のスマホ買い

誕生日鏡のシワも深く見る

居留守かと強めのノック子の住まい

鳥取市 近藤 秋星

生きている証に賀状十余枚

神様も酔っぱらってるお正月

東京で花御所柿のPR

それぞれに行く先違う靴を履く

鳥取市 坂本 とも湖

真実を探して風が舞っている
大袈裟な私の夢に鍵を掛け
被災地の天使は弱音など吐かぬ
柿も熟れわたしも熟れて秋深む

倉吉市 田中 紀美恵

怖い顔顔に似合わず優しいよ
川柳会魔法のきかぬ五七五
未来から亡母の迎えがまだこない
鶴が舞う派手な晴れ着でお正月

鳥取市 田中 天翔

また明日別れた友は黄泉に行き
朝ドラのヒロインあさに励まされ
軋んだり和んだり日々忙しい
根っ子張る時と信じて五七五

倉吉市 中村 毅

稲を刈る脇で案山子が欠伸する
世話をした分だけ花が咲いている
コンビニへ行くのはトイレ借りるため
驚いた墓前に造花立ててある

境港市 中井 虎尾

昼アンドン夜の酒場じゃ大スター
オリックススイチローの里神戸去る
十二ヶタマイナンバーで民しはる
たたけないハエ五郎丸してるから

米子市 池岡 たけし

秋日から体も足も軽くなり
秋の日は心の手本伯耆富士
寒い冬思ったけれどどこか行く
年重ね気化する体悩む種

米子市 田村 周子

重い腰足も重石をつけたよう
申年にちなんだ知恵をもらいましょう
ゴミ捨てても重さがこたえ交替だ
補聴器も結構手間のかかるもの

米子市 永井 三津子

浄土では亡夫と離れず暮らしたい
おいしさに身体どんどん実る秋
里帰り心ほっこり薪の風呂
若作り母が浮いてる参観日

米子市 野川 宣子

人違い穴があく程見られてた
寒さより怖い年金目減りして
内緒事叶わぬ耳で筒抜けに
前向きになると鼻息荒くなる

松江市 相見 柳歩

ごみ箱の重さ恋文清書する
認知症の母に感謝の言葉言う
仮の世で尖ってみても実らない
新しい人に抜かれた幸福だ

出雲市 黒目 英男

来し方を臉を閉じて振り返る

遠回り病も癒えて春を待つ

コチコチの頭考えまともらぬ

後悔をしたくはないと旅に出る

岡山市 伊藤 寿子

ガーデニング咲かせわたしの小宇宙

野仏のやさしき笑みに母を見る

それなりの力で生きている卒業

前向きの趣味が余生に花そえる

岡山県 高岡 茂子

講演会ねむけ覚しのガムを噛む

ブレーキを踏んだところで目が醒める

下駄箱に居すわっているハイヒール

拒食症心配したが二人前

倉敷市 安東 モモ

新築祝い胡蝶蘭咲きほこり

花終わり邪魔になったの胡蝶蘭

寒空に一輪だけで咲いていた

人のふり見て自己中に気がついた

玉野市 片岡 富子

スケジュール無い日は作句と書いておく

強風と晴れ間の雨を一人行く

凸凹の道の割れ目にチャリ滑る

何度目か認知の母とクリスマス

竹原市 六田 半徳

真ん中に丸い梅干し母の顔

味噌汁の湯気の向こうに妻笑顔

怒り肩ちから抜いたら先が見え

ご近所の畑が空地になる早さ

宇都市 高山 清子

目から鼻へ抜けても口が動かない

師走だとわかる行き来をする本音

賛成をする気で前の席を取り

聞き役に徹し最後に釘を打つ

防府市 坂本 加代

はつきりと言えばまほろし消えそう

太ももにハートの痣がついている

新聞の訂正記事は片隅に

爆発の後はしんみり物思い

(前月分) 佐賀県 門井 孝

孫よりもドキドキします発表会

院内を走るパソコン患者乗せ

点滴に生命預けるベッド上

有田焼銀座に響く皿踊り

(前月分) 弘前市 高森 一吞

いたかろう強風堪えた傷りんご

肩の荷をおろした林檎背伸びする

泣けてくる傷つきリンゴジャムとなる

小鳥でもおいしいりんご知っている

新川柳鑑賞

(48)

麻生 路郎

銀行のマッチをでんと應接間

(北海)

堂々たる応接間というほどでもないのに、私のうちは何々銀行が取引銀行だと云わんばかりに、一流銀行のマッチの大箱がデーンと据えてあるところを詠んだのである。どんなに大きなマッチがおかれてあろうとそんなことは問題ではない筈だが、ライバルにとってはピンと来るかも知れない。

お燈明バーのマッチで悪つました

(多久志)

お燈明と云えば昔からひうち石でカチカチとやり、発火すると、先ず附け木に点火してそれから燈芯に移すか、ローソクに移したものである。近ごろは平気で、マッチで点火するようになったが、流石にバーのマッチと気付いて良心的にゆるされないものを感じたのである。

騒音に馴れて立読自若たり

(伍健)

街路の騒音がブツ突けに耳朶を衝くのであるが、執拗に立読をするほどの心臓の持主だけに、自若として身じろぎもしないものである。

この句「自若たり」の漢文調の誇張法によつて句が生きている。そしてそこから一種のユーモアを発散している。

ベストセラーさうかさうかどう読ます

(柳蔭亭)

生活にあくせくしていると、なかなか読書の時間が見出せないものである。原田の「挽歌」が出た。大谷崎の「鍵」が出た。深沢の「檀山節考」が出た。山崎の「暖簾」が出た。五味川の「人間の条件」が出た。と、次から次へベストセラーの声を聞いても「さうかさうか」と云うばかりで、一冊として読む暇のないことをなげいたのである。世の中には一冊の小説すら読むひまのない人がどんなにか多いことであろう。軽い穿ちの味もあり、中七の「さうかさうか」が、よく利いていると思う。

ゆたんぼの底に値札をはつたまま

(古方)

病人が出来て急にゆたんぼを求めたのであろう。ふと、気がつくと、ゆたんぼに値札が貼つたままである。慌てて買いにやつたその時のことがまざまざとアタマにうか

んで来る。という句である。淡々とした家庭の写生句である。

原子力人間はまだ蚊帳を吊り

(多久志)

原子力で万事を解決しようとする科学の時代に、その裏側ではまだ蚊を防ぐのに蚊帳を吊つて人間が存在することを面白く感じたのである。科学が人を殺すとなると、科学々と騒ぐよりも、蚊帳の中の平和こそ真の平和かも知れない。

棺桶に入った様な仕舞風呂

(春雄)

内湯であることは云うまでもなからう。一日の仕事を終えて戻つて来た身にはそれが仕舞風呂であろうと疲れを慰めるには充分だと云えよう。もう洗う元氣さえない。湯槽にふかぶかと身を沈めて、静かに目をつむる。ふとアタマにうかぶのは棺桶に這入っている自分の姿である。それは疲れ切つた人のこころでもある。

受話器を押えて留守だと言いましよか

(高志)

貸借関係にある人からの電話であろう。話し言葉で生かした句である。人物も判り、情景もよく出ている。スケッチの句であるが、軽い穿ちもある。

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

乃木さんに似た人と会うひとり旅
草千里私も馬になって来る
槍 穂高 借景とするログハウス
世間から見れば言うことない夫婦
傳いて笑うことなき盲導犬
軽い愛女の傘をさしている
祇園囃子だんじり囃子街の風
雲行きは夕立らしい川向こう
盆踊り河内音頭でしめくくり
午歳新春
甲斐駒も木曾駒も新春勇むらん
梅凜と咲くを受験子見て出掛け
弟んぼが大学に入り夫婦の夜

いい返事するお隣のお嫁さん
横顔のほうがよいとも言いかねる
ペンほどに重からずまた軽からず
釣道具魚拓数枚形見分け
折り畳み傘にわたしもなりそうで
読む限り末法の世も面白し
三歳の孫消すことを知りはじめ
感心はしたものの落書を消す
その頃の羽振りがアルバムに残る
うれしさを猿は齒をむくしか出来ぬ
公民館冷房市役所は赤字
名刀無銘昔の人は名を惜しみ
読ん知らず私の好きな相聞歌
一番の子の健康が案じられ
人品は卑しからぬが女好き
七夕にアルタイベガの名もゆかし
山桜高野四郎は髯殿よ

英語 de Senryu ⑤⑩

麻生路郎句集『旅人』

英訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

名もしらぬ山の起伏をうれしがり

happy to face

*the beautiful undulation of mountain
with an unfamiliar name*

その日ぐらしも 軒に雀が こぼるるよ

I don't know where

*my next meal is coming from,
but sparrows gather under the eaves*

undulation 波のような動き(形) *mountain* 山 *unfamiliar* なじみの薄い
meal 食事 *sparrow* 雀 *gather* 集まる *eaves* 家の軒 ひさし

～リバーウィローのため息～ R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳⑭

ブライス著 *SENRYU* の *Professions* (職業) から (子守・乳母) と (改札係) を取り上げます。彼は日本人の職業に興味があったのでしょうか 71 句の川柳を英訳しています。

日本語で問はれ改札ホツとする (吐潮)

(Asked in Japanese, / The ticket-collector / Is relieved.)

「駅の改札係は乗客の切符を切っていると、自分のほうにやって来る外国人を見てうろたえた。しかし多少ともよどみなく日本語が話せる外国人とわかって、どんなにか安心したことか。」とブライスは解説しています。改札係の動揺はいかばかりかと同情しますね。作者の吐潮については『川柳総合事典』には紹介されていません。

乳母車腹で押し押し編んでる (五健)

(The nursemaid / Keeps pushing the pram with her stomach, / Kitting)

ブライスは「この川柳には禅的な面白さがあります。それぞれの腹が用途にかなっています。腹は時には食べ物や蓄え、時には子を宿し、また時には乳母車さえも押すのですから。」と彼独特の視点でこの句をとらえています。英訳には日本語にはない子守にあたる (*nursemaid*) を加えて、彼女が編み物をしながら乳母車を押す様子を浮かびあがらせません。*nursemaid* と *pram* (乳母車) の意味の取り合わせ、*push* (押す) と *pram*, *keep* と *knit* の音の取り合わせが見事で、声に出して読むと円やかに響いて素敵です。作者の五健 (伍健 1889-1960) は、大正末年「凧」同人から愛媛県柳界の第一人者になった人物です。全国各柳誌に作品、漫文で活躍し、野球拳の創始者でした。

参考文献: R.H.Blyth, *SENRYU* (北星堂 1949) p.125, p.128.

尾藤三柳編『川柳総合事典』(雄山閣 1984) p.116.

民族の詩歌 (44)

現代女性柳人あれこれ

三好專平

明治二年、山口県萩に生まれた岡ノ浦は、明治三年、妻に先立たれた井上劍花坊と再婚、大正二年「大正川柳」(のちの「川柳人」)の創刊に尽力する。「夕からす帰った後に子守なり」。

昭和三十三年八十八歳でなくなった信子の追悼号(107P)が「柳樽寺川柳会」により刊行。トップに諡・(柳人院幸宝貞信大姉)とあり、その下に「国境を志ら怒草の実こほれ合ひ」の句と写真が載り、百人以上の柳人が文章と句を寄せている。社会に目を向けた句を詠み続け、清潔で、やや頑固であったという。トルストイや藤村が好きで、生前、鶴彬の世話をしたかどで雑誌が発禁になったことがある。

吹き消されまいと心の燈を守る

永遠へつなく生命の糸を張り
黎明の一点にある闇なりし
地球儀の丸さの平和望ましく
一滴の涙両手でうけて寝る

信子以前には、阪井素梅女、伊藤政女、
下山岐陽子らがいる。

俄雨帯を包むが女なり
長刀を杖に阿能は我君へ
細い雨断頭台に啼く鴉
素梅女
政女
岐陽子

同じ世代の女性柳人より
これ以上人形らしくなりきれず
唇の赤さを今日も守りきり
いけにゑのやうに冷たくつましく

髪さへも素直にとけて呉れぬ朝
一つ脱ぎ二つ脱ぎ人間らしく
素裸になつて心が抱き合ひ

蛇悪魔出さうに柘榴熟れしきる
君の青私の青と違ふなり
月おぼろ君の情けに似ておぼろ

吉田 茂子

麻生 霞乃

ギユツと捻る水道栓の決断
絶対の否定空にいっぱいに立つ
歩いても座つても針の先が触れ

大石 鶴子

沈黙の骸は過去を閉ぢ込めて
あへぎつつたどり着けば断崖
流れゆく日々水のごと風のごと

近藤十四子

朝日カルチャーの時実新子の「川柳講座」に一年ほど通つたことがある。熱狂的な女性フアンの集まりで、男性は影が薄かった。

墓の下の男の下に眠りたや
凶暴な愛が欲しいの煙突よ
よく笑う妻に戻つて以来 冬

現代作家より。

指人形に静寂を吹かせ夫がゐない

福島 真澄

吊橋の落ちる刹那を逢いにゆく

児玉 怡子

デート炎日とかげをベットに蛇を

三浦以久代

誹風柳多留一一一篇研究 32

石川道子・小栗清吾

細井龍夫・伊吹和男

山田昭夫

清博美

258 松の内笑ふ門トへハ乳母来る

石川 お正月の万歳。乳母は、色っぽい言葉も飛び出すこれが大好き。万歳が来ると乳母が出てくる。笑う門には乳母(福)来る、である。

清 贊。万歳に乳母たましめをはいとられ 拾二 五千歳過キると乳母を笑ハせる 安五天一

259 娘のくれた矢で御のふ直したり

石川 近衛帝を悩ませた鶴を退治したとき頼政が用いた弓矢は、先祖頼光から伝えられたものであった。この弓矢は楚の養由基の娘榊花女が頼光の夢枕に立ち授けたという。

もろこしの弓矢でぬえハるころされ

清 贊。

260 生男が袖へすがるでげびる也

石川 生男は粗野で礼儀を知らない男、色気のない男、無骨、無粋な男(「広辞苑」)。こんな男が袖にすがると、恥ずかしくて見ていられない。いい年をした陰間か、遊郭での浅黄裏か。鬼界ヶ島の俊寛も考えたが、生男というのには当たらないであろう。

よし町ハ化ケそうなのを後家へ出シ 三二 何シのなにかしを女良ハむこくふり

小栗 「げびるなり」の句は、圧倒的に、主

人公がそれにふさわしくない行動をとるので、本来の品性が劣って見える、というようなニュアンスに作られている。あるべき姿は別にあるというニュアンス。

けいせいはいきつとすわるとげひる也

天二礼3

番頭が江戸言葉でハげびるなり

傘もすぼめて持ツとけひるなり 天七10 25

その他多数。

そのルールで主題句を見ると、「無粋な男」が本来やつてはいけない「袖へすがる」という行動をするので「げびる」ことになるが、無粋であれ何であれ、男が袖へすがると言語道断であって、「げびる」というような評価をすることではないと思う。

駄劣解だが、「生男の袖」へ「女がすがる」のではなからうか。粋な男の袖にすがるのは絵になるが、生男では不細工な姿としか言えぬと。遊女か。

清 小栗説贊。川柳によく見られる表現方法で、主語を見極めることが大切。

261 金といふものハと嬢をむこくする

石川 色々な場合が考えられる。持参嫁であらうか。あんな御面相でも持参金つきで立派

に嫁入りもでき、まったく金というものは：と近所の人たちがいつているというようなとか。逆に裸嫁の場合は、うちに比べて、あそここの家は嫁の持参金があつたから繁盛している、本当に金というものは：と、暗に持参金のない嫁を責めていることも考えられる。

男の顔を金ではるあばた来る

一八二

金の威光は怖いもの縁につけ

二六三

小栗 持参嫁贖。持参金のお蔭でピンチを脱したことなどすっかり忘れて、「金と言うものはありがたいものだねエ、お前さんのようにひどい女でも嫁に行けるんだからねエ、身近な者はたまつたもんじゃないのサ」などとはざいている姑。

清 のど元過ぎて、持参嫁の来た経過を忘れ、つらく当たる姑の言。

262 死んでしらせたのが公事のおこり也

小栗 公事は、訴え。訴訟（江）。

放蕩息子勘当の句だと思ふ。放蕩息子が勘当されて銚子にやられている内に、父親が亡くなつた。勘当の身分ではあるが、父親の死を知らせてやつたところ、遺産は俺の物だと家督公事を起こした、というようなストーリーだろう。公儀に届け出た本勘当では勝ち

目はなかるうが、内証勘当だと少々もめるかもしれないぬ。

てうしからしばらくをいふかとかく公事

安元義四

かとかく公事相手はしかのふねで来る

安一権二

清 贖。この息子まだ十分に反省していないと見える。遺産を渡せば、またぞろ吉原へ運んでしまふ。

263 きやうげんを見ずにはかまではむく也

小栗 羽向くは、①権勢ある家に進物などして親しむ。出入りする。②へつらう。ご機嫌を取る。おべつかを使う（江）。

芝居小屋の客席で、袴を着けた正装の人が、舞台そつちのけで客のご機嫌を取つていという光景であろう。ただし、状況の特定が悩ましい。

この句は、柳雨『川柳江戸歌舞伎』に「不明なれども何となく絵島の棧敷のような気分もあるのだ」として絵島の項に採句され、三面子先生が「千代田大奥」の記述を引いた上で「多分此事件を詠める句かとおもわる」とコメントしておられる。また、同様に「史伝」においても「絵島」の句とされ、この羽向い

ている人物は、幕府呉服御用達次郎兵衛、清助、山村座座主山村長太夫と解説して、さらに、

袴着て真先に居るもふけ筋

八四

袴着て棧舗へ通ふよろしき儀

八八

おせまかるなど、はかまで折をあげ

拾九四

の句を挙げておられる。

大先輩がかなり確定的に「絵島」としておられるので迷うが、句の雰囲気はどうも絵島とは違うような気もする。一般句とすると、たとえば商家の主人が大事なお客を接待するような場合が考えられる。しかし、それも何が面白いかという気もする。そこで、異論覚悟で、見合いの句とする。ようやく両家その気にさせて芝居小屋での見合いに漕ぎ着けた仲人、ここが勝負所と舞台そつちのけで、羽向くの懸命という光景。前掲八八もそういう句ではなからうか。

鶉から土間へ仲人指をさし

三〇九

伊吹 細井氏の見合の仲人説に賛。

山田 絵島、商家の主人、お見合説いずれも成り立つと思ひます。この措辞だけでは特定は出来ないでしよう。

清 小生にも特定出来ず。なやましい句である。

愛染帖

新家 完司選

(投句) 277名

大阪府 高木 道子

五郎丸のポーズで赤子泣いている

(評)イケメンのラガーマン「五郎丸」の集中ポーズが大ブレイク。集中して泣いている赤ん坊には悪いが、笑わせてもらった。

ボーナスの話に耳が横を向く

枚方市 伊達 郁夫

(評)年に二回、リッチな気分にしてくれたボーナ。縁がなくなつてからはニユースさえ目障り耳障り。年金にもボーナを!

縁起良いポストがあつて遠まわり

鳥取県 斉尾くにこ

(評)近所ではなく、たまたま通りがかりに投函したポスト。それが誌上大会で天位!?その「ラッキー」が続けばいいのだが。

動物園駝鳥の餌を鳩が盗る

神戸市 上田 和宏

(評)駝鳥が追いかけても、鳩たちはパツと飛び立って逃げるだけ。気の毒な駝鳥、「俺も飛べたらなあ」と思っているのかも。

あの人も逝つた「東京物語」

欄原市 居谷真理子

(評)小津安二郎監督の名画「東京物語」。出演は笠智衆、東山千栄子、杉村春子、山村聡、そして主演は原節子。まさに往時渺茫。

散髪が済めば今年の予定ナシ

枚方市 松原 保

(評)散髪して新年を迎えよう、という気構えがあるうちは大丈夫だが、「予定ナシ」が続くとボケやすい。意識して予定を作ろう!

予定ないからもう少し寝ていたい

海南市 小谷 小雪

(評)北風吹きぬぐ寒い朝も、こころひとつで暖かくなる。という歌もあるが、誰が何と言おうとほっこり温い布団がいい。

行きたいなマチユビチユナスカガラボゴス

大阪市 江島谷勝弘

(評)簡単に海外旅行が出来る時代になったが、未知の土地はいっぱいある。本気になれば行けるのだが、なかなか決心がつかない。

金婚を区切りに別に寝るといふ

府中市 岸田 武

(評)五十年も一緒にの部屋(一緒にの布団?)で寝ていたのだから「もういいでしょう。お互いに「独り」の予行演習をしなければ。

五七五壁にぶつかり墓参り

枚方市 見山 温子

(評)壁にぶつかったときの対処法は人によ

つて異なるが「墓参り」というのはユニーク。ご先祖さまが知恵を貸してくれるのかも。

大阪府 米澤 俣子

大阪弁の優し豆さんお苦さん

大阪市 柴本ばつは

宇宙滞在ようしやはるなうちはイヤ

大阪市 井丸 昌紀

銀杏の頃はかなわん御堂筋

おまへんか豊んでくれる洗濯機

七五三孫は男でちよつと地味

褒められた寄せ植え目立つ場所に置く

爆買いを日本人もして欲しい

立ちキユウをしていた頃は炎えていた

値切つたら「安くしてる」と素っ気ない

成るようになるほど甘くない老後

銀杏散る校長筆離せない

宮島で朱に染まったフルムーン

フルムーン妻に懺悔をさせられる

番号で呼ばれるだけのお付き合

長男はキツネ次男はネコ娶る

にわか介護でぶんどつた大遺産

尼崎市 清水久美子

西宮市 片山 忠

田辺市 岡本 昇

島取市 夏目 一粹

岡山市 藤成 操江

島取市 夏目 一粹

和歌山市 福井 菜摘
紙とペンあれば私の小宇宙

三田市 石原 歳子
正月号投句すること忘れてた

高知市 小川てるみ
愛染帖が肩の力を抜けという

富田林市 小出 修三
添削の赤で一句が甦る

高槻市 富田 保子
晩学の老いの仲間に電子辞書

和歌山市 喜田 准一
今日来ない明日は来るかと待つ柳誌

大阪市 宇都満知子
私より胸が揺れてる相撲とり

倉吉市 牧野 芳光
良い天気多分取締まりをしている

河内長野市 山岡富美子
老後とは居間とトイレの往復だ

神戸市 細川 花門
免税店おらが町にもやって来た

神戸市 花門
ケアハウスいつか圧力団体に

大物になれぬ正直者だから
今夜だけキリストさんと食事会

岡山県 田中 恵
ハイという大きな返事まだ出来る

布団打つ音が聞こえてくる日和

高槻市 初代 正彦
ママチャリのペダルいそいそ十二月

熊本市 杉野 羅天
十二月歯茎の腫れた方ばかり

貝塚市 石田ひろ子
雲さえも忙しそうな十二月

岩出市 村中 悦男
カレンダーメモで重たい十二月

和歌山市 上田 紀子
ひび割れの街でジングルベルを聞く

神戸市 近藤 勝正
年の暮れ忙なき閑は寂しかり

香芝市 大内 朝子
意地悪へ鈍感力という味方

高槻市 原 洋志
大股で歩けるうちは大丈夫

堺市 矢倉 五月
妻の留守チャンスに何も出来ぬまま

堺市 矢倉 五月
シルバーシート枯野に座る心地して

河内長野市 村上 直樹
愚痴聞いているうちお金貸すはめに

河内長野市 村上 直樹
湯通しをして食べてみるアドバイス

京都府 榎本 宏子
戎橋ここは日本か外国か

へり踏むな亡母の声して蹴躓く
魔屋にぬくい青大将の椅子

豊橋市 藤田 千休
連れ合いのときより辛いベットロス

大阪市 若本 安代
味香り鹿とバトルの茸狩り

松山市 栗田 忠士
うるさいの当て字にされた五月蠅

熊本県 岩切 康子
枯れ葉ぶらぶらぶらと蜘蛛の知恵

尼崎市 市坪 武臣
人間の言葉で猫を叱ってる

防府市 坂本 加代
主に似て猫は奥から出て来ない

高槻市 富田 美義
年豆を砕き雀にお裾分け

枚方市 小林 わこ
ロスタイム持たぬ働き蟻の汗

三原市 鴨田 昭紀
届かない距離からポチがよく吠える

神戸市 松井 文香
高騰でキャベツの芯の旨さ知る

和歌山市 磯部 義雄
五郎丸のポーズでジャンボくじを買う

豊中市 松尾美智代
さつき別れた友と電話で一時間

島取市 岸本 宏章
冗談が通じるうちは惚けてない

芦屋市 黒田 能子
歩きなさい歩きなさいと医者言う

補聴器を持たない人は一列目
三田市 堀 正和

補聴器が電池切れたとやかましい
米子市 成田 雨奇

補聴器の乾電池までチャイナとは
弘前市 今 愁女

補聴器の資料検討ばかりする
堺市 奥 時雄

アラフォオのゴデイバ至福の時間用
大阪市 栃尾 奏子

モビールに合わせのんびりレモンティー
和歌山市 玉置 当代

胸に染む左手だけで弾くピアノ
豊中市 藤井 則彦

キューピッド何度失敗するつもり
佐賀県 真島久美子

石路の日蔭は寒く伊根舟屋
羽曳野市 中川ひろ介

妖怪も集まってくる火垂るの墓
青森市 守田 啓子

ねばついた話ばかりを聞かされる
松江市 石橋 芳山

日曜は家族みんなでサザエさん
八王子市 川名 洋子

居酒屋の前で降りだす粋な雨
河内長野市 松岡 篤

ヤアだけで独りの二人飲んでる
三田市 北野 哲男

百葉の長で五感の活性化
札幌市 三浦 強一

高い酒味の良いうち飲んでおこ
堺市 内藤 憲彦

消費税上げても酒は減らさない
岡山市 池田たか子

よく眠るために飲んでる酔っぱらい
弘前市 高瀬 霜石

盃が進む喜劇が始まるぞ
鳥取市 倉益 一瑤

飲む前はしないつもりのはしこ酒
藤井寺市 鈴木いさお

年の暮れ白菜漬けて熟爛で
三田市 村田 博

もやもやは一杯やればほほ暗れる
広島市 岸本 清

休肝日変更にしたクラス会
河内長野市 谷 久美子

お酒なら銘柄なんか問わぬ僕
枚方市 海老池 洋

路地の奥チユーハイを飲むシンデレラ
堺市 加島 由一

夜のシンデレラ大言壮語千鳥足
八尾市 高杉 千歩

酒飲んだ勢い借りて作句する
笠岡市 藤井 智史

急ぎもの仕上げた晩の旨い酒
大阪市 坂 裕之

下手は下手でんてんと注射痕
男鹿市 伊藤のぶよし

時間外診療で会う研修医
鳥取市 奥田 由美

いい数値でるまで血圧を測る
高槻市 片山かずお

人の世に三度の飯と寺社まいる
唐津市 仁部 四郎

知らぬ間に地雷を踏んでいる母娘
岡山市 紫 しめの

自己責任鼻を信じて食っている
紀の川市 辻内 次根

終の棲家ヤモリ・カメムシお出迎え
桜井市 安土 理恵

筆筒預金してからタンス前で寝る
三田市 福田 好文

憎み抜くそんなパワーはもう出ない
鳥取県 石谷美恵子

自販機でさえもお札を言っている
弘前市 福士 慕情

拡大鏡やつばり指紋消えていた
河内長野市 穂口 正子

濡らさずに旅館のタオル持ち帰る
茨木市 藤井 正雄

私より綺麗金星大写し
羽曳野市 徳山みつこ

図書館は知識の泉だが昼寝
河内長野市 藤塚 克三

紀の川市 山東日出男
ガリレオの振り子は今もゆれている

東京都 川本真理子

始祖鳥のように疲れてうづくまる

沖縄県 森山 文切

鉢巻きでデータベースの実用化

大阪市 内田志津子

下絵にもイメージ通り色を置く

奈良市 辻内げんえい

ああ神よ叱り飛ばしてISSを

大阪市 藤田 武人

頑固者操る母のライセンス

大阪市 平井美智子

私より少し綺麗な嫁がきた

鳥取県 竹信 照彦

近頃の杵柔らかすぎてよく禿びる

大阪市 谷口 義

私のおかげやと思ったことはある

池田市 上山 堅坊

夢多きこころギシギシいう身体

和歌山市 坂部紀久子

誕生日細胞一つ減りました

米子市 生田 和之

河豚鮫鱈鱈と落ちる老い

東大阪市 北村 賢子

抱きしめた初孫がもう二十四

大阪市 古今堂蕉子

子も孫も居て幸せと思っとこ

奈良県 安福 和夫
愛情は金と体力要るのです

藤井寺市 太田扶美代

きれいすぎる話アキビをこらえてる

富田林市 中井 アキ

亡母の歳越えた頃からする昼寝

川西市 山口 不動

もう少しまけてくれぬか墓屋さん

和歌山市 松原 寿子

すつきりと涙を削除して独り

和歌山市 平田 元三

笛の音が焼芋好きを呼びに来る

和泉市 横山 捷也

娘が嫁ぎ静かになった朝の膳

富田林市 中村 恵

嫁姑主婦は一人のほうがよい

河内長野市 梶原 弘光

不用意に席を外すと役が付く

奈良市 尾畑なを江

気が利いて好かれ出すぎてうとまれる

鳥取市 池澤 大鯨

猫だまし妻にやつても無視される

富田林市 片岡智恵子

長話結局てんやもんにする

米子市 竹村紀の治

内視鏡鼻の穴から胃を覗く

大阪市 榎本日の出

胃が強く何を食べても肉となる

神戸市 奥澤洋次郎
片べりの靴で走ってきた昭和

大阪府 小栢こずえ

前向きな元気が湧いてくる化粧

羽曳野市 吉村久仁雄

シルバースhirt座る夫婦に陽の匂い

鳥取市 田中 天翔

原節子八十路の姿見たかった

堺市 大隅 克博

万札に暖房効果あるみたい

江南市 脇田 雅美

二十五円で買った金魚が寄ってくる

松江市 相見 柳歩

教え子の夢を応援できる幸

松山市 郷田 みや

地植ええされ戸惑っているポット苗

鳥取市 谷口回春子

早とちりしては呆けたと誤解され

神戸市 能勢 利子

ゴールドのまままで返そう免許証

尼崎市 山田 耕治

ご奉仕といて在庫の処分品

倉吉市 山中 康子

万歩計なし千五百口ずさむ

小野市 藤原 泰宏

当人の喪中が多くなりはじめ

堺市 澤井 敏治

逝きはつたらしいと風に乗る噂

共選欄

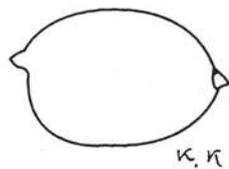
檸

檬

抄

(薫風書、カッタとも)

(投句 369名)



「成り行き」三浦強一選

しばらくは成り行き見ます都構想
寝返りを打ってあしたは明日のこと
成り行きを見守る中で練る秘策
成り行きでまた矢面に立たされる
成り行きの流れを変える咳ひとつ
成り行きでころろ変化する主張
成り行きに任せておけぬ過疎過密
成り行きが気になる牛や豚や米
温暖化成り行き任せには出来ぬ
成り行きにまかせぬ老いの好奇心
成り行きに任せるものか基地の島
成り行きで戦争なんて困ります
よろしいか次は徴兵制ですよ
成り行きで銃は持たせぬ子や孫に
はらはらと見守っている小さな恋

大阪府 榎本 舞夢
紀の川市 宇野 幹子
東大阪市 佐々木満作
貝塚市 石田ひろ子
和歌山市 倉橋 悦子
大阪狭山市 矢野 梓
鳥取市 岸本 宏章
倉吉市 中村 毅
三田市 北野 哲男
出雲市 竹治ちかし
沖繩県 森山 文切
尾道市 小畑 宣之
枚方市 寺川 弘一
三田市 上垣キヨミ
寝屋川市 森 茜

「成り行き」長浜美籠選

成るようになって新年おめでとう
成り行きでころろ変化する主張
知らん間に妻の言うこと聞いている
しばらくは成り行き見ます都構想
宝くじ成り行きで買う運だめし
成り行きを冷めた眼で見る他人さま
成り行きで始めた趣味がはまりこむ
成り行きに任せてからの岩田帯
友達が買ったわたしも買っておく
張った意地引つ込みつかぬまま離婚
ママゴトの延長線で妻となる
しがらみを解いて世相の波に乗る
あれこれと先を読まない悩まない
スモッグに未来が霞む都市北京
木を植えて森になるまで見届ける

藤井寺市 高田美代子
大阪狭山市 矢野 梓
大阪府 坂 裕之
大阪市 榎本 舞夢
箕面市 酒井 紀華
鳥取県 石谷美恵子
加西市 金川 宣子
豊橋市 藤田 千休
豊中市 江見 見清
尼崎市 藤井 宏造
唐津市 山口 高明
三田市 尾崎 一子
大阪市 江島谷勝弘
藤山市 酒井 健二
和歌山市 楠見 章子

ママゴトの延長線で妻と成る
 成り行きで見合ひしてから五十年
 成り行きを期待二人の赤ワイン
 惚れられた強みで玉の輿に乗る
 五十年妻に預けてきた寝首
 成り行きはどうあれここは反対だ
 何事も雲の流れにまかせよう
 成り行きでいい延命は断乎拒否
 成り行きで妻がラッパを吹いている
 成り行きですと優勝の汗ぬぐう
 成り行きに任そなたとえ負けたつて
 成り行きにまかせまあるい石になる
 成り行きとうまい逃げ道言わっしやる
 成り行きに任せた風が温かい
 真剣に調べる補聴器の資料
 あれこれと先を読まない悩まない
 成り行きに任せみのむしふうらふら
 成る様になるさ息子ももう大人
 シナリオに無かった妻の認知症
 成り行きを見守っている認知症
 成り行きで言った言葉の後始末
 老化ですしうおまへんと若い医者
 あの世へはおまかせします阿弥陀さま

唐津市 山口 高明
 登別市 小林 碧水
 池田市 上山 堅坊
 尼崎市 清水久美子
 唐津市 坂本 蜂朗
 鳥取市 土橋 螢
 大阪市 芝本ばっは
 河内長野市 村上 直樹
 島根県 伊藤 寿美
 佐渡市 高野 不二
 藤井寺市 太田扶美代
 瀬戸内市 東横ますみ
 三田市 野口 晶子
 和歌山市 堀 富美子
 堺市 奥 時雄
 大阪市 江島谷勝弘
 高槻市 島田千鶴子
 大山市 金子美千代
 弘前市 福士 慕情
 寝屋川市 富山ルイ子
 鳥取県 下田茂登子
 河内長野市 松岡 篤
 大阪市 田浦 實

成り行きで返事したのが命とり
 M R I 不安な椅子が揺れている
 成り行きに任すしかないオペ前夜
 乾杯で話が合うて三次会
 成り行きで死ぬの生きるの言うた恋
 成り行きですつといい人演じてる
 成り行きはどうあれ父の米作り
 成り行きにさせてはならぬ戦争法
 成り行きに任せ持病を飼ひ馴らす
 成り行きでいい延命は断乎拒否
 はらはらと見守っている小さな恋
 成り行きは許されません安保护法
 強風にまかせて耐えた傷リンゴ
 成り行きで姑と同居の日日楽し
 力抜き水の流れる如く生き
 成り行きは僕とわたしの秘密です
 成りゆきで又負け組の味方する
 試着だけ云われたコート着て帰る
 ひっこみ思案無冠のままで生を終え
 K 点も越えてご沙汰を待つ米寿
 成り行きでこうなつたとは言えず古希
 神様に任せています気楽です
 老衰も在宅も成り行きと悟り

神戸市 山根 弘子
 西宮市 福島 弘子
 三田市 福田 好文
 府中市 藤岡ヒデコ
 寝屋川市 荒川 鈍甲
 大阪市 井丸 昌紀
 高知市 小川てるみ
 京都市 都倉 求芽
 横濱市 菊地 政勝
 河内長野市 村上 直樹
 寝屋川市 森 茜
 八尾市 前田 紀雄
 弘前市 高森 一吞
 八尾市 宮崎シマ子
 堺市 大隅 克博
 大阪市 川端 一步
 富田林市 中井 アキ
 八尾市 山根 妙子
 鳥取市 池澤 大鯨
 香南市 桑名 孝雄
 茨木市 島田 誠一
 三田市 北野 哲男
 八尾市 高杉 千歩

成り行きに任せなさいと他人事	横浜市	川島	良子
成り行きで賛成の手を低く上げ	南あわじ市	萩原	狸月
二割増し成り行き話す事故現場	茨木市	藤井	正雄
成り行きで一人ぐらしの現在地	和歌山県	森下よりこ	
成り行きで猫と寝食共にする	岡山県	紫 しめの	
成り行きを黙って見てる母じゃない	大阪市	原田すみ子	
勢いでみんな引き連れ二次会へ	八王子市	川名	洋子
二次会は成り行きまかせどこへでも	鳥取市	春木圭一郎	
成り行きを見て神様も匙なげる	堺市	加島	由一
おしゃべりな私無口なキミと居る	松江市	藤井	寿代
成り行きに委せた風邪が命取り	札幌市	小沢	淳
成り行き嬉し逆転ホームラン	枚方市	小林	わか
成り行きもここ一番にいる理性	香芝市	大内	朝子
成り行きで先の見えない舟にのる	桜井市	安土	理恵
成り行きで黒いカラスを白と言う	貝塚市	吉道あかね	
成り行きで今日はピエロの役回り	高知市	小川てるみ	
処生術にも差し値派と成り行き派	枚方市	海老池	洋
成り行きという人生の遊歩道	神戸市	細川	花門
腹くくりまずはたっぷり食べて寝る	河内長野市	大島ともこ	
秀 句			
ガラクタもお宝になる百年後	弘前市	高瀬	霜石
そもそもは屋台の椅子のゆずり合い	米子市	竹村紀の治	
木を植えて森になるまで見届ける	和歌山市	楠見	章子

たんぼぼも私も気ままな旅が好き	神戸市	山崎	武彦
ボケるのも病むのも私の運命	奈良市	大久保真澄	
成り行き委せてきぬ派兵に再稼働	札幌市	小沢	淳
そもそもは屋台の椅子のゆずり合い	米子市	竹村紀の治	
成り行きに任せています子の自立	芦屋市	黒田	能子
可否同数になるまでだんまりを決める	倉吉市	牧野	芳光
成り行き二人の旅も八合目	出雲市	伊藤	玲子
成り行きでまた矢面に立たされる	貝塚市	石田ひろ子	
シナリオに無かった妻の認知症	弘前市	福士	慕情
縁あった夫だ最後まで尽くす	箕面市	出口セツ子	
成り行きで夜明けの海を眺めてる	鳥根県	伊藤	寿美
不摂生の果ては生活習慣病	堺市	村上	玄也
成り行きでトトロの腹になつてます	尾道市	小畑	宣之
成り行きに合った試供品	松江市	石橋	芳山
成り行きに任せるものか基地の島	唐津市	岩崎	實
さげられぬ老いを受け入れあるがまま	沖繩県	森山	文切
小細工はしないこの世はケセラセラ	箕面市	大浦	初音
最善は尽くした後は祈るだけ	高槻市	片山かずお	
秀 句	小野市	藤原	泰宏
成り行きでぼつぼつ遺書を書いてます	田辺市	岡本	昇
成り行きで銃は持たせぬ子や孫に	三田市	上垣キヨミ	
成る様になるさ息子ももう大人	犬山市	金子美千代	

「招く」

(投句 217名)

早川 遯 行 選



悪友のちよつと行こかを待っている
お招きが減って血糖値が下がる
着るものがあるから出席返事する
招かれて嘘つき並ぶ披露宴
招くのは止める酒癖悪いから
蕎麦打ちが趣味の上司に招かれる
金婚が子供や孫を呼び寄せる
小春日が招く布団と日向ぼこ
節穴を見ると向こうを見たくなる
幸せな自分見せたく招いてる
孫達の招くサンタに金がいる
招いたら器にケチをつけられた
杭一本不備を残して招く悔い
石焼き芋の香りが招く昼休み
青い目も招いて孫のヒナ祭り
椅子用意法事に招く人も老い
好き勝手食べて招いたメタボ腹
いらつしやい小さなカフェはあけてます
コスモスが招く優しい片えくぼ
イジワルをされる才能ある証拠

三田市 北野 哲男
和泉市 横山 捷也
枚方市 寺川 弘一
池田市 奥園 敏昭
和歌山市 磯部 義雄
大阪市 高杉 力
唐津市 坂本 蜂朗
三田市 上垣キヨミ
明石市 糍谷 和郎
大阪市 榎本 舞夢
八尾市 宮崎シマ子
西宮市 片山 忠
豊中市 水野 黒兎
大阪府 米澤 俣子
四条畷市 吉岡 修
米子市 中原 章子
堺市 村上 玄也
三田市 上田ひとみ
吹田市 木下 敏子
弘前市 高瀬 霜石

招くのは息子費用はこつち持ち
世界遺産誇る高野の火が招く
戦争のお手伝いしてテロ招く
早朝へ招く空気のうまいこと
目一杯カーテン開けて陽を招く
ココヨココ手を振っている待ち合わせ
災いを招くお口が騒がしい
選ばれた人だけですと来た葉書
会場はこちら笑顔のボランティア
口数の多い分だけヘマをする
父母の風を待つてる茄子の馬
冬の日を招く机の位置かえる
佳句
酸欠のわたしを招く澄んだ空
滑降においてと白銀が招く
駅裏の卑弥呼が招く縄のれん
サミットへ海老が手招きする伊勢路
バツカスが招き生まれてきた私
人
善人を招いたと言う断われず
地
介護せにやならんけ今は呼ばんとね
天
溝出来ぬよう結局はみんな呼ぶ
軸
良い酒が手に入ったと友を呼び

京都市 榎本 宏子
高槻市 富田 美義
鳥取県 竹信 照彦
倉吉市 山中 康子
東大阪市 北村 賢子
羽曳野市 徳山みつこ
和歌山市 武本 碧
神戸市 細川 花門
大山市 関本かつ子
紀の川市 宇野 幹子
札幌市 三浦 強一
紀の川市 辻内 次根
大阪市 寺井 弘子
東大阪市 佐々木満作
奈良市 米田 恭昌
豊橋市 藤田 千休
池田市 上山 堅坊
三田市 野口 晶子
鳥取市 津村 律子
大山市 金子美千代

「要領」

(投句 213名)

武本 碧選



負けて勝つコツ身につけてから目覚め
要領よく浅瀬を渡る生き上手
要領の悪い紅葉が溝の中
不器用でいいんですラストワルツは
要領の悪い男の自尊心
いざの時要領悪くまた転ぶ
いざとなりや想定外と切り抜ける
要領が悪いジャガイモ煮崩れる
要領の手ほどき受ける縄のれん
要領の悪い私に飛ぶ吹矢
要領を知らば何でもない手品
要領は柳に風で生きている
要領よくゆくはずだった如意の棒
老いの恋介護のように手を繋ぐ
バイキングと聞いて一食抜いて来る
逃げ足の速い次男のあかんべー
要領の悪い子もいる子たくさん
要領を掴んで早い立ち直り
要領よく出来たつもりが水が洩れ
要領で生き残れると言う甘さ

高槻市 原 洋志
高槻市 島田千鶴子
大阪府 高木 道子
熊本市 杉野 羅天
紀の川市 辻内 次根
大坂市 藤原千恵子
三田市 堀 正和
弘前市 吉川ひとし
奈良市 米田 恭昌
紀の川市 北山 絹子
堺市 村上 玄也
大洲市 中居 善信
和歌山市 福井 菜摘
池田市 上山 堅坊
貝塚市 石田ひろ子
大山市 金子美千代
紀の川市 宇野 幹子
和歌山市 上田 紀子
大阪府 榎本 舞夢
和歌山市 喜田 准一

要領良く生きて心を置き去りに
神業かさつと変身だんご虫
手八丁口八丁でよく稼ぐ
要領を丸く弾みをつけている
要領ばかり読んで男に覇気がない
ゆっくりとはつきりしない話聞く
胡麻すりの面倒をつい見ってしまう
要領よく生きて余白を残しとく
ドッコイショ呪文に腰がすつと浮き
核心を押えてあとはアメとムチ
要領の良さ三角も丸くする
上げた手を下す要領考える

佳句

要領を得ぬままボール見えてくる
要領を掴むと入るトッブギア
認知症要領得ぬも母は母
要領を得ぬ話して煙に巻く
引き際の美学要領の哲学

人

子育ての要領卵剥くように
聞いたふり聞かぬふりして世をわたる

地

天

この世仮の世ひよいと出るドア入るドア

軸

近道がいいよと影がささやいた

箕面市 出口セツ子
弘前市 今 愁女
和歌山市 磯部 義雄
海南市 小谷 小雪
高知市 小川てるみ
大阪市 古今堂蕉子
唐津市 坂本 蜂朗
西予市 黒田 茂代
札幌市 三浦 強一
堺市 内藤 憲彦
生駒市 飛永ふりこ
和泉市 横山 捷也

東京都 川本真理子
笠岡市 藤井 智史
西宮市 福島 弘子
鳥取市 池澤 大鯨
大和郡山市 坊農 柳弘

鳥取市 福西 茶子
鳥取市 夏目 一粋

弘前市 高瀬 霜石

「工夫」

(投句 214名)

出 口 セツ子 選



工夫したレシビを妻に褒められる
ひと工夫母の味する夕御膳
月末は妻の工夫が載るお膳
百均で造るひとつだけの世界
工夫して心豊かになる余生
最大の工夫をしたいピンコロリ
からくりの工夫見事な知恵を見る
先人の工夫が生んだ沈下橋
断捨離を勿体ないへ一工夫
接し方工夫ひとつで子は育つ
ありあまる米は粉にするパンにする
すっぴんに見える化粧へ一工夫
追伸に心ゆさぶるセリフ置く
生きるため看板少し変えてみる
明治からの火鉢に金魚泳がせる
落ち込んだ先に笑いの壺見つけ
客寄せの工夫あれこれ小商い
清貧が工夫をさせた昭和の子
本当は涙とパンを飲みこんだ
工夫する戦後を生きた底力

藤井寺市 鈴木いさお
和歌山市 松尾 和香
南あわじ市 萩原 狸月
青森県 松山 芳生
神戸市 山根 弘子
池田市 上山 堅坊
松江市 小川 注湖
西予市 黒田 茂代
大阪府 高木 道子
富田林市 肥山 一文
橿原市 居谷真理子
宝塚市 田中 章子
三田市 堀 正和
高槻市 原 洋志
弘前市 今 愁女
大阪府 野田 栄呼
河内長野市 坂上 淳司
富田林市 山野 寿之
大阪市 榎本日の出
大阪府 小栢こずえ

ひらめきと工夫が呼んだノーベル賞
職人の工夫を詰めた道具箱
見応えは工夫こらしたルミナリエ
渋柿を工夫で甘くした祖先
近大の工夫なまずをかば焼きに
コロンブスの卵に学ぶ一工夫
長生きに工夫はないという白寿
これからも元気に生きる工夫する
温暖化防止と原発再稼働
お買物すこし工夫し義援金
人間を自堕落にする発明家
ファッションへわたしらしさのひと工夫

佳 句

工夫した料理に誰も手をつけぬ
悪知恵の工夫に長けている詐欺師
省エネを工夫地球の危機だから
自爆テロ生きる工夫を何故しない
盗作も工夫のうちのエンブレム

人

オレオレへ家族で工夫するガード

地

工夫冴え特許につなぐ町工場

天

テロ無くすアイデア世界は待ち望む

軸

魔材が宇宙に化けるアーティスト

宝塚市 丸山 孔一
唐津市 坂本 蜂朗
大阪市 津村志華子
大阪市 奥村 五月
奈良市 加門 萌子
出雲市 竹治ちかし
倉吉市 渋谷 重利
大阪市 榎本 舞夢
岡山市 紫 しめの
高槻市 富田 美義
弘前市 高瀬 霜石
香芝市 大内 朝子
大阪市 板東 倫子
三原市 鴨田 昭紀
可児市 板山まみ子
枚方市 寺川 弘一
堺市 澤井 敏治
横浜市 菊地 政勝
豊中市 水野 黒鬼
大阪市 若本 安代

初級教室

題 一 道

山口 光久

「ら抜き言葉」や「い抜き言葉」が若者の会話やテレビでよく使われています。最近は年配の人でも使っています。

一時、正しくない日本語と非難されましたが、もはや止めようがありません。でも、文章を書く時には、まだまだ一般的ではありません。一方、川柳では十七音字と字数が決まっていますので、つい「ら抜き」や「い抜き」の句が生まれるものです。

起きられない — 起きれない(ら抜き)
寝られない — 寝れない(ら抜き)
洗っている — 洗ってる(い抜き)
覗いている — 覗いてる(い抜き)

実際、「ら抜き言葉」や「い抜き言葉」に違和感を感じる人は減っているようですが、不快感を感じる人がおられるのも事実です。「ら抜き」「い抜き」言葉は、リズムが良くなりませんが、よく考えて使いましう。

【添削】

原 道の駅乗る人なくて大繁盛

柳 三

道の駅は高速道路に設けられた休憩施設で、多機能パーキングです。名前は道の駅でも乗降客はいないでしょう。でもよく繁盛しています。

添 多機能を持つて繁盛道の駅

原 何処へ行っても必ずチェック道の駅 清 司

何処へ行ってもが、適切であるかどうかです。道の駅は休憩する所ですから、休憩の度にチェックを。

添 休憩するたびにチェックの道の駅

原 土手道を歩き川風快よい (山久 子)

「道」は要りません。「快よい」は、「快い」ですが、心地好いのでいいでしょう。

添 土手を散歩涼しい風が心地好い

原 趣味多くこの世じゃ全て道半ば 敏 昭

「この世じゃ」が冗句です。

添 趣味多くあれやこれやで道半ば

原 散歩道熊よ出るなど鈴らす 紀美恵

「熊よ出るなど」の気持は解りますが、別な言葉を探しましょう。「鈴らす」は、鈴ならず、ですね。投句時にもう一度確認する癖を付けましよう。

添 散歩道熊を警戒鈴鳴らす

原 真すぐに選んだ道に迷いなし

登 子

「真すぐに選んだ」が分り難いです。熟慮して選ぶか、迷わずに選ぶかでしよう。

添 迷わずに選んだ道に狂いなし

原 真つすぐな道の果てには何が待つ ゆかり

「何が待つ」と、読者に想像させるのもよいでしょうが、自分の心境を詠んでみましよう。

添 真つ直ぐな道の先には無我の境

原 道迷い勘に頼って行止まり モ モ

添 道迷い勘に頼って摸索する

原 散歩道丘の夕焼見に走る ミヨノ

「見に走る」では、そのままの状況です。

気持ちを詠みましょう。

添 散歩道丘の夕焼け見惚れてる

原 回り道これも人生色深し 加 代

添 回り道これも人生出会う恋

原 寛容になれず狭めてしま道 重 利

「狭めてしま道」が適切かどうかです。

他の言葉を探しましょう。

添 寛容になれず道理に外れてる

原 ドキドキと顔が見たさに廻り道 満 寿 恵

添 ああ人の顔が見たくて回り道

原 生きた道母の昭和はヨイトマケ(今)廣 子

添 生きてきた道は昭和のヨイトマケ

原廻り道それでも春を待っている 英男

添期待して春を待っている回り道

原御開きで夜道に恩師消えていく (高) 敬子

添御開きに恩師笑顔で夜の道

原楽な道歩けば先に苦難待つ 孝明

添楽な道行けば苦難が待っている

原正倉院にシルクロードのゴール観る ひろ介

添正倉院展シルクロードの姿観る

原故郷への海道帰心先を行く 勝正

添故郷への海道帰心先の如し

原君は君信じる道を行くがよい 秋星

添お互いに信じる道を行けばよい

原ゴールデンゲイトを歩き夢を見た 寧

添金門橋歩き明日へ夢を見る

原急ぎ足ゆるめて歩む老の道 福貴子

添急ぎ足ゆるめるのんびり老いの道

【少しの修正でよくなる句】

原進路先稼業がおもい三代目 由美

添進路には稼業がおもい三代目

原横道をしたらストレスぱっと散り 雪菜

添横道にそれてストレスぱっと散り

原回り道そこで見つけたのは花野 忠士

添回り道そこで見つけた人の道

原迷う日もお天道さまに守られる ひろこ

添迷う日もお天道さまに見守られ

【入選句】

鞠追ってきた子へ渡す坂の道

一億が総活躍の怖い道

年の功逃げ道つくることも知り

巨匠逝く妖怪ロード客あふれ

好きな道元気に進めランドセル

職退いて楽しみながら趣味の道

散歩道お洒落な犬も防寒着

下道をゆっくり走る定年後

通学路挨拶交わせ元気で

子には子の行く道がある邪魔はせず

迷わない私の描いた道を行く

膝交え互の道を語り合い

長い道やっと思つた青い鳥

避難所を目指し坂道駆け上がる

何事も優柔不断老いの道

これからも曲がった道を歩くけど

採り立ての野菜の売れる道の駅

外灯も番号も無い俺の道

国訛りに響く道の駅

人の道はずさないように子に諭す

未来への道を探って僕はゆく

趣味の道ゆつくり細く長くいく

カーナビも迷子になった村の道

筋道の立つ話なら無視出来ず

(前) 洋子

喬

里子

和之

亜希子

国和

律子

智史

開子

のり子

純子

安子

(山) 弘子

きっこ

紀雄

高弥生

(畑) 節子

泰宏

義徳

こずえ

(斎) 宏子

(見) 温子

洋一

元三

カーブした道の前にはおとし穴

平坦な道にも落とし穴はある

裏道で出逢った人を好きになり

どの道を選んでいても現在地

【佳句】

分れ道厭しい方に一歩出す

いろにはは渡る世間の人の道

一心に信じた道がはやけ出す

登山道氣を引き締める遭難碑

あの方も杖の友達老いの道

【今月の推せん句】

白菜が肩を並べる道の駅

高速道路に設けられた多機能パーキング。

地元の特産品が所狭しと並べられています。

白菜が肩を並べている姿が浮かんできます。

勲章に無縁の道を歩いている 川名 洋子

勲章は国家や社会のために働き、功績の

あった結果です。普通の人は、好きな道を

黙々と働き勲章とは無縁の道でしょう。

通リやんせ川柳塔へ行く道じや 東内美智子

皆さん、川柳塔へ行く道を堂々とお通り

下さい。そうして、川柳塔を支える一本の

柱になって下さい。

【私の句】

情報を拾い集める回り道

(富) 恵子

ひとし

風花

天翔

忠貞

昭枝

孔一

狸月

勝治

高木 道子

高木 道子

川柳塔鑑賞

同人吟 竹 治 ちかし

—1月号から

菊紋のお菓子戴きおそれ入る

岩 切 康 子

発芽した夢へたつぶり水をやる

古久保 和 子

心配していた私の夢が期待に込えて芽を出してくれた。さあこれからが大変だ。たつぶりと水をやって、しっかりと根付かせなくてはならない。くれぐれも枯らさないように。

五十年妻は根を張り枝伸ばし

坂 本 蜂 朗

ユーモアを感じ思わずニコツとさせる句になっていきます。まさしく男の作家の句でしょう。同性としてまったく同感です。年毎に遅しくなっている妻の木に対して夫の木は：想像に任せます。

皿に盛る愛という字のかくし味

石 谷 美 恵 子

皿に盛られた食べ物何気なく食べていた私ですけど、そうだったのですか。美味しく食べていたのもその中に愛という隠し味があったのですね。

断捨離をすると昔が消えていく

山 下 節 子

ブームとなった「断捨離」という言葉に泣かされた人も、私を含め多く居ることでしょう。なぜか過去の自分の存在を否定するような気がします。想い出の昔が消えて行くのですから。

世が世ならと呟いているカラス達

松 本 文 子

「世が世なら…」とは、お酒が入ると良く聞かされるフレーズです。結局世が世であつても、カラスはからすなのです。ただ賢いカラスなら今の世でも鷹や鷹になるように頑張っていますけど。

まだ亡父の歳を越せないから死ぬぬ

平 田 実 男

同感です。男なら父の、女なら母の亡くなった齢には特別な思いがあります。父の齢になつても父の山は越せませんけど、せめて齢だけは越えたいものです。

日本人なら誰でもそう思うのではないでしょう。以前私も、皇居へ草刈りの奉仕作業に行かれた義父から「恩賜の煙草」というものを貰ったことが有りました。おそれおおくでと大切に過ぎ何本か駄目にしてしまいました。ですから康子さんもおそれ入りながらも早めに戴かなくてははいけません。

電線を辿つていくと僕の家

森 山 文 切

岸本水府師の「電柱は都につづくとなつかしさ」という句が思い浮かびました。でも今頃は、街の中に電線も電柱もあまり見られなくなりましてので、郷愁を覚える事も少なくなりまして。

効く効く効く三回唱え薬飲む

笠 嶋 惠 美

思わずそうだったのかと感心致しました。そうすれば確かに効くような気がしますが、私も明日からは恵美さんに習つて薬を飲むように致しましょう。毎朝出雲の地からも、「効く効く効く」という言葉が聞こえる筈です。

欲張つて五輪まではと命をい

津村 志華子

東京五輪が決定した時の街頭インタビューで多く聞かれました。人間は目標を持つと頑張れると聞きますので、是非とも頑張つて五輪を見ましょう。またその年には、はやぶさ2がりゅうぐうから帰つても来ますので楽しみにです。

何にでも首突つ込んですぐ飽きる

伏見 雅明

元気に老いることの第一は、色々なことに好奇心を持つことだそうです。すぐ飽きても良いではないですか、首を突つ込んでいる内は夢中で居られるのですから。年を取っている暇はありません。

いとおしむポーズでしみの手を包む

山本 半銭

仏に対する合掌の姿なのでしょう。いとおしむポーズといえは今の時期、ラグビーの五郎丸さんのルーティーンの姿が浮かびます。蹴る前の折りにも似た指を組み合わせたポーズには感動を覚えました。いとおしむポーズなら、しみの手であつても仏様も喜んでくれることでしょう。

下戸やのに飲んだふりして3次会

梶原 弘光

3次会という言葉に思わず、須崎豆秋の句「骨立てたまま二次会へついで行き」という句を思い出しました。下戸なのに飲んだ振りしてお付き合い、なかなか出来る事ではありません。場を白けさせない態度はご立派です。

鈍行の窓側私もう詩人

松村 里江

空想に遊ぶ一人のロゼワイン

中村 恵

川柳作家の多くは詩人だそうです。この二つの句にも詩人の香りがする作家が浮かびます。鈍行の窓の向うにも、ロゼワインの香りの向うにも、ポエムの世界が広がってきていることでしょう。

人間の言葉で猫を叱つてる

市坪 武臣

そう言えばそうですね。面白いところに気付きました。なかなか言う事を聞かないからと怒つても、猫からみればいい迷惑です。猫語で言ってくれるのなら解るのですけど。人間の勝手さをチラツと鋭く詠んでいます。

還暦を越えて大人の顔となる

加川 靖鬼

二十歳を過ぎれば一応大人なのですけれど、大人の顔にはなれません。昔なら「四十にして惑わず」でしたけど、今では六十なのでしょうか。でも以前どこかで見たものに、「五十六まだまだだも、大人の艶は古稀喜寿米寿」とありました。それから見ると六十はまだ子供なのかもしれまん。

種無しを食べて神様すみません

山田 耕治

神様の域を犯していく現代の人間の行為に怖いものを感じます。最近の果実では、種無しで皮ごと食べられるものが好まれると、生産者さんが言つて居られました。人間の勝手が自然の摂理をも破壊していく現代です。

縁結びの神は近頃疲れ気味

福田 好文

毎年神在月に出雲に集まる八百万の神々で神議りという行事を取り計らつてご縁が決定されます。それなのに、こんなにも高い離婚率、縁結びの神様のお疲れも良く解ります。

水煙抄鑑賞

—1月号から

斉尾 くにこ

ひらひらと糸の長さの妻の舞

東 横 ますみ

自由に人生を楽しんでいるかのように見えても、糸が付いているのですね。

でも、糸は舞えるほどに長く、縛ってはいないようで、いい距離があるみたい。

門柱は二本たがい目を選らず

平 井 美智子

緊張感伝わってきます。確かに門柱は向き合ったままどれ程の時間を過ごすのでしょうか。門柱を擬人化して、まさに川柳家の眼ですね。気がかされます。

耳だけは眠っていない向かい席

鴨 田 昭 紀

ドキッとする怖い場面ですが、有りがちな場面でしょう。興味深い話に耳だけ起きてしまうこともあり、立場逆転の時もあります。警告の一句ででしょうか。

浮かんでは排除されてる鍋のアク

中 川 ひろ介

灰汁は不要で好ましくない物として捨てられますが、捨て過ぎると、コクも、味わいも無くなります。人間も少しの「悪」があつて魅力が増すと思います。

背広着てネクタイしめて悪さする

三 谷 直 男

「背広着てネクタイしめて」お仕事をするのではなく、「悪さする」のです。微笑んでしまいました。なんてチャーミング。どんな悪さをされるのでしょうか。

ひとり居て真昼の闇にふと感う

大 前 安 子

午後の空白の時間、ガラス戸には真昼の陽射しが射し込んでいるのに、晴れ晴れとしない心。誰にでも、ふっと訪れる空虚なひとときの描き方に惹かれます。

趣味をただ続けただけで表彰状

長 島 亜希子

趣味といつても「続ける」ことは大変なこと、続けてこられただけでも充分に「表彰状」だと思います。気力を保ち体力を付け深刺と言葉を紡いで下さい。

職安で出会い立呑屋で出会い

高 杉 力

ペーソスとユーモアのない交ぜにして社会で戦った男性の哀愁が漂います。「立呑屋」さんで再び出会われたお二人は、苦笑いでしょか。無視でしよか。

輝いた老人でいるむつかしさ

細 川 花 門

年齢を重ねれば、輝きを失うのは自然ですが、「輝いた老人」でいたいと願います。カラーゲンやエステもありますが、夢中になれることを持ち続けたいですね。

揺れながら書きを書いているのです

上 田 ひとみ

書いているものが何かは書かれていない、想像に任せられています。だから未来図と採りたい。確かなものは無く、揺れながら何処までも書きを書いている。

汗で汚れた今日の私にマルをやる

田 中 紀美恵

頑張ったこと、そっと涙したこと、耐えたこと、知っているのは自分だけ。そんな自分にご褒美ではなく「マルをやる」。大きな大きな花マルあげて下さい。



発表誌を楽しむ (3)

課題吟は、提出されている課題に向かって作句すればいいのですから、雑詠(自由吟)よりも焦点が絞りがやすく取り組み易いと思われまます。そのような理由からでしょうか、どこかの大会でもほとんどが課題吟のようです。

一方、「春の川柳塔まつり誌上大会」では課題吟が二つと雑詠が一つになっています。では、課題のない雑詠ではどのように取り組めばよいのでしょうか、前回の選者二人からダブル入選した句(下段)を見ながら考えてみましょう。

A Ⅱ 感じたことをそのまま素直に表明している

真実味があり「ほんとうだ」と共感させられる

B Ⅱ 複雑な想いを比喩等に託して表明している

巧みな表現に「なるほどね」と納得させられる

それぞれを再読しますと右の二つに分けられそうです。

「旨いもん」「毛筆のかすれ」「終活に」「砂時計」などはAと思われまます。そして、「さくら→明かり」「会いたくない↓帽子」「天日干し→リニューアル」「瘤↓隠し場所」「夫婦↓楕円」などはBではないでしょうか。

このように理屈っぽく分類すると、それぞれの味(川柳味)が吹っ飛んで興奮めになるおそれがあります。が、敢えてこのようにしたのは、雑詠に対して、「何を?どのようにな?」と逡巡した場合の指針の一つとするためです。「感じたことは素直に」「複雑な想いは比喩に託して」。この二つを頭の隅に置いておけば行き詰まったときのヒントになるでしょう。

「雑詠」大西泰世選・小島蘭幸選・ダブル入選句。

さくらさくら明かりがほつと点きました 木本 朱夏

深々と今朝は会いたくない帽子 川本 晔

天日干ししてわたくしのリニューアル 古今蕉童子

老梅の瘤は秘密の隠し場所 八木 千代

旨いもん最後はやはり水だるう 岩佐タン吉

ひとつずつ捨てる悟られないように 安土 理恵

日向ほこ夫婦楕円になって来た 倉益 一瑤

雪国じゃないと遭えない雪女 高瀬 霜石

片方の翼が翔びたがっている 田中 章子

聖戦が焦げついているフライパン 赤松ますみ

絵手紙のバン焼き立ての色で着く 増田マスエ

毛筆のかすれに他意はありません 嶋澤喜八郎

終活に桜の苗木植えました 梅澤 盛夫

笑えない一にちきつと学びの日 杉山 太郎

明日は晴れ二十三時の常備薬 郷田 みや

鳩尾に熟成できぬ僕が居る 三浦 蒼鬼

ふたり旅叶えた妻がよく笑う 山本 美枝

反乱というけどそれは飢だよ 岡本 聡

旧姓で呼ばれ半世紀を跳んだ 早川 玲坊

人間の匂いの中でさくら咲く 長谷川博子

砂時計目をそらしてはいけません 中村 伸子

素描画の中に潜んでいる本音 小林 映汎

さて、第四回誌上大会の締め切りは二月二十日です。すでに投句された方もおられるでしょう。まだの方は発表誌(五月号)を楽しむためにも、是非チャレンジしてください。

『麻生路郎読本』余滴 (33)

「矢車」と路郎作品 ⑮

葉 原 道 夫

「矢車」が、明治44年11月号(三二一)号をもって突然廃刊したのはどうしてか。

前回の「余滴」で、廃刊を知った浅井五葉が、「覺悟はしてゐたが、廃刊の通知に接した時は暫時呆然とした」、また、川上三太郎が、「矢車の廢刊に就ては何も言ふまい。只ひそかに來るべき運命だと思つて居た事が愈到來した丈けの話だ」と述べた文章を紹介した。これを見ると、荷十と親しい人は、「矢車」が廢刊せざるをえない狀況に追い込まれていたのを感じていたことがうかがえる。

結論を先に言えば、「矢車」が廢刊したもつとも大きな理由は經濟的事情にあるのではないかと、筆者は推測する。

「矢車」創刊号(明治42年4月)20頁に、「矢車」同人として、市井凌花、緒形松壽

園、中島紫痴郎、齋藤桃仙坊(後の聴鼓)、森井六疊坊(後の荷十)、鈴木白馬、の六名の名が見える。奥付によると、森井六疊坊は編集兼発行者。発行所は、東京市芝区三田坊運町八番地白馬宅となつてゐる。「湯の村」一三三号(昭和8年7月)の「湯」で、久しぶりに「矢車」を手にした中島紫痴郎が次のように述べてゐる。

「私が愛染明王又は弓之介の別號で金剛箭や柳壇月評に思ひ切つた評を書き立てゐるのに驚いたと同時に之が反動として經營者たる荷十、白馬兩兄に御迷惑を及ぼした事に思ひ付たからであつた。」

中島紫痴郎が、森井荷十と鈴木白馬は經營者であると言つてゐることが注目される。「經營者たる荷十、白馬兩兄に御迷惑を及ぼした」とは、創刊号から原稿を寄せていた久良岐が「矢車」から手を引いたことを指すのだろうか。あるいは、購読者が減るようなことでもあつたのだろうか。

当時の白馬と荷十について、「湯の村」五八号(昭和12年4月)の「三田聖坂」で、川上三太郎は次のように述べてゐる。

(前略) 思ひ出されるのは三田のひぢり坂の鈴木白馬君の家だ。大きな酒造家で、

店でどぶろくを賣つて居た。或る時句會があつたのである。飯時にどぶろくが出て來た。(中略) 森井君の坂本の家も懐しい。何だかランプを賣つてゐたやうな記憶があるが、それより何より森井君の二階に三省堂の百科辭典が異彩を放つてゐた事が、はつきり眼底にある。」

酒造家であつた白馬は、經濟的な支援もしてゐたのではないか。発行所が白馬宅になつてゐること、また、句會や編集會議(余滴)(31参照)が白馬宅で行われていたことからも、そう思うのである。

ところが、その白馬が病氣のため退社することになつてしまつた。

「矢車」二二一号(明治43年12月)の「編輯より」に、(▲鈴木白馬君は鼻疾再發の爲め暫く靜養致され候間發行所を荷十宅に變更致候)とあり、発行所が荷十宅に移転する。二二二号(明治44年1月)からは、創刊号からの同人六名のうち、市井凌花・鈴木白馬の二人が社友となり、同人は四名となつてしまつた。二三三号(明治44年2月)「編輯より」に、(曩に我社の白馬君の退壇と今亦半魔氏(筆者註)川柳社同人・岩崎半魔)の柳界絶縁は惜むべしである。(中略)

▲白馬君の退社に就て何も書かなかつたから本號に書くつもりであつた處寫眞版が間に合め爲め次號に譲つた」とあり、二二号を出すときには、白馬が退社していたことが知れる。

「湯の村」七〇号（昭和13年4月）の「矢車即荷十」で、路郎はこう述べている。

（前略）廢刊に近い頃には、東京で出てゐる大阪の雑誌と云ふ觀があつた。

故藤村青明、故淺井五葉、木村半文錢、岸本水府、馬場綠天、地神佐竹等とそれに分がゐた。（中略）東京では川上三太郎君が天津へ行くし、編輯發行人の森井荷十君の孤軍奮闘だつた。荷十君は涙ぐましいほど、よく闘つてくれたものだ。荷十君が結婚生活に入ると共に矢車はたしか三十一號で仆れたやうに覺えてゐる。

路郎は、（結婚生活に入ると共に）仆れたやうに覺えてゐる」と述べているが、荷十は「新川柳」（明治45年7月）に、「夫となりて」という句を発表している。

（五十五の母を慰むいやはてに、こゝろうらがり、妻を迎えぬ。／いちど見し、女をめとるならばしの、國に生れし男かなしや。

なすま、になるわが妻のあきたらず

まだ妻をもたぬ誇をなつかしむ
獨り者となれぬ悲しさ夜を歩む

矢車が廢刊したのは明治44年11月。結婚後、半年以上も経つて「夫となりて」の句を発表したとは考えにくいので、「結婚生活に入ると共に」というのは路郎の記憶違いだと思ふのだが、「矢車」を廢刊する頃には結婚話が出ていたとも考えられる。

白馬退社後、荷十は路郎の言うやうに、まさに孤軍奮闘した。

「矢車」は毎月二十日發行だが、二二六号（明治44年5月）は遅延した。「荷十しるす」に、「私は月初めから業務の爲め毎朝六時に出て夜の九時すぎから十二時の間に歸宅するやうな忙しさであつた、それがため三度訪ねられた川上君に一度門口で二十分ほど話して別れた、毎日来る淺井君からのハガキに對して一度も返事を出さなかつた、發行日を控へて手をつけることが出来なかつた、諸君から催促や照會が澤山に來たが返事を出さぬが多い、こんな有様で編輯が今日迄遅れて了つた。悪しからず御諒承を願ひたい。（五月二十八日）」とあり、二七号の「編輯室より」にも、（私は不相變化しい、又今月が延引して申譯がない）とあ

り、二箇月続けて發刊が遅れた。

そして、とうとう二二八号は休刊してしまつたのである。「編輯より」に、（▲七月號は遂に休刊となりました。▲私は七月十日頃から病氣で十三日から四五日病床にあつた、その後ブラ／＼してゐたが又二十七日から病床の人となつて漸く此頃快方に向つて來た。▲そんな譯で七月號は休刊して八月二十日號を繰上げて發行することになつた。不惡御承知を乞ふ）とある。

白馬退社後、荷十は日常の仕事に追われ、病氣で倒れたりしながらも、「矢車」を三一号まで發行し続けた。三一号には「投稿規定」を載せており、三一号發行時には廢刊はまだ決まっていなかつた。それが急に廢刊に至つたのは、結婚問題が絡んでいたのでないだろうか。「新川柳」の「夫となりて」を見ると、もともと荷十は結婚の意志がなかつた（當時二八歳）。ところが、五五歳の母の望みをかなえるために結婚したことがうかがえる。時間的・経済的に苦しみながらも、荷十は「矢車」を發行し続けたが、そこに結婚話が出て、生活のことを考えた末、やむを得ず廢刊を決意したのでと想像するのである。（次回に続く）

こんにちは 新同人です

三田市 足立 つな子

平成二十三年春、公民館祭りを覗いた際に「フラワー教室がオープンします」とチラシを頂きました。

膝を痛める趣味の会を退部してしまいましたので、時間に余裕ができるなあ、と感じておりました時期です。

前向きな性格と、会場が歩いて五、六分の市民センターが気に入りました、直に次の月から参加致しました。友達に誘われたのでもなく、お恥ずかしいことですが予備知識もなく、北野哲男先生との出逢いで御座います。

皆メダカ皆んな先生皆生徒

北野 哲男

皆さん笑顔で和やかな教室、アツという間に二時間が過ぎたのです。何も分っていない私、月に二十句三十句と作句出来るのかと不安になり、川柳さんだへ投句から始めたのです。「出ていらっしやいよ」大先輩のお誘いに二十五年六月川柳さんだ初参加、これより先二十四年十一月より川柳塔誌友に入会させて頂いております。

このたび北野哲男先生より同人のお話がありました。「まだまだ早すぎます」と私。押し問答いたしましたも入院日も決まっており、薦めて下さる時にお受けしたような事でも御座います。

歳を重ねてからの入会、焦らず楽しめればいい。この一途なのです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

奈良県 安福和夫

私の川柳との出会いは平成二十四年春、田原本川柳会でした。町の文化教室のつもりで入りました。「ギクシヤク」の題で、思いつくまま「ラララもギクシヤクもあり夫婦なり」という妙な句を作った以外にも入選。その時の選者が今もお世話になった渡辺富子さんでした。当時東北震災の瓦礫処理のキクシヤクを詠んだ句が多かったので目立ったからでしょう。その後、川柳塔ならに入会し、多くの先輩方の作品に接する度に、川柳の面白さと奥の深さを知りました。新聞投句でも時々入選するようになり、二十五年朝日新聞大和柳壇の月間奨励賞（田中新一選）に拙句が選ばれ、益々川柳に嵌りました。

縁が縁起の重み語る屋根

二十六年二月大内会長の紹介で川柳塔本社の誌友になり、句会に初参加、席題でいきなり次句が地の句に入り驚喜。メールでは君の香りが届かない

大阪の翠洋会にも入会させて頂いて、西出楓楽先生をはじめ大先輩方に混じって今も勉強をさせて頂いています。新米の私を温かくご指導下さり皆様に感謝しています。同人へのご推薦有難うございました。

好きな句

宇宙無限ゆつくり歩くのいいね

生きるとは悲喜こもごもの万華鏡

蘭 幸
楓 楽

今後更に研鑽を重ねる所存です。何卒よろしくご指導お願いいたします。

こんにちは 新同人です

和歌山市 磯部 義雄

平成九年の春に長年勤めた会社を定年退職。何んとなく過ごしつつある日、地方紙に掲載されていた川柳欄に目が止まりました。若い頃から短歌や詩を趣味としていましたので同じジャンルとして興味を持ち、さっそく入会の申し込みをしました。それは和歌山三幸川柳会の前身の「三幸川柳教室」でした。時に平成十一年五月。柳誌「七面」六月号に私の初めての句が佳作として載りました。

亡き親に歩く姿が瓜ふたつ

義雄

以来十六年間、何度か壁にぶつかりながらも諸先輩や柳友に支えられながら頑張ってくる事が出来ました。

昨年九月二十七日に開会された「和歌山県川柳大会」では初めて選者の大役の指名を受けとても感激をし、川柳を始めて良かったと至福にひたりました。

平成二十三年に、「和歌山三幸川柳会」の当時の理事長であった木本朱夏先生の推薦により誌友となり、今回、朱夏、大輪、保州の各先生の推薦により同人になりました。ことに感謝し、一層作句に励む所存ですので皆様宜しくお願ひいたします。私の好きな一句

手と足をもいだ丸太にしてかえし

鶴 彬

神戸市 上田 和宏

昭和十三年生まれ、昨年喜寿でした。川柳は三年半位前に六甲川柳会メダカの学校に入れて頂いて始めました。この地六甲が地元なので六甲道勤労市民センターはよく出入りしています。ここでメダカの学校「川柳しませんか」のチラシを見て、早速、山口光久先生に電話をしまして「投句でもよいから」と手を差し伸べて頂いたのが、七十の手習い川柳への出発点となりました。黒田能子先生から強く勧められて今年一月、誌友になりました。そして図らずも半年後に山崎武彦先生からもご推薦を頂いて同人の列に加えて頂くことになりました。まだまだメダカのヒヨコのレベルですので、半分以上、面映ゆい気持ちです。

川柳塔まつりでは三年連続の全没でしたが、四度目こそはとめげずに頑張ります。新家完司先生の「川柳の理論と実践」を読み続けています。只今二回目。自分に素直に、素朴に、足を地に着けてそろりそろり深い所に向かいたい、自分を裸にするのは勇気も要りますが、修行を積みつつ川柳の道を進みたいと思います。

六十の手習いでは社交ダンスを始めまして今も続けています。これも基礎が大事と日々感じて修行中です。

今後は叱咤鞭撻ご交誼のほど宜しくお願ひ申し上げます。

こんにちは 新同人です

河内長野市 大島 ともこ

「川柳って面白いわよ。」何事にも前向きな友人の一言が心に残っていたのでしょうか？ ふっと川柳の教室を覗いてみようと思ったのが五年前のことです。

公民館の川柳教室「長柳会」を見学致しました。和氣あいあいの雰囲気、笑顔と元氣、そのすべてが体調を崩していた私には眩しいものでした。即入会しましたが、川柳について全く無知の私に、一から教えて下さった会の皆様には感謝しかありません。先輩方は本当に魅力に富み、そのみずみずしい感性を何とかして身につけたいと思っていますが、未だ思うようには作句できず、さらに川柳の深さを知るにつれ、後退りしてしまうことも多いです。

太極拳も続けておりますが「力を抜く」という教えがあり、川柳にもどこか通じるところがあるような気がします。肩肘張らず、素直な句が詠めるようになりたいです。

本当に私のような未熟者が同人のお仲間入りさせて頂きますのは恐縮ですが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

神戸市 奥澤 洋次郎

市民センターに置かれていた「川柳始めませんか」川柳六甲会「めだかの学校」のパンフレットを目にし、川柳には、たまに新聞で見ると見るとの知識しかありませんでしたが、見学でよいとお聞きし、その積りで参加させていたいた処、何でもよいから五・七・五にして出さないと言われ、要領を隣席の先輩の方に教わり乍ら、プロ野球のボールが飛ぶ、飛ばないで話題になっていましたので「飛ばぬ玉とんだ結果のプロ野球」の一句を投句しました。その句に対し後日、言葉遊びになっています。冗句は川柳の品格を左右します。ユーモアと冗句が違います。とのご指導と添削を頂きました。

その日の講師の方のお話は鶴彬についてのもので、命がけで川柳をされていたことに感銘を受け、句会後の食事会にも参加させて頂き、続けようとして帰ったのが、川柳に縁をもった初日でした。それから四年、今、同人としてまでに育てて頂いた先生方や先輩、仲間のお陰をつくづく思っています。天邪鬼な私には三才に入るような句の詠めないことは得心のあるものになっていますが、納得のいく句が詠めるようになっていきたいと思います。

どうぞ仲間としてよろしくお願い致します。

こんにちは 新同人です

東京都 川 本 真理子

鳥取市 谷 口 回春子

二、三年前、叔母の奥田みつ子がちよつと入院をした折に、お見舞いのつもりで川柳らしきものをいくつかひねったのが私の川柳事始めです。机に向かうのは家計簿をつける時ぐらいだった私には、これがとても新鮮な体験でした。そして今、紙とえんぴつを前にうーんとうなっている時間は、自分でも驚くほど楽しく充実したひと時になってきております。

まだまだ、心の隅にひつかかっている事柄を十七音字に整理整頓しているだけの句作りですが、いつの日か、読んで下さった方々により多く共感していただけるような句を作れるようになりたいと思っております。

ひとすじの径 転んでも遠くても 奥田みつ子

叔母のこの句を目標に、細々とでも、たゆまず川柳と触れ合う努力をしていく所存です。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

「川柳を始めてみんだか？ 鉛筆一本あればだれでも作れるで。ボケ防止にもなるし…」

という川柳ふうもん吟社両川洋々会長の甘い誘いに乗って川柳を始めて四年目。

定例会の席、川柳塔同人として推薦したいという誘いをいただいで二年目の今年、他の仲間と共に同人の仲間入りとなった。

先輩に励まされながら作句しているものの全没は当たり前。覚悟はしているものの自己の能力の無さを思い知らされていく。時たま抜けて呼名されていることもあるが。五客三才は夢の夢。自分が詠んだ句が活字になったり呼名に應えたりする時の境地は心地よい。この心地よさを味わうために全没にもめげず先輩に支えられながら、毎月の川柳塔誌を楽しみしながら五七五を楽しんでいたと思います。宜しくご指導くださいますようお願いいたします。

好きな句・印象に残っている句

・ 俺に似よ俺に似るなと子を思い

路 郎

・ 桜咲く人が死のうが生きようが

一 瑤

・ 欲望の大河に堰は築けない

回春子

こんにちは 新同人です

大阪市 寺 本 実

貝塚市 石 田 ひろ子

定年退職後、海外旅行・料理教室・大学の聴講と併せ、前々より関心があった川柳を学ぼうと、NHK梅田教室に加えていただきました。河内天笑先生の熱心な指導を受けて、先輩（後から思うとなんとという錚々たるメンバーだったのか）に混じって四苦八苦しながら作句していきました。

教室の後、喫茶店での先輩方との反省会では、親切なアドバイスを受け、なんとか形がつくようになってきました。まだ本社句会の水準には達せず、時々参加させていただけ程度ですが、南大阪・城北の両句会にはできるだけ参加させていただいています。南大阪では選者見習いもさせていいただき、選ぶ立場からみた句も学ばせてもらっています。まだまだ意味を深くはとれず、字面を追うのが精一杯の所です。これからも諸先輩方からの御指導をよろしくお願いいたします。好きな句としては、読後にニヤリとさせられる句、なにか考えさせられる句があります。

好きな句より二つ

よい旅でございましたが二キロふえ

天 笑

口に出す苦しさならば耐えられる

たもつ

二人の息子も結婚して、やっと自分の時間を持てる身分になりました。以前からNHKのラジオで、橘高薫風先生の川柳講座を拝聴していましたが、わたしにも出来そうな気がして近くの公民館に参りました。

生まれて始めて川柳という世界に入り戸惑う事ばかりですが、沢山の先輩に恵まれて川柳の面白さが分ると、だんだん川柳の奥の深さ難しさが分ってきました。

諦めかけた時に三宅保州先生にお会いして川柳を続ける決心を致しました。稚拙な質問にも親切丁寧に教えて頂き、挫折を繰り返しながら今日まで来ました。今では家族の応援も得て、川柳がわたしの杖となって生活を支えてくれています。

大野風柳先生の著書「川柳六大家を語る」の中で岸本水府師のことは「誰にでも解って誰にでも作れない句を作れ」「詩とは自分を語るのではなく自分に語るものが詩だ」を讀んで、わたしの脳から背筋に火柱が走ったように感じました。

まだまだ富士山の裾野をうろろろしているようなわたしですが、生涯勉強させて頂きます。今後共よろしく御指導をお願い致します。

こんにちは 新同人です

河内長野市 藤 塚 克 三

大阪市 藤 原 千恵子

図書館でふと目にして借りた二冊の川柳の本が、川柳を始めの切っ掛けになりました。サラリーマン川柳の本は、すぐ理解できましたが、川柳とは何ぞやの解説本は川柳の奥深さと難しさに川柳に対する先入観が変りました。

其の後、川柳関連の本を読むにつれ作句を決意、朝日新聞のなにわ柳壇に気楽な気持ちで投句、二カ月後の土曜日の朝刊に自分の句が最後から二番前に掲載され舞い上がりました。一年後、坂上淳司先生のプラザ川柳に入り、河内長野の長柳会との合同句会を体験、川柳塔を購読、本社句会にも参加。川柳が大切な趣味の一つになると同時にすぐに川柳の壁に打ち当たりました。最初の頃の自分なりに納得する句が出来ず、句が説明的で少し理屈っぽくなりました。川柳に費やす時間も仲間の人に比べると短く同人になった今悩んでいます。そんな私を救ってくれたのが川柳塔自選集で目にした川上大輪先生の次の一句でした。

未完成だから楽しいことばかり

私の場合キャリア四年半、上手になる筈がない。未完成以前の私の作句能力を逆に武器にして、あるがままに私らしい句に挑戦していきたいと今は考えています。

よろしくお願いいたします。

私が初めて川柳に興味を持ったのは、新聞の川柳欄を毎朝読んでいて、私もやってみたいと思った事がきっかけでした。

今では日常の出来事や気になる事を題材にして私なりに川柳を楽しんでいます。

句会に参加すると、いろいろ新鮮な発見があります。選者が別室にて選句をしている間、お話の当番の方が、自分の身の周りの出来事、或いは趣味のことを話して下さるのですが、私の知らない事が多くありいつも楽しく、興味深く聞いております。

また、句会がスムーズに進行するよう、見えない所での仕事に頑張る方にいつも感謝しています。

最後になりましたが、川柳塔同人のお仲間に加えて頂けたのも、句会での皆様方の御指導、そして同人へ推薦して下さる方が居られたからこそだと、感謝いたしております。これからも今まで通りに川柳を楽しんでいけたら幸いです。
ございます。

有り難うございました。

こんにちは 新同人です

雲南市 松本 昌

鳥取市 山下 凱柳

牛に引かれて善光寺

この言葉は、釈迦に説法で恐縮ですが、要するに、自分の意志とは別に信仰の道に入る事。私がこのたび川柳塔同人となったのは、雲南市の松本はるみさんとの出会いから始まる。

そしてわかあゆ川柳会に入った。それも一年ばかりで代表者の石田清泉氏がお亡くなりになり、私に代表者にとの事である。そもそも私の柳歴は長く半世紀も前に遡る。木次町には、むらくも川柳会があり、藤井明朗氏が中心となって柳誌を発行されていた。諸般の事情で疎遠となり、番傘を中心として作句活動、番傘の同人となったが、当時私共の仕事が多忙を極め、中断して、挫折、地方紙に投稿する程度。番傘の同人も脱会している。

その後十数年して地方紙に私のコーナーを作って頂き、エッセイを連載（月に一回）、一年続けて一年中止、それを繰返す事延べ八年間、充電中に先程のはるみさんから声がかかったのです。そのうち、川柳塔の山岡富美子さんより同人の話があり、私は推薦する人はいないと言ったが、私の方で推薦人を作るからとの事で、朱夏、楓葉、富美子さん三名に推薦して頂いた次第。これからどこまで続けられるのか？なにしろ末期高齢者ですので自信はない。ヨロシク！

退職し、ぶらぶらしていた平成22年5月、高校の同級生である、川柳ふうもん吟社会長の両川洋々氏より、頭を使わないと間違いないボケるぞと脅され、川柳はボケ防止にもってこいだと薦められて、同会に入会したのが川柳との出会いであります。

入会時に彼に言われたことは、上達のコツは「多作多読」であるので、まずは何はなくても毎日10句以上を作れと、ノルマを課せられました。「よし、やったるわい」と、彼の厳命を、一日も欠くことなく頑なに守ってきております。川柳とは言えない駄句ばかりであります。今年10月までに27、774句を書き残してきました。

暇つぶしと、ボケ防止という誠に不純な動機で始めた川柳ありますが、幸か不幸か昨年9月より再び会社勤めをするようになり、句作の時間が取れなくて、ノルマ達成に汲々としている毎日であります。

しかし洋々先生の不肖の弟子として、命ある限り（ボケとの戦いでもあります）続けたい決意しているところでもあります。とても同人と言われるような技量はなく、初心者域を脱しませんが、この道に首を突っ込んだ限りは、ボケ防止の為に、楽しみながら努力精進を致したく思っております。

暇つぶしに始めた趣味で暇はなし

凱柳

反復法など

水野 黒 兔

一年ほど前のエッセイに引き続き薫風先生の句について若干の考察を致します。今回は反復法の句を中心に考察してみます。

反復法とは同じ言葉を文字通り反復して使用することで、たった十七音の川柳においてこの修辭法を使うことは極めて難しい技法とされています。なお反復法という言葉の定義として、類似のことばや表現を繰り返すという方法をも含む場合がありますが、本稿では全く同じことばの繰り返しに限定しておきます。次のような薫風先生の句があります。(以下太字の句は全て薫風先生の句)

立ちたくて立ちたくて蛇木に登り
蛇行して蛇行して川寂しけれ
断崖絶壁 断崖絶壁 冬の恋

でかしゃんしたでかしゃんしたと初対面

これらの句のように上5から中7へと反復している句は他にも次のような例があります。

あと一歩あと一歩よき言葉なり

一枚めぐり一枚めぐり波と恋

ぶち当たれぶち当たれ音小気味良き

暮れるばかり暮れるばかりの木屋町や

以上の8例は当然下5に至る感慨を強調するために反復が効果的に使用されています。なお木屋町は京都市の高瀬川沿いの地域で人気の歓楽街です。

次は上5と下5との反復のケースです。

恐山空焼けるとき恐山

母が来る予感やつぱり母が来る

バーで会うだけの友なりバーで会う

「母が来る」の句や「バーで会う」の句の軽妙さには脱帽です。脱帽はするもののこの技法を自分の句に真似る勇氣はありません。

「恐山」は下北半島の有名な霊場。高野山、比叡山とともに日本三霊場の一つにあげられることもあります。川上三太郎に有名な句があります。

恐山 石石石石 死死死

次は中7から下5にかけての反復の例です。

演出をする齡でない齡でない

笛吹童子 恋ならなくにならなくに

柳 ポブラ 柳 ポブラ 水郷よ

復旧は急 土埃土埃

「土埃」の句は兼原道夫氏編の改訂・増補「橋高薫風川柳句集」全句索引によれば「阪神淡路大震災 四句」の前書があるとのことで、その他の句には次の句が含まれております。

震災の明日は我が身と思うなり

最後にちよつと変わった反復の仕方の句を紹介いたします。

残念 残念 残念 村山さんの眉

這い這いふたり不思議不思議と懺悔懺悔

註 兼原道夫編の

改訂・増補「橋高薫風川柳句集」

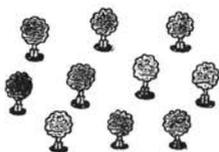
全句索引 は川柳塔社発行。実に

行き届いた解説、脚注などを記載した優れた本で、前回からの薫風作品考察に全面的に活用させていただきましたことを謝して付記致します。



(投句211名)

与えられた図柄をジッと見ていると、私なりに浮かび上がってくるイメージがあります。もちろん、まだ一句にまでならない「カケラ」ではないのですが。そんな中で、皆様の作品を拝見して自分とよく似たイメージに出会うと嬉しくなってきました。そして、思いもつかないような一句に出会う、これはこれで何とも楽しいものですね、では……。



松江市 石橋 芳山

誰なんだ溜息なんか植えたのは

(評)深く埋めたはずの(溜息)が、土の中から出てきてしまう。誰なんだ、と言いながら本当は自分が植えたのかも。

奈良市 大久保真澄
右向け右恐くなるほどお利口だ

(評)どこかのお国のように一糸乱れぬ進は、見事というよりは何となくキモチワルイですよ。

宝塚市 田中 章子

道草を食った昭和のランドセル

(評)昭和の子どもたちは学校帰りに道草して親に叱られたりしたけど、学校では習えない事を結構教わったものです。

松山市 栗田 忠士

ネギ坊主無理をしないでいいんだよ

(評)一斉に背丈を伸ばすようなイメージが(ネギ坊主)にはあります。でも、少々早い遅いはあって当然です。

大阪市 柴本はつは

さあみなさんドレミファソラシミドレミ

(評)これは何の曲でしょう、でも軽やかなのはわかります。さあタクトに合わせよう。

札幌市 三浦 強一

喧騒の都会に消えた国歌

(評)都会という容器は、さまざまなものを含み込みます。国歌もやがて都会コトバに侵略されてゆくのでしょうか。

神戸市 能勢 利子

りんごあめ迷っていたら売り切れた

(評)あの綺麗な紅色のアメで固められた(りんごあめ)。なぜ迷っていたのでしょうか、すぐ買えばよかったのに。

鳥取市 池澤 大鯨

味蕾はつきりまだまだ生きて居られるぞ

(評)舌が捉える味の微妙さがはつきりと分かるなんて、あちこち元気な証拠です。大丈夫、だいじょうぶ。

河内長野市 坂上 淳司

良い漁場造ると漁師森育て

(評)海の豊饒さ、それはまず山や森の豊かさからにほかなりません。こういう漁師さんばかりだと嬉しいですね。

羽曳野市 徳山みつこ

とろんと甘いピリツと辛いどれが好き

(評)どれが好きと問われても、それぞれが美味しそうで選ぶのは難しいと思うのですが……。

加西市 金川 宣子

青い鳥女の森に迷い込む

コンピニがこんなにあつたこの町に

宝塚市 太田としお

クラス会高嶺の花も同じ古稀

だれ一人ノーと言う者いないのか

富田林市 山野 寿之

声届く距離で会話はLINEです

爆買いにどれも満足そうなお顔

鳥取市 春木圭一郎

根を張って大樹を目指すのは誰だ

香芝市 大内 朝子

人の世に散る花咲く花むしる花

唐津市 仁部 四郎

枚方市 海老池 洋
樹木葬にしてくれと書く遺言書

大阪市 笠嶋 惠美
老人がどんどん増えてそのひとり

唐津市 山口 高明
僕だつてワンコ蕎麦なら二十杯

八尾市 前田 紀雄
大仏さん風邪引きそうな螺旋髪です

河内長野市 穂口 正子
どうしても好きになれない人がいる

米子市 八木 千代
今に見ろ杉の子たちのアツピール

三田市 多田 雅尚
出る杭も届かぬ杭も叩かれる

和歌山市 楠見 章子
目鼻立ち様々ここはシヤンゼリゼ

藤井寺市 若松 雅枝
遺産分け思わく隠し待っている

大阪市 内田志津子
ぬるま湯にとっぷり漬る赤いバラ

大阪市 藤田 武人
未来への扉開けるのどのボタン

米子市 生田 和之
難民に化した刺客を許すまじ

尼崎市 清水久美子
よく見れば金の成る木が2本ある

神戸市 奥澤洋次郎
日溜りで春の来るのを待っている

西宮市 亀岡 哲子
老いたるかもぐら叩きに完敗す

藤井寺市 鈴木いさお
わたし達AKBを目指します

佐渡市 高野 不二
廻れ右聞こえないのが一人いる

河内長野市 山岡富美子
哲学の森でも排気ガスは出る

大阪市 立蔵 信子
そうやってチームワークを作るのね

枚方市 丹後屋 肇
分け前は平等ですよ落ち着いて

富田林市 古田 千華
正論はことごとく野に放たれる

大阪市 高杉 力
水やりは顔見ながらと妻の指示

横浜市 川島 良子
老人会ボクの好みがひとりいる

堺市 遠山 唯教
十人の敵を倒して生きのびる

和泉市 横山 捷也
数買えばどれかは当たりそうなくじ

弘前市 福士 慕情
間隔を取って妖怪体操だ

橿原市 居谷真理子
啓蟄のさてこれからの生き残り

堺市 大隅 克博
百人のデモと主催者側の弁

芦屋市 竹山千賀子
五輪まで予行演習テロ防備

八尾市 村上ミツ子
追いかけてここまで来たが見失う

藤井寺市 鴨谷瑠美子
一つだけ買いたい土鈴品定め

富田林市 中井 アキ
甲乙を付けたがるのは女偏

弘前市 高瀬 霜石
東京にひしめいている田舎者

三田市 北野 哲男
栓抜くと萎んでしまう好奇心

東大阪市 佐々木満作
家康も恐れをなした十勇士

松山市 神野きつこ
頼るのは結局自分だと気付く

東京都 川本真理子
ママは言うライバルなのよ友達は

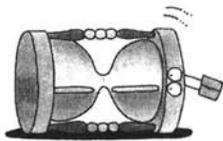
堺市 澤井 敏治
キーパーの僕を忘れちゃ困るなあ

茨木市 藤井 正雄
肩出した大根畑夕焼ける

交野市 田岡 久幸
ばくに似た顔がある筈羅漢さん

大山市 関本かつ子
分校の新任教師お出迎え

4月号発表 (2月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳箒に2句

朝日なにわ柳壇 今年の十秀

— 27年12月20日 朝日新聞発表 — (太字は本社同人)

川柳塔社相談役 西出楓 楽選

じつくりの時代忘れて皆飛脚

秀句

玉瀬 富夫

ランク下げ決めた妻だが日本一

産休明け自分の席のある職場

どうせなら陽気に行こう老いの道

笑わせて笑わぬビエロ楽屋裏

フリーター好きでやつてるわけじゃない

一億と暗い時代が結びつく

秋の夜身近の人に文を書く

米朝の一席渋滞も楽し

びつくりのセンサー萎えて暮れてゆく

番傘川柳本社主幹 田中新一選

最優秀句

笑つてる時じゃないから笑わせる

秀句

老いひとりどう終わるかを考える

幸せになる正直というツール

さまざまな思いが辞儀を深くする

退屈を知らず昭和を生きた母

未知は希望生きてあしたのパンを焼く

背負うものあるから苦言じつと聴く

まぐれだと言われたくない玉の汗

明日の為今日も笑いを忘れない

口数を増やして老いを支え合う

服部 康彦

遠藤 昭彦

みぞ はるこ

柴田 敬子

吉岡 修

山崎 達彦

石田 貴澄

柿花 和夫

奥田 敏雄

大坪 善昭

吉松 隆太郎

栗田 隆昌

吉村 久仁雄

山村 澄子

野口 三重子

茂本 隆子

藤井 正雄

樋野 昭信

錦織 昭久

寒中お見舞い申し上げます

大山滝句座

世話人代表 新家完司

本社 一月句会

◇一月七日(木) 午後一時
アウイーナ大阪

穏やかな日との七日、新年句会は百二十九名(投句八名)の参加で開催。初出席は、山口弘委智さん(枚方市) 富永恭子さん(神戸市) 萩原狸月さん(南あわじ市) 川名洋子さん(八王子市) 菊地良雄さん(横須賀市) 藤原千恵子さん(大阪市)の六名。句会に先立ち、先ごろ亡くなられた同人、山崎君子さん(大阪市)に黙祷を捧げた。続いて初歩教室年間賞の北原昭枝さん、川名洋子さん、萩原狸月さん、月間賞永久保持者の新家完司さんが表彰された。

今月のお話は小島蘭幸主幹。題は「親ごろ子心」四歳で長男を亡くした若本多久志さんの同名の句集(昭和三十四年)の句を紹介。互いに思い合う親子の姿を彷彿とさせる主幹の語り口に、会場は温かい時間を共有することができた。

子煩惱がつたんがつたんしてくらし 路郎
ちちははにめぐりあいたや靴みがく 豆秋

(真澄)

月間賞は石田隆彦さん(橋本市)
(司会―善純・蕉子)(協取―奏子・まつお)
(受付―隆彦・わか)(清記―憲彦)

席題 「鈴」 柿花 和夫 選

吠えない犬でおおきな鈴を付けられる	寿子	サヨナラと御霊がそつと鳴らす鈴	奏子
困り者一体誰が鈴つける	和夫	ウエディングベルを鳴らして娘が巣立つ	いさお
猫に鈴付ける役目を受けて鬱	いさお	思春期が部屋扉に付けた鈴	六 点
こんな鈴トラに付けたの誰ですか	六 点	おぼちゃんの財布の鈴が姦しい	狸 月
鈴つけた猫がネズミを追っている	柳 弘	ジェラシーへ鈴をつけた妻の口	あや子
鈴つける役目もらって不整脈	五 月	我武者羅に走る首には妻の鈴	憲 彦
北の国へ鈴つける人探してる	美津子	ケイタイを鈴やというて持たぬ夫	美津子
一言が仇鈴つける役が来る	ひろ子	行つてきますケイタイという鈴つけて	眞 澄
胸騒ぎこころの鈴が鳴り止まぬ	美智代	呼び鈴が夫婦喧嘩を引き分ける	良 雄
みすゞの詩鈴と小鳥へ優しい目	進	この鈴を鳴らし合おうとプロポーズ	たもつ
逢うてから小さい鈴が鳴りやまぬ	眞理子	櫛の鈴すんだら次はお年玉	修
鈴を鳴らして近づいてくる老後	扶美代	賽銭のわりに大きな鈴の音	良 雄
べちゃんこの財布に鈴がつけてある	蘭 幸	初詣で私でつせと鈴を振る	かずお
それぞれの土鈴が語る旅の空	まつお	鈴に飽き神ものんびり七日粥	黒 兔
速い日の卑弥呼偲んでいる土鈴	哲 子	呼び鈴を押し逃がしたねこわかった	とーな
日本一多い名字で鈴木です	博	亡母さんの根付の鈴は今も鳴る	朝 子
玄関のベルに今年の顔で出る	紀 乃	鈴鳴らしシャンシャン修羅を越えてゆく	富 子
昼の月冬の風鈴僕みたい	すみ子	間がもたぬ鈴のひとつも振っておく	万紗子
ふる里に鈴生りの柿母恋し	紀 華	寂しくて鈴鳴る方へ行きとなる	洋
人生の闇路導く亡母の鈴	洋	鈴さえも供出をした戦時中	保 州
鈴振つてばあちゃん皆を走らせる	見 清	ひとつひとつ里の詛りを持つ土鈴	蘭 幸
子に還る母にここと鳴らす鈴	富 子	鈴生りの夢を削ぎ落とした時間	信 子
鈴の音が届く範囲で飼われている	武 彦	初詣で欲の丈だけ鈴鳴らす	

兼題 「これから」 山田 葉子 選

どの色に咲くのだろうか子の未来
 これからが大事今でしょギアチェンジ
 これからも良く食べ遊びよく笑う
 今を生きるこれから先は考えず
 舞台から降りてこれからアンタシテ
 永遠に平和がつづきますように
 改心の涙がこれからは誓う
 まだまだと往生際の悪い人
 マイナンバーと仲良く生きることにする
 ハンコ押してこれからはもう他人です
 日韓関係めでたく修復出来ますか
 これからは風呂、飯、寝るは禁句です
 丁寧にゆっくり二人共白髪
 ポケ防止料理日記は続けます
 これからは語れぬきみと逢っている
 十二桁拒絶をしても絡みつく
 先行はどうあるうともケセラセラ
 これからは捕まらぬよう気をつける
 やつと喜寿これから恋もフリーパス
 これからはお前しかない影法師
 正座して一生涯は飲みません
 お年賀はこれで仕舞うと状がくる
 白い手帳これから埋めるスケジュール
 二度値切るこれから妻が腕を見せ

褒められてこれから先が正念場
 少しずつ欲を削ってゆくつもり
 これからというときいつも居ぬ夫
 わくわくと未知の八十路を歩まんか
 自分との闘いこれからのゴング
 被災地にまだこれからの見えぬ闇
 心と体どうぞよろしくこれからも
 同性婚増えて少子化高進む
 Uターンしたこれからが正念場
 共白髪を誓い交換する指輪
 三回忌済ませまる持ち時間
 子の誕生これから重いババの肩
 これからの私を指図するクスリ

あと一周の鐘鳴る如き林住期
 物忘れうまく付き合う他はない
 温暖化日本の四季が消えていく
 今しようとしてたのに言うんだもん
 これからもよろしくと言うバラサイト

美人には甘い顔する鬼コーチ
 キリギリス蟻に泣きつく冬の底
 その願い甘いと社殿からの声
 甘くない相手だスキを突いてくる
 順風を自力と過信してしまふ
 人間の育児甘いと言うお猿
 嫁さん甘すぎるところを突つ突かれ
 容赦なく甘いところを突つ突かれ
 読み足りず擬餌にかかって悔やむ鮎
 蟻の列甘い話を聞きつける
 甘い国大蛇が呑み込み狙つてる
 甘い声鼓膜にまとわりついてくる
 甘い汁吸って変わった目鼻立ち
 叱らない親の甘さに子が迷う
 あほやなあなああの辺りがほの甘い
 飴と鞭やっぱり飴の多い母
 子に甘い母親だった好きだった
 貧乏に育つたせいにか子に甘い
 宝くじ担保にホーム入りしよう
 ほどほどに甘さ残したい夫婦
 大甘にみれば良妻賢母です
 おばちゃんのアメちゃんどうぞから会話
 大阪のお姿ちゃん飴で鯛を釣る
 貸してくれ孫は貰うたと思つてる

兼題 「甘い」 坂 裕之 選

千恵子 妙子 良雄 洋次郎 直樹 定昭 満作 洋子 あきこ 志津子 寿之 武彦 あや子 玄也 蘭幸 大輪 朝子 勝弘 千代 好子 英旺 忠子 千代 好子 寂子 英旺 忠子 千代 好子 光久 完司 玄也 美智子 惠 誠一 哲子 淳司 浦久美子 茂 すみ子 隆彦 朱夏 保州 堅坊 まつお 恭子 桃花 六點 理惠 楓 楽 雅明 キヨミ 見清 修 洋 隆彦 桃花 ふりこ 恭子 和子 靖鬼 光久 五月 真理子 裕久美子 かつお 正雄 眞澄 良子 直樹 和夫 紀雄 一步

欲しいものみなじいちゃんに言いなさい
身内には甘い処罰で済ます官

甘い言葉はほっこり耳に心地いい

信じきった自分の甘さたら踏む
それなりの覚悟のはずが保証印

女狐にしてやられたり甘い脇
受話器から蜜の滴る異がある

気配りと勧め上手が甘い異
口車にまた乗せられる甘い俺

甘いマスクに惚れた私がバカだった
CMの甘さに毒が混せてある

なにかもねじがゆるんできたわたし
住

古手紙妻は甘さを突いてくる
年金を信じて遊ぶキリギリス

好きさだけ持って帰れと里がえり
甘い一手将棋盤からどやされる

甘い水飲むから心渴きたす
人

創業の苦労は知らぬ御曹司
地

甘い球際の国は見逃さぬ
天

人間の甘えを責める温暖化
軸

また負けた鼻にかかった甘い声

耕治

玄也

弘委智

千恵子

桃花

誠一

理恵

五月

兼題「踊る」池 森子 選

猿回し猿に踊らす三番鬼

シャンパンの泡が踊って春を待つ

大阪の星空ビルが踊り出す

ボクの字は踊っていると誉められる

指先が踊る点字のラブレター

軽やかにジルバを踊る喜寿と古稀

成人式声も踊って咲く笑顔

通り雨ライオンダンスの揃う脚

親方は踊りはしない猿回し

10億が当たりや逆立ちして踊る

掌に夫踊らす技磨く

欲ふかく甘い言葉に踊らされ

こつそりと聞いた話が踊り出す

踊るまで笛や太鼓で囁す恋

踊らねばならぬこの世という舞台

この陽気七草までも踊り出す

さみしい足だワルツしか踊れない

札束をみると雀踊りする私

隠してもところが踊る古希の恋

阿呆かいな見る位なら踊つたる

美しく舞って血染めのトウシューズ

あと少し踊ろうくたびれた影よ

気がつけば踊らされてた騙された

生きている限りは妻と踊り抜く

克己

黒兎

勝弘

六和

自問自答を踊る一夜が明けやすい
手の中で踊っているのが夫です

虚と実の間で踊る赤い靴

鉛筆はすごい言葉を踊らせる

木洩れ日と踊る樹海のシンフォニー

地球儀を回せば銃が躍り出る

枯れ葉達風のかたちを舞い踊る

成人式華麗に晴れ着舞っている

今はただ踊りつかれて壁の花

忘却は忘れることよ踊ろうよ

かっぱれを踊りながらの下り坂

身の丈を心置きなく舞い終える

住

芒が原で妻よ踊ろうではないか

泣いて笑って踊りつづけてくれた君

頂いた命精一杯踊る

ペン先で踊る私のありつたけ

息絶えるまで十七音で踊る

人

妻の手の中で踊っていたのです

舌先きで踊らそなんて虫がいい

私がわたしを踊る靴は赤

軸

踊らねば笛や太鼓が寂しかり

軸

軸

真澄

富子

直樹

日の出

朝子

兼題「ダツシユ」 村上 直樹 選

駆け込んだトイレで友と鉢合わせ
父ちゃんにダツシユをつける朝のチュ
どどつと来てどどつと帰る三が日
ダツシユする一番福へ白い息
ダツシユよく箱根制したチーム力
初詣で猛虎ダツシユを祈願する
猛烈な突進躲しワントライ
福袋にダツシユは昔 今予約
襲名へ新春歌舞伎ダツシユする
ダツシユボードに入れている秘密うふふふ
ダツシユして追い越そうかな脚線美
おばちゃんのおいと座席へダツシユする
一月にダツシユ二月にもうへたる
三浪のもう後がない猛ダツシユ
走者替え再びダツシユ都構想
梅桃桜競つて春へ猛ダツシユ
猛ダツシユ願う復興への期待
びつくりボンしたらダツシユも出来た足
終活へダツシユうどんが伸びぬ間に
記念日を忘れ花屋へ猛ダツシユ
避難所へ先ずはダツシユのにぎり飯
若者のダツシユが欲しい日本丸
ダツシユする春待ち侘びる冬木立
Bダツシユぐらいの位置が心地よい
七十年不戦へダツシユした誇り
あの頃は母ちゃんいつも猛ダツシユ

杖の身のダツシユ遅延とし置いてかれ
余命とや冬の夕日へ向けダツシユ
ダツシユスラツシユ コロン私も暗号に
ダツシユユ力温存二番目を走る
人生は一度ダツシユに迷わない
まだダツシユする気で飲んでいるサブリ
問題はダツシユの次のお金です
錠剤と懐炉持みにしてダツシユ
意気込んだ日もありましたわたしにも
訳ありのダツシユを付けたまま傘寿
ポツクリ寺へ駆け込む元氣取つておく
佳
昭和史に似てきた戦へのダツシユ
産声から極楽までの猛ダツシユ
明日のため老いに鞭打ちダツシユする
回春のもしやと願い日日ダツシユ
百歳へ向けてダツシユをする傘寿
人
愛のまま女のままで駆けてゆく
地
力走は苦手人生亀で生き
天
ダツシユダツシユ生きている限りダツシユする
軸
氣力なお青春恋へ猛ダツシユ
兼題「本音」 新家 完司 選

胸襟を開く手品に酒が要る
お母さんと叫び兵士は逝きました
政治家は本音を吐かずにはメモを読む
本音吐くたびに青いと論される
本音だけ詰めてありますゴミ袋
十年日記のどこにも書いてない本音
死にたい死にたくないどちらも本音
遠慮なく本音を言えば金がいい
形容詞を削ると見えてくる本音
隠しても目玉おやじが本音突く
本音しか通用しない防護服
負け惜しみそれも私の本音です
うだうだと文句言うなら君がやれ
こめかみの辺りに浮いて出る本音
冬木立すっぱんぼんで風に立つ
エンディングノートに書いておく本音
本音など言うたら家におられへん
かすみ草の本音はバラが大きらい
なんちゃつてなどと本音を引つ込める
百舌ほどに本音を吐いてみたくなる
苦しいと本音を吐いて助けられ
介護から解放された野辺送り
本音言えば休肝日など無くしたい
寒中水泳炬燵で見てはバカやるわ
寂しくない自由でいたいと言うておく
振り上げた拳固とたたかためてくれ
尻尾振りながらそっぽを向いている
クラス会逢いたい人はただ一人

美智子 恵 蕉子 正雄 富美子 まつお 修 富美子 扶美代 堅坊 千代 夫 弘美子 正彦 美智代 奏子 寿子 美智子 武彦 瑠美子 幸 希久子 朝子 黒兎 信子 宏造 菜月 まつお まつお 富子 いさお 義 朱夏 良雄 洋 加お里 すすみ子 克己 葉子 六点 保州 宏造

ふくるとじ見たいけれどもよう買わぬ
ライバルの失敗拍手する本音
整列は嫌マエニナラエが大嫌い
水爆より米を寄せが民の声
妻よりは大事なものはお金です
お祝いは品物よりも現金で
初詣で愛よりお金祈願する
泣き声も笑顔も本音です赤子
赤ちゃんの本音聞き分けているママ

佳

コンビニのおでんの方がとは言えず
もったいない思いながらも水を買う
水洗の音で掻き消す「バカヤロー」
川柳って思ったよりも金掛かる
素っぴんは私の勝ちと思ってる

人

帰るなと言いついそうになる終電車
地

割烹着似合うおんなでいたかった
天

天

口先に嘘ありペンに本音あり
軸

軸

寒い日は川柳やめて寝ていた

お知らせ

2月本社句会は

2月4日(木)です。

勝弘
舞夢

とーな

淳司

としお

一歩

紀男

五月

すみ子

五月

志津子

真理子

克己

久美子

良雄

章子

石田

隆彦

句会 燦 燦

岩崎 眞里子

十二月句会を読む

水音を詰めになげんというかたち
着飾って今日は無口で通します

あきこ
賀世子

嬉しくても悲しくても零れる涙は海の味。人間は人の形の海
であり、自由で気まま過ぎると見苦しくなったり；着飾り過ぎ
ると窮屈になる。歳を重ねても折り合いをつけるのは難しい。
裸電球向学心に燃えていた

ウクレレで輝く銀河引き寄せる
我を忘れる程懸命な時、自然に輝く明日を引き寄せている。
ウクレレをさり気ない楽器、輝く銀河を明日と捉えたが…。

保子
倅子

行間に私の意地が詰まってる
照明はないが花道らしきもの

良子
瑠美子

はじめから正直に言うことにする
私達は川柳を創ることで救われ、選ばれると嬉しい。でも読
者の入口は発表句の行間にある。作者の詰めた意地は作品の森
で手を繋ぎ響き合っている。それは正直な句の花道とも思う。

月子
美津子

冬の夜に独りふゆの灯にひとり
見送りを辛くするのは、賑やかで楽しく過ごした数日。これ
が最後かも；と見送る老母の瞳に残るテールランプは、独り住
む寒さの中で「ふゆ灯」のように、いつまでも消えない。

とーな
富子

去りざわの秋が振つてかすかな虹を見る
どんな人にも苦境の時期はあり、抜けたと思う心の青空には
虹が見えている。去り際の秋とこの世が、微かな虹と銀の鈴の
音が重なり、どん底を抜け出た青空であって欲しいと折った。

楓
幸

人生を照明係して終える
とほとほと行く照明はいりません
照明係の人生に、とほとほと行く静かな覚悟に、瞠目です。

蘭
幸

とほとほと行く照明はいりません
照明係の人生に、とほとほと行く静かな覚悟に、瞠目です。

楓
幸

お色気

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

ほたる川柳同好会(大阪) (前月号) 水野 黒兎報
姉妹での会話に終り無いようだ
弟よはじめにあえば俺に言え
しきたりの古さそのまま次の世へ
ヨレヨレのコンサイスだが捨てられず
賑やかに時を知らせた古時計
話しそう古い写真の母の顔
旧街道賑わい戻る道の駅
あわてる時ほど落ち着いて話す癖
パソコンに外方向かれて大慌て
せわしいと気づいた時は後がない
三叉路に右か左か迷う喜寿
何着よう異常気象に迷う朝
八尾市民川柳会(大阪) (前月号) 土田 欣之報
自史の見せ場は裸序も跋も
いざの時まで九条は騒がない
一億の一人社会へ恩返し
家計簿がいつもびびり泣いている
大魚から逃れ自衛の雑魚の群れ
桂子 黒兎報
宏造 守啓
久子 純子
長一 柳童
美智代 勝輝
黒兎 春代
欣之報 恵清
朋子 安男
壽峰

坊に入り住職語る墓事情
ふいに見た妻の寝顔にぎよっとする
芒野のうねりに風が吹き溜まる
群れて散り散っては群れる交差点
腰折れならぬと羽織る赤ピンク
元総理風来坊が多過ぎる
朝寝坊ばかりが続く夜の果て
役職を降りてわかって来た他人の目
隠れん坊愛が出て来ぬ森の中
お互いの距離心得て群れに添う
ラッシュ時険の君は乗ってるか
ワンチャンス物ともせず鷲掴み
冬最中敵の死角で編むドラマ
群集になれば発芽をする暴拳
川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報
抜き足で老化の波が忍びよる
赤ねた抜き足したがつまずいた
安堵してそと離れるベッドから
気をつけて後ろから来る忍び足
抜き足で僕の魂掴む女
抜き足で近づく揺り籠の天使
抜き足で来るなよ心臓に悪い
空爆をするからテロが忍び寄る
七口一ぱいピンクに染まる妻の肌
四五三かわいい色気修業中
十四で笑窪色気に変わる時
つけまつげアラフォー色気そっと出し
さわやかな色気ジーンズリズムカル
女性には出せぬ色気を出す女形
お色気はあるが品位にやや欠ける
蕉子 常男
かこ 耀一
義子 紀雄
森子 文子
寿之 慶子
静子 高鷲
欣之 仁
安代 美世子
直子 ゆみ子
宏造 満作
五月 舞弘
勝夢 満知子
重信 満寿恵
美籠 桃花
いさお

誰が書く色気ほのかな墨面書く
色気より食い気の娘ほっとする
有りすぎて無くても困る色気です
マスコミよ敗者の背にもペンを持て
ペン持てる十指にいつも感謝する
ポールペン好きに使える程の幸
嫁さん口で負けるがペンで勝つ
泣きそうになると張り切るペンがある
ペンが知る言葉の武器が踊り出す
飽きたらすぐほうどけるように赤い糸
熨斗結び論吉の出番多い秋
さよならで結んで妻はいなくなり
縁結び願ひ叶えて礼参り
ベル押しはまだ迷ってるプロポーズ
ネクタイは男の刀だと思っ
め結びはおばあちゃんの特許権
風呂敷に学んでみたい人の縁
まごころで触れ合い結び合うヒト科
寝る時は認知の老母と結ぶ紐
親どうし代理見合いで縁結び
川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報
寝そべって転ぶ心配無いと言う
寝転べば無限の空にいやされる
華やかな金欄まとう伯爵富士
華やかさないが素朴に生きている
結婚式もう二度とない晴れ舞台
華やかな夕餉だベニスワイ蟹だ
鍵がない片手にあるのそれななに
惚けてきたあれこれが多くなる
この部屋に何しに来たか考える
敏平 公平
としお 一歩
芳香 舞蹴
芳萌 靖子
大輔 昌紀
妙子 シマ子
志津子 日の出
保州 千歩
郁子 朝賢
朝子 福貴子
節子 公恵
節子 重忠
瑞子 芳光
石花菜 貴恵
悦子 久芽代

爺よりも先に惚けるな婆さんよ
毎日が暇でビントが惚けてくる
びつくりボンとまんまるく惚けておく
妻よりも一足先に惚けたいよ
惚けたつて貴方は家の柱です
刃より怖い武器ですベン先の先
キヤベツ切るリウム壊したあの地震
ああ言えばこう言ふ妻に刃がたたぬ
裏山で今日も落人刀磨ぐ
こぼれ刃の傷と痛みは後を引く
腰二本差してふらつくエキストラ
錆びついて刃と戦っているのです
いらいらに包丁研いで月が出る
刃毀れをしたので心休ませる
先ず刃物仕舞つてからの遺産分け
正直に生きて来たのか刃のこぼれ

清 美美子
くにこ
照彦
美知江
幹啓
龍美恵
紀美恵
野蒜
義人
滋
久江
道子
美ツ千
重利
三津子

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

釣り竿の僕に食いつく今の妻
プロポーズ返事なまま子が二人
戦争の歴史うやむやにしてならぬ
拉致の国まだうやむやが続くのか
目も耳も疑うてつと軽い文字
耳学問だけで渡った節がある
忙しい汗だ幸せ色にしてる
忙しい中に幸福感胸に
会社ぐるみうやむやにして蓋をする
筆順はいつもうやむやと凹
喪中三年友の沙汰はうやむやに
回覧板小さな耳も入れてくる
ベツトならきつと持つてる地獄耳

重虎
風来坊
芳生
慕情
隆樹
則彦
花匠
小とみ
美鈴
洋子
井蛙
京子

告げ口は聞こえぬ方の耳で聞く
だまし絵に私の罪を閉じこめる
引力で均衡保つわが家族
林檎落下台風恨む農夫の目
引力が心の棘を抜いてくれ
ききながすことをおぼえたロバの耳
昨日のことうやむやにして生きている
心臓よ今日もごころうさんだねえ
うやむやの会話で返済のぼされる
一進一退引力懸けた老いの意地
Uターンを促す母の強い意志
おもてなし休む暇ない床柱
本番で鬼もミスする事がある
小走りの巫女の袴から春が
グー・チョコキ・パー今年もグーで突っ走る
やさしさが繋いでくれるみちのく誌

黙人
柳子
柳三
一呑
一湖
龍馬
のぶよし
規子
つとむ
呑舟
きよし
ひとし
一花
和香子
霜石
正報
近藤
城北川柳会(大阪)

城北川柳会(大阪) 近藤 正報

禁煙の誓い何回破ったか
街路樹の裸が寒さ連れてくる
土俵下アキレス腱が悲鳴上げ
青空がぶつ切り切った悩み事
好きだけ生きたら切の風になる
プーチンがぶつ切り切の横車
何時届く北朝鮮に父母の声
裸木は春の芽吹きへ凜と立つ
降りますと叫び続けた満員車
多数決母の言葉で覆す
裸木は春の息吹を内に秘め
追及をひらりと躲す二枚舌
マイナンパー何時かこの国覆す

博
堅坊
和
築子
庄一
集二
あさ子
志華子
千恵子
千恵子
杖香
美智子
和夫
縣
笹

高瀬 霜石 選
可愛らしいおばあさんにはなるつもり
入道雲が入道雲を産んでいる
棘のある私愛してくれませんか
被災地に遠い東京での議論
せめて句で悪女になろう恋しよう
賈いでも賈かれた事ありません
夫婦でも誘った方がお支払い
幸せは小さな音でやってくる
あの世までマイナンパーが付いて来る
わたしのステツブでわたしの人生

能子
芳光
美佐枝
みゆき
美恵子
清乃
満知子
美智子
庄二
すみ子

佳句地十選 (1月号から) 久保田 千代 選

主流から外れた椅子がよく軋む
がさがさと少年殻を脱ぎ捨てる
濁点を取れば気楽に生きられる
一億総活躍何をせいと言つのです
心眼を開いて風の日が続く
血洗う音が男を責めている
壁越えて違つたわたしと出逢えた日
少しほめられ夢の続きをふくらます
わたしのステツブでわたしの人生
燃えつきた炎静かな闇となる

無限
和子
一歩
美代子
堂太
慶子
わこ
すみ子
能子

早や師走また反古にした計画書
ぶつとりと師走の諭吉飛ぶ如く
私が裸になれる無二の友

素っ裸にされても持論曲げはせぬ
どこにもいるすべて反対天の邪鬼
結局は生まれたままで逝くのです
かるちやアでアナログ思考覆す
積みかえてもまた覆す特売場

覆水を盆に戻して共白髪

追及をされるとメッキ剥ぐれだす
良い事はいくら変更しても良い
もうなにも引かぬ足さないクリスマス
欲も得も捨て裸一貫やり直す

転覆の船ハンマーで聴く息づかい
大逆転狙い八十路のジャンボクジ
追及が過ぎて冤罪生むなかれ
射幸心煽りすぎますジャンボくじ
コラーンに愛の一字が抜け落ちる
あれやこれ出来ず独りの大晦日

法話聞く鬼が思わず正座する
マイナンパー保険証よりうすつべら
凶と出たこのおみくじは有難い

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

苦も楽もいくつ越えるか今日の晴れ
見晴して日本海こは大山寺
秋晴れの草刈る畠の彼岸花
外は晴れ涙のあとは見せられぬ
晴れるといぬみよちやん下駄を放りあげ
ふるさとへ降りるといつも晴れている
ホームラン真つ赤な帽子うねる波

栄香 京子 規代 敬子 寛子
蘭幸 弘子

満作 満麗 満洲夫

洋志 武彦 たもつ 弘委智

賢修 郁夫 一步 柳弘

野鶴 直樹 朝子 克己

星雨 義昭 勝弘 正

雪を待つ母の手編の冬帽子
手塚治虫の帽子未来が詰まっていた
若者よ被ってならぬ戦闘帽
約束を果たすと軽くなる帽子
一歳の帽子が歩く蝶が舞う
町角に味のある絵が掛けてある
十六年わが家の味に糠床よ
老人の皺の深さの人間味

味のある言葉置いて友帰る
ひかえぬ砂糖は母の味だろ
味のある人と言われてみたい僕
ふたありの味を紡いだ家族の絵
完璧を求める味のない男
川柳で人とはちがう風を知る
大切にしたい絵本の読み聞かせ
毒を吐き合う旧知の友のいる安堵
ふるりは秋に染まってひっそりと
マスカラを塗ると闘う女子になる

虹に綱掛けてぶらんこしてみたい
悔いひとつ太平洋に捨ててみる
無限大の夢詰まってるおもちゃ箱
女関に座礁している孫の靴
ご免ねと露座の大仏一跨ぎ
大仏の鼻の穴まで見極める
大樹の陰いつか自分を見失う
大自然の中で人間小さすぎ
母子手帳ジャンボペビーと記録する
湖が富士を水浴びさせている
地上絵は地球のタトゥーかも知れぬ

和歌山三幸川柳会

武本

幸子 輝恵 慶子 鬼焼 千代美 千徳 汎美 比呂子 栄恵 笑子 宣之 淑子 昭紀 静風 歩美 厚子 初音 史子 碧報

安保法巨大なものがのしかかる
鯉の養殖下流の鮒も太ってる
空っぽになるまで喋る水入らず
こっそりと聞いてこっそり教えてる
凱旋をした古里に橋が無い
傾いた柱の所為の隙間風
ら抜き言葉へ傾いてくる日本語
スーパ皿までついに添い遂げる
傾いたまままでついに添い遂げる
ロン終家も私もがたが来る
ほいほいと出して傾く金庫番
傾きを直せば止まる古時計
物思い前頭葉にある隙間
生きてさえいれればと思うことばかり
思い出はみな美しくなる月日
生きている意味は何かとふと思
まんまるな月に思いの丈を言う
諸行無常思い残して花櫃
笑顔良しとほめられもつと笑顔出る
恩返しきつかけにしてポランテア
ふとした事で心の中に虹が立つ
きつかけを掴めば伸びていく素質
肩の力抜いてきつかけ待っている
先生が好き勉強も好きになり

高知川柳社

小川てるみ報

義泰 弘子 八重子 美枝子 義雄 一雄 明子 和子 智三 みね 昭枝 幸子 当根 次根 倅子 日出男 ひろ子 よしこ 敏照 絹一 准一 美羽 保州 陸宏 てるみ 圭二 千恵子 京子

どうなるかオリンピックへ手間と金 哲 史

南大阪川柳会 津守 柳伸報

五十周年記念乾杯おめでとう
自販機の記念硬貨へ無愛想
記念日の書き込み多いカレンダー
赤飯だ黙って訳を考える
フルムーン無理せず中止バリ旅行
退職の花道妻とツーショット
へその緒という最高の記念品
両陛下の記念植樹も五十年
川雑の息吹き脈々半世紀
ウエストとヒップの区別つきますか
ビチビチがダブダブになり老いを知る
銀杏のリズムが軽いフライパン
みどり児の頬つべに跳ねる明日の夢
ビチビチの顔で十年バスポート
跳ね過ぎたウサギ月から戻らない
お互いの杖ともなつて越えた坂
賑やかに行くこう冥土へ続く坂
長丁場百までの坂一歩ずつ
坂道もどっこい生きるエネルギー
滑らぬよう転ばぬように下りる坂
ひよ鳥が先に毒味のつるし柿
埋め立てで南シナ海波高し
よい話ばかりを聞こう老いの耳
迷い道もみじの紅が目に染まる
母からの形見が似合う秋景色
敏同志昔話に花が咲く
冷蔵庫整理する日のチャンコ鍋
なにわの秋は生駒山から下りてくる

忠子 正彦 柳右子 実昭

満作 五月 宏子 たもつ 武彦 扶美代 茂

歌留多 弘子 柳弘子 能子 美智代 ルイ子 ふりこ

葉子 直子 和雄 一歩 昌紀 郁夫 舞夢 純子

いさお

満点でない人だから情がある
一冊の本といち夜を過ごす秋
テロのない日本でヌーボ飲む平和
核の世に地球の寿命考える
出る杭も足らない杭も困りもの
番号つけて総活躍と言われても
ときめきの冷めないうちに着るピンク

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

辞世句を詠んでカミカゼ明日は発つ
エンディング革靴はいたままでした
太陽は月は一つでいいと言う
憎み抜く愚かさ知った夕焼けよ
人間になじよめず病んでゆく地球
耐えて来た過去にはふれぬ丸い石
土に生き大地に還るエンディング
ひめゆりが拍手を送る翁長知事
坂一つ越えてなじよめぬ言葉尻
終焉を飾る辞世の句が出来る
連れ添った盲導犬が先に逝く
辞世句がなかなか詠めぬ旅立てぬ
書き残すほどの名譽も財もない
憎み抜くなんて出来ないお人よし
憎み抜いた人生終えて仏門へ
辞世句で老後の悩み縁を断つ
川柳になじよむ心があたたかい
朝が来て憎み抜くこともう忘れ
今日逝けばこれが私の辞世句か
天変地異狂わせたのは人間か
憎み抜くそんなパワーはもう出ない
憎み抜く力を愛に変えていく

志華子 ひさ乃 敏博 敏治 憲彦 弥生 洋々 善平 清信 一搖 無限 雅女 秋月 敏夫 妻子 地佳平 とも湖 回春子 三千代 真柳子 凱柳 八走 圭一郎 天翔 清流 節子 美恵子 金祥

空想の中であなたの妻になる
ままならぬ拉致憎み抜く母も老い
夫息子うばった戦憎み抜く
辞世句の百や二百は出来ている
エンディングつけマッゲして化粧して
星影のワルツいつものエンディング
エンディング君が待つて天国よ
人は人を許し切れずに憎み抜く
ひざの上まだあたたかい祖父を抱く
エンディング貴方の言葉忘れない
憎み抜く覚悟ないから許してる
秋雨に濡れて行くよな人生だ
憎み抜く心ゆるしてから平和

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

哀しみの海は時間が浄化する
自然薯の龍の如くに這い登り
肩書きが道を指示することがある
年と共に化石の如く脳萎縮
祖父母真似孫立ち上るトッコイシヨ

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

京阪神個性は食に現われる
十三が京阪神のおへソです
大阪弁ほんにいい味もつている
風物詩となる阪急のあずき色
お任せの特上寿司を食べる夢
情熱に任せて生きて悔いもある
新人に手術任せる肝だめし
責任者からぬ様に多数決
太っ腹なあなたと共に歩む道

みゆき 蟹郎 振作 美枝 昌鼓 高鷲 克也 茂登子 美穂 将 一粹 高明 實 四郎 節子 蜂朗 久子 信男 堅坊 黒兎 順子 美智代 正子 守啓 郁子

行きました二泊三日でハワイ迄
身に余るお言葉ことばだけもらい
世界中で一番怖いのはボクの妻
腕前は道具を見ればすぐ分かる
せかせかと指が会話をするスマホ
信号の青をせかせかせるクラクシオン
言うぐらい只や朝晩アイシテル
信号の赤がせかせかせるパス
せかせかと喋りいい句も聞きとれず
母の下駄いつも斜めに減っていた
のんき節妻の細腕あればこそ
レジ前で割り勘なんて早よしてな
三十分以内とせかすテレシヨップ
抱きとめて抱きしめられた母の腕
精巧なイミテーションのほつたくり
せかせかに気乗りはしない蝸牛
腕力に負けぬ女の口の数
ほろくそに言われて泣いて腕上げる
河内弁わが河内では標準語
通天閣串カツの腕競う路地
足音で分かれるいらちの友が来る
二の腕がプリンブルンのフィットネス
テキパキとパートのの方が腕を上げ
せつかな時計は置いてひとり旅
男の腕欲しいと思う枝伸びる
千年も生きたいという凡夫婦
細い腕出して元気にやってます
青春は今も心に僕の糧
請求書いつの分やと呆けておく
川柳を生き甲斐にして呆け防止
棺の中でも貧乏ゆすりしてはるよ

としお シルク ヨシ枝 扶美代 誠一 好 願 清 晋 世紀子 若 芽 憲 彦 安 代 澄 空 五月 素頼馬 倣 子 清 子 ひろ子 和 夫 健 吾 永 久 敏 治 佳 子 ゆみ子 日の出 唯 教 月 子 さくら 玄 也 雅 明 天 笑

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

退院へ別れのつらい人も居て
頼られて居ると思えば出気力
叶うならもう一度少女に戻りたい
あのことを聞いてほしいの糸電話
我が愛車風雨に耐えて強い友
野葛にとられ廃屋あわれなり
お守りをもって戦にいったまま
顔役がいてアクセルとブレーキと

長 柳 会(大阪)

辻村 ヒ口報

播いた種 一步先よむ老いの知恵
ばらまいて票を集める選挙前
似顔絵は美人に描いてもうちよつと
亡母がいる鏡の中に笑む私
冒険が好きなきな娘に親不安
愛そそぎ咲かせる花の美しさ
悪いうわさ播かれて怖いネットの世
しっかりとスマホ握っている晴着
母のエール背に初めての一人旅
はじめてのおつかいボクの冒険や
岩場越え頼りにすがれる命綱
冒険に浮かれた夢の果て無謀
冒険でした一度の見合い妻となる
冒険の一手暮敵喰らせる
遺産ゼロけんかの種は播きません
日に一粒芽吹かなくとも善の種
気がつけばつるべ落しの人生路
ネズミ見ておどおどしての過保護猫
無我夢中昭和を駆けた靴の裏

英 子 かつ子 好 榮 惠 美子 ハル子 安 子 昌 子 正 洋 博

同じ日に播いて咲く花枯れる花

ブラザ川柳(大阪) 坂上 淳司報

ハルカスの夕陽にかざすロゼワイン
からくりの人形についおーいお茶
種を播く時期を狂わす温暖化
億を捨て夢を追ってく大リーグ
気ままな子ポーナス出たらうちへ来ず
実らせる為に努力の種を播く
生真面目でほんくらなの内の人
サンタさん老いの家にも寄り道を
紀の川には一とと光る鵜飼船
こぼれタネ播いたものよりたくましい
君が先僕に惚れたと自惚れる
ムーミンとおとぎのくにて夢語る
国越えて増悪めぐるが愛もまた
播いた種刈り取り出来ずスキャンダル
初恋の化石田舎で眠ってる

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報

終章の一句そろそろ準備する
この喧嘩棚上げにしてちよんにする
抱きしめて終わりにしたい拉致家族
一日の終わりに今日の予定組む
一日の終わり湯船と明日語る
今日終るつるべ落としに急かされる
十六夜の優しさ月の騙し討ち
ライバルという的を討ついつの日か
討ち返す言葉を止めた喉仏
動脈の討ち合い止まれ真つ赤な血
若者が激辛カレー一騎討ち

正 美 淳 司 一 彌 政 夫 修 芳 子 久 美子 弘 光 和 代 清 乃 悦 夫 克 三 正 子 篤 夫 昌 枝 草 庵 千 里 久 絵 あきら 知 恵子 芳 山 桂 子 たけし とも子 哲 子

仇討ちの後サロンパス貼っておく
運不運両手を合わす時分かる

ぶっちゃけて言えば幸運ばかりである
運よりも宿命大事しばれる

運という言葉で閉じたあれやこれ
逸品も突然変異運だめし

まだ運があるか師走に賭けてみる
運不運重なり合つて生きている

行く道はばたばたせず風と行く
バタバタを軽トラに乗せ日が暮れる

ばたばたと見舞いと歳暮持ち歩き
中国のばたばた許さない決意

値上げ続き財布ばたばた軽くなる
はやぶさが銀河を渡りRYUGUへ

後列できらめく人の声を聞く
孫娘今が一番楽しそう

汗しほりきらめきを追う夜のしじま
きらめいて足の裏まで幸せだ

お正月一番光るほちぶくろ

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

掃除してポリープ探し何もない
世渡りの作り笑いも上手くなり
兄逝つて寂しさつもの兄妹会
いつの間にか姉となつて今の家
身内でも一線越えぬようにする
咳をする度に夫が眉しかめ

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

主役よりゲストが目立つ祝賀会
煩惱を祓つてスッキリ除夜の鐘

美智子

文子

輝山

妙子

青帆

幸子

幸子

聡美

柳歩

幸代

柳代

博子

佐子

左余

ちえこ
紗季

海渡り大迷惑なゲスト来る
尖んがってだあれも居ない籠目の輪

長生きも国賊の気がしてならぬ
毎日を祝儀袋の中に入れ

念願の金の草鞋は鉄だった
遅い人とコンビニを組んでから

ゲストにもなれず一人で飲んでいる
神様が突る雪の時道

寿の部屋で法事のカラオケだ
朝鮮のニンジン飲んで若返る

猫でしか勝手口から来るゲスト
寿が節目にあつて世は楽し

菊咲かす卒寿の腕は話し好き
マイカーのゲストチャイルドシート置く

危険だとアイスピンを丸くした
昨夜来たゲストカボチャを食いちらし

愛敬も笑いものせた夢ゲスト
すつきりはしない辺野古の海が泣く

生きてますすつきりさせる賀状書く

はびきの市民川柳会(大阪)永田

章司報

空腹の狼が菜園わやにする
凡人で高い所に寄りたがる

お口に合いますかしらとテッサ出る
真心に触れて開いた貝の口

儲からぬ話ばかりで忙しい
口開けて大トロセがむ孫四歳

多忙やと本人だけが思つてる
狼知恵に長けた男の詐欺上手

猿まねは寛平さんに任せとく
交代しませよもう飽きました主婦稼業

孔美子

茶子

弘子

すみれ

咲和

和子

照彦

重忠

実満

蟹郎

小鹿

盛桜

八重

美ツ千
恒

拓庵
富久江
妻子
満

カラオケとダンススコーラス母多忙
大根葉の炊き込み飯に母恩ぶ

テロと対する勇気が戦終わらせる
力ある人を多忙が輝かす

気持だけ多忙で足がついて来ぬ
する事があり過ぎたまに忘れま

そうでしょう多忙な方の右顧左眈
来年は反省ばかりさなるなよ

老け込んでいる暇もない用がある
猿知恵も文殊の知恵に及ばざる

風雲児猿面冠者の取る天下
わたくしの元気のもととは多忙です

口先で生きるおばちゃん大阪や
猿知恵と馬鹿にされたが裏をかく

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

陽子報

秋日和欲を出したら片付かず
浮世舟縁を大事に漕いでゆく

ペアで漕ぐスワンの舟が照れている
難民の命小舟に乗せきれず

黒メガネかければいかり肩になる
色メガネ掛けても首相気にくわぬ

遠メガネ天下下りなら見えますよ
嫁さがしメガネならした方がいい

世も変わる月の砂漠が唄えぬ娘
靴紐を締めて日差しを追い駆ける

金木犀散つてまだ義母居るような
生真面な人に白地がよく似合う

真つ先に秋大山に落下する
また春においてとぶなが幕を引く

原爆展見せておきたい子や孫に

喜久子

美喜

雄太

みつこ

ヨシ枝

千鶴子

ダン吉

ひろ介

ちづる

光男

高鷲

フジ

かつ美

章司

陽子
嘉子

寡夫十年真つ直ぐ舟が進みだす
真実にすがり噂に耐えている
イノシシを隔てる柵の中に居る
洞窟を出て人間になれました

川柳塔なら

中原比呂志報

歳末に財布気になるお歳玉
百歳越えの喪中ハガキが三通も
水木さんあの世で平和じつくりと
貧乏神居座り続け除夜の鐘
年の暮れ避難流民つらからう
爾々とお迎えますお正月
往生きわ悪くあの世で締めくくる
身の埃はらつて年を越す準備
緞帳を下せぬままに除夜の鐘
爆買の言葉今年を締めくくる
デバ地下で迷う今年の締め括り
ウエストもヒップも狂う年の暮れ
心のすすすつきり払い年を越す
北風に年末メモを攫われる
歌声の響く第九で橋渡しし
締め括る大阪じめて景気よく
締め括る事も覚えてからの鬱
人間の迷惑を他所に除夜の鐘
熟成の愛は阿吽の支え合い
一段を二歩で進める足の裏
階段ですれ違つてる犬と猿
階上がる度に男は天を向く
一歩ずつ階を昇つてゆく大志
階段の途中で主婦の顔になる
高層の最上階に住む俄り

美恵子 華蓮 遊子 公弘 賛郎 史郎 紀雄 克己 博一 勝弘 和夫 仁恵 奈津子 完次 弥生 富子 信子 甚之市 柳弘子 成子 薫 喜太郎 日の出 將文 辰雄 梃啓

こだわりの心二階へ置いてくる
踊り場で読む今日の風明日の風
別れるかじつくり話やめました
じつくりと話を聞けば減るいじめ
じつくりと焼き上げました愛ひとつ
じつくりと聞かれました見えてくる
恵まれた平和じつくり嘸みしめる
じつくりと待つても運は知らん顔
じつくりとまだ考えているロダン
戦術はじつくり練つて知らぬふり

京都塔の会

樹本 宏子報

裸木のさくらはでんと秋の庭
お互いに好きとも言わず五十年
一枚の花びら落ちて我思う
枯木にも仏の宿る妙心寺
はつきりと物言いすぎて角がたつ
はつきりと駄目と言われてやる気出す
紅葉を鯉の乱舞が引き立てる
はつきりと答えぬことも返事です
いつともは違うドレスで風邪をひき
おひつりさま朝始まり卵割る
三途の川シツクなドレス原節子
陰陽の庭にひかれた退蔵院
退蔵院四季折々の悟り持つ
ドレスアップに合わせた顔になつてゆく
カルテの字が止まるお医者さんの卵
公案をひとひねりして恋の道
白黒をつげず流れに添うてみる
抱いてきた玉子にいつか叛かれる
取つて置きたドレスを着てゆくコンサート

惠美子 良一 おたか 萌子 盛隆 ダン吉 朝子 倫 恭昌 比呂志 美津子 則彦 千代 光子 大子 悦子 文代 弘子 万紗子 益子 忠子 元一 葉子 見清 弘之 ふりこ 扶美代 美智代

マネキンのドレス着たいと肥満体
行き先ははつきり決めぬ一人旅
切り札へ特上のドレス勝ち誇る
方丈を背に日向はこの背みな丸い
一卵性サビリーナツの歌唱力
ふんわりと今朝のオムレッツ上機嫌
約束の駅にあなたを待つドレス
アッパッパがいは今も着ています
水琴窟迷う心の襟正す
秋もみじ春紅枝垂れ人待つ
瓢鮎図解らないけど立ち止まる
はつきりとも言う歳にまだなれぬ

川柳塔わかやま吟社

川上 大輪報

十二月手応え掴み米を研ぐ
十二月今年も準備母止めず
ジョーカーを使い忘れた十二月
十二月段取り悪いのは私
十二月終わる良ければすべてよし
十二月もうとまだとが聞き合う
人は皆仏に戻る波の音
食べたさえゆけた戻りたい郷里
ハチ公は主人の戻る夢を見る
もう戻る場所はないよと嫁今朝
戻らねば家出と届け出されそう
こだわりの線香亡夫も酔うている
線香の煙にむせている位牌
こだわりを捨ててスイッチ切り替える
裸木の底にスイッチ持つ桜
スイッチオフ夢の世界が待つている
スイッチを押せば記憶がよみがえる

宣子 シマ子 昌乃 公子 順子 能子 千枝子 哲子 光久 英旺 千賀子 求芽 ほのか 秀子 紀子 克子 よしこ 大輪 めぐみ 保州 日出男 悦子 英子 富美子 徑子 准一 小雪 和香 子

ぼちぼちと体内スイツチ軋み出す 紀久子

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

窓開けて外の名月病む妻に 明治

安全に災難避けて何時も無事 五月

イケメンを外で探して持ち帰る 柳明

妻ころりあれそれ取つてトドミたい 富夫

カレンダー医者からばかりたまる暮 志恵

朝寝坊最近になくいい気分 よしひさ

「寒いねえ」呑み屋に誘う白い息 茂

枯れない燃える相手が居ないだけ 千賀子

愛がある寒さに耐えて行く二人 つな子

メラメラと滾る正義も白い骨 歌留多

定年後外出好きの妻を知る 修平

熱戦に若き血潮が燃えたぎる 幸香

白足袋におんなの意地が見え隠れ 晴華

そとずらは天下一品俺の嫁 紀美

燃えつきて後はお迎え待つばかり 洋子

燃えつきてそんなもんかと悟るふり 初音

目には目を憎しみだけが燃える国 見清

リセットは白いドレスで三回目 りこ

外出の顔になつてく厚化粧 健二

あやまちを探したずのはいつも母 和子

濃いすぎる行間を寄りたい 宏造

昭和十六年母に自慢の子が生まれ 雪菜

白いシャツ今年一度も着ていない 哲夫

笑いましよ笑つて死んだ人居ない 正和

神様に凭れて歩く白い道 哲男

恋かしら愛かと迷う内が華 美籠

外側から女に戻すダイエツト 晶子

空爆もテロも壊していく未来 紀乃

孫帰る僕は両手に燃えるゴミ 比る志

円周の外に立つてる落ちこぼれ 耕治

白旗をあげて点滴受けている 靖鬼

鬮雲空いちめんの大漁節

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

平和を願う墨たつぷりと安の文字 志華子

友の情け何より嬉し根なし草 みつ子

根性を見た逆上がり親が泣き すみ子

水も野菜も旨い田舎に根をおろす 捷也

人は人わたしの根性ゆるぎない 理恵

核兵器根絶願う世界中 善之

根のはえた猫が家から出ていかぬ 浩昭

円満の秘訣本音は語らない 公平

ワイドショー真実は語らない 桃花

真実以外しゃべったことは無いと嘘 舞夢

真実を語らぬままに母は逝く 和夫

真実は歴史が語ると逃げを打つ 楓楽

若さや視界ゼロでも突き進む 弘子

出発はゼロ何とかなるという若さ げんえい

お小遣い年々下がりゼロ間近 眞澄

飲兵衛にスイツツの害論される 照子

杖ついで歩いて人はよけて行く 千歩

自由の真髓九十で嚙みしめる 恭昌

ISの非道そつぽを向くアラ一 正雄

先ず母を味方につけてからの策 富子

改めて老いといつこり手をつなぐ 蕉子

ライン一本上と下との差が重い 紀子

大掃除昔のことと子に倣う 敬子

父厳し母うるさくて子のんびり 日の出

たつぷりの湯殿に淡い月覗く 満作

好奇心たつぷりあってまだ死ぬぬ 希久子

退屈という贅沢を持って余す 集一

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

戦後七十日本丸の櫓が軋む 紀雄

誇るものなくても愛がてのひらに かこ

長すぎた助走でやはり息切らす 一文

病室で知る人間の生きる意味 慶子

白湯一杯愛の深さが知りたくて 森子

寝て起きてはらり人間落ちていく 常男

糟糠の妻は手の荒れ誇らしげ 高鷺

硯海の墨に溺れる筆の先 壽峰

豊かさを誇つて今はキリギリス 安男

百態を演じる人生は舞台 朋子

一瞥が善と悪とを選る瞬時 耀一

塩分ダメ糖分ダメで白湯を飲む 加央里

冬花火ひとつ残して句読点 寿之

木洩れ日の光ひと節神の糸 欣之

耳底に未だに残る亡父の喝 清

人間を櫓に組んである岩

川柳さんだ(兵庫) 田中 童子報

退屈を知らない母の二十四時 キヨミ

図書館に退屈捨てに行つてます 順子

貧乏性一度退屈してみたい 歳子

賞味期が切れた夫婦の午前午後 茂山

退屈の置き場所さがす年の暮れ 勝正

寒鮒の釣りに見物五六人 徹

予定なし今日も手帳は欠伸する
息子よりやさしい詐欺の口車
よくしゃべる口でゴメンが言えません
隠し味母から娘へと口伝え
とことんまで追及しないのが情け
なせば為るところんやつた五郎丸
神仏も鬼も男も手なづける
何でなんでもとことん聞いて嫌われる
倒れても電気ショックで甦る
俺一人周りはみんな知っていた
だだこねても通用しない歳になり
絶世の美女ニューハーフとのうわさ
遺言書白紙だけ入れておく
大慌て買った切符が見当たらず
出ばやして選者登場するなんて
もういくつ寝ると楽しい大そうじ
負われた日懐かし吾子は抱っこひも
姑と孫並びやすやすや似てる顔
ねんねしてうんとあそぼうまたあした
どんな夢見ようか猫の大欠伸
ひまだから昼寝の孫の鼻つまむ
叱るのは止そう一途な子の寝顔
眠りから覚めても感謝寝て感謝
カニの身をせせる根気が衰える
今宵だけキリストさまと食事会
ひつつ年味方がひとりで出来ました
一つ聞き二つ忘れて平和です
三田路の記念樹のびやかに育つ
握手より指切り欲しいお方です

修平 廣子 耕治 野薫 光久 雄太郎 晶子 幸香 礼子 富夫 恭子 正和 宣子 祐隆 健彦 一子 靖鬼 好文 武彦 健二 花門 雅尚 哲夫 哲男

固まつてなぐさめ合っている落葉
固まつた脳ミソ溶かす熱い酒
固まつた頭はぐして解くパズル
国会の討論いつも固まらず
神様はなかなかうんと言いませぬ
くたばればお願ひすると嫁に言う
お願ひと言われない人が言いだした
卒寿です願ひ叶ってまだ達者
御百度を踏んで命の火を繋ぐ
お願ひだ俺より先に逝かないで
ポーナスを少し下さい派遣にも
くださいな名生み出す壺一つ
金植で安倍川餅を搗いている
掃除機も必死でしたよ喉の餅
餅いくつ食べたか自慢若かった
杵の音昭和と共に遠くなり
焼き餅もこんがり焼けば淡い恋
福の木に老人の智慧餅の花
冷凍庫正月餅が夏までも
逃亡の果て居酒屋の隅の椅子
大臣の逃げ口上のあの狡さ
小走りして逃げる暦よ待ってくれ
北風に言葉の語尾が逃げて行く
追つてくる老いから逃げる術が無い
時間は逃げるのんびり出来ぬこの余生
あつ苦手ちよつと遠くの席に着く
しめ縄を張つて神様迷さない

由紀子 萩江 玲子 けいこ 美ツ千 風露 雄忠 重忠 茶子 鬼一 野蒜 節子 宣子 日生子 英子 祐子 悠子 瑞子 完司 次男 康子 美知江 醉芙蓉 龍枝 茂夫 照彦 芳山

注連縄もお供え餅もコンビニだ
点滅をしながらやがて朽ちていく
思いやり途切れないうち小出しする
しあわせはシャイで恥じらいながら来る
紅一点誰も女神にしてしまふ
時々には悪玉にもなつてやる
金もない才能もない何も無い
古希傘寿卒寿を目指す通過点
点々と境界集落増えて行く
つらいのはお互い様と泣き笑い
アイロンもきかなくなつた顔の皺
台説点ないおしゃべりは聞きにくい
台本のない人生も最終章
時々美人の酌を呑みに行く
日中韓消すことできぬ過去がある
「気をつける」自覚は薄い高齢者
自衛隊訓練だけですめば良い
かえつたぞ大きな声で呼ぶ独り
今までに消せる汚点が三個ある
自画像はお酒のシミの点描画

石花菜 寿代 楓花 くにこ 芳光 麦光 大鯨 規雄 章子 雄大 風露 けいこ 由紀子 道唱 正男 鈴野 久子 重忠 希楽良 則彦報 英旺 肇子 宏子 葉子 求芽 正明 浩一 徹子 美佐子 比ろ志

縁談も固まりかけて邪魔入り
倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報 智恵子

時々はきれいにしよう靴の裏
怪しからん話になると盛り上がる
ひょうろくだま酒に力を借りている
大山滝句座(鳥取) 新家 完司報 照彦 紀の治 芳山

近ごろは優先席に馴染んでる
繋ぐ子が首都に出たまま帰らない
ユニークとも変人だとも哲学者
後悔のない年だったのよしとする
イエス・ノー単純にかぬのがこの世
へそ曲げたふりし男を惑わせる
脱サラをやつてみたけど虚脱感
世の習いなどのつまりは金次第
手をつなぐ位で頼る心地良さ
結論は出さぬ未来が広いから

いい夫婦演じきつたねバスター
居酒屋のおでん妻にと持帰り
尚江

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

少子化は止めてみたいが止まらない
息止まる前に言いたいありがとう
止まり木の水割今日の憂さ晴らし
孫が来る夫婦げんかはすぐ止まる
少年のやる気腫が澄んでいる
気がつけば独りぼっちになっていた
風まかせ呑気に行こうロスタイム
失敗をやる気にさせた受験生
男気を出すからまたも損をする
駄駄捏ねて確かめている親の愛
我が夫手のひらの上捏ねてます
婿が掲ぎ花嫁こねた祝い餅
日本語で椅子にサインをしてホープ
名前だけ知ってる人だ絵のホープ
川柳会諸手を挙げて待つホープ
日本のホープ世界の壁に泣く
銀盤のホープ日本を活気づけ
今年こそと確か去年も言ったトラ
この俺も妻のホープの日もあった
おにぎりの丸みは母の手のかたち
逆らわず流されもせずマイペース
肝臓のあたりが痛む休肝日
わたくしを一番知っている日記
真似たとて百人は百様の道
言うことも忘れ見上げる寒の月
負けにこそ神はひっそりおわします
今年こそ始末つきたい年の暮

じろう
千賀子
紀華
順子
キヨミ
光久
弘子
光子
正和
利子
みよし
哲男
美津子
歳子
淑子
浩司
恭子
武臣
盛夫
宏造
千代
茂
わこ
りこ
美籠
いわゑ
洋次郎

カズノコだけねだる私の年の暮れ
前ばかり見ていなくてもいいんだよ
人間の愛無き森は鬼が棲む
未練断ち雨のきれ目を追いかける
止まらない老いは忘れるのが一番
飲み過ぎて自慢話が止まらない
K点を一気に越えた安保法
ホープと言われその気になった落し穴
比ろ志

六甲川柳会(兵庫) 市坪 武臣報

親として伸びる芽摘んでいませんか
背を伸ばすこんなことでもひと仕事
交差点やさしい嫁の手がのびる
居るだけで柔らかく母と言う空気
また惚れるやつぱり俺はアホウドリ
焼鳥よりおでんが恋し冬の酒
過疎の村屋と空気が誇りもの
ひな鳥の瞳童の瞳して
鶯も愛の小枝で春を待つ
のびのびになった便りに笑顔のせ
鳥隣れ機械みたいな養鶏場
千鳥足家の前にて深呼吸
息つめた空気はり深く五郎丸
美味そうな鯛焼一つ手がのびる
術後5年捨てるに惜しい千羽鶴
朝日浴び空気映える竹田城
愛想の悪い呑み屋の閑古鳥
九官鳥無口な主人フオローする
ルミナリエ重荷になってきた神戸
のびざかり昼のどか弁母の愛
まずは茶を啜り明日の策を練る

勝弘
章子
一徳
晶子
美香
秋果
比ろ志
武彦
弘
和子
千賀子
賀夫
忠貞
和宏
洋次郎
弘子
繁義
芳江
道子
邦子
武臣
洋一
茂
浩司
利子
じろう
和郎

逝く秋を見送りながら散るもみじ
日本の明日を信じて今生きる
物差しで計られたくはないのです
ネクタイを外すと空気まで旨い
空気よみ猫も私もおとなしい

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

たんたんんと師走も並の月とすぎ
年末ジャンボ当て復興に寄付したい
名ばかりのもんじゅしつかり知恵を出せ
政治家の好きな言葉はしつかりと
うつせみの世にアビールは糠に釘
余生なお趣味三味でご悦楽
一年の暦と共にしまい風呂
拉致の子よ師走の空は青いのか
しつかりと覚えたはずがすぐ忘れ
全身でノーだと言うている師走
句作りが思案に余る日が続く
余つても人にはやらぬ欲深さ
延命不要子等にしつかり言っておく
しつかりと気品も備え綱守れ
消費税減税案をアビールし
正論がアビールするに限らない
アビールは静かにしては分らない
ドライブラーになつてもバラの自己顕示
身に余る光栄ですと言っておく
あり余る愛はあるけど金はない

夏恵子
美恵子
光久
無限
能子
昭
益祥
喜代志
和美
一子
笑司
蕉子
信二
幸子
ダン吉
珠子
大輔
隆昭
忠太
紀雄
義泰
芳香
みつ江
益男
まつお
哲男
勝弘
美智子

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

寄せ書きのある日の丸が遺品です
奥さまに源氏の旗をあけたまま
戦争法廃止の旗を高くふる

柳界展望

当日投句 兵庫県川柳祭
神戸市実行委員会賞特選

西川 無限

心音が今も聞える母の
海

フラミンゴ転けた話は
まだ聞かぬ
土屋起世子
一冊の本で明日の道決
める

★第37回出雲総合芸術文
化祭は11月14日、パルメ
イトホールで開催。

市長賞 福西 茶子

砂粒のようにこぼれて
いく余命

伊藤 玲子

善人の仮面の下が濡れ
ている

出雲市川柳連盟賞

黒田 能子

★NHK学園秋の誌上川
柳大会、本社同人成績。
秀作 小林 わこ

事後投句 兵庫県川柳祭

川本真理子

雲ふわり港は僕の中に
ある

福田 好文

子ども(同人・八尾市)
が採りあげられた。19
37年に出征した父は3
年後に戦死。空襲にあっ
て一枚だけ残った戦地か
らの葉書の思い出が紹介
されている。

多和田敬子

正直な器が音を立てて
いる

★平成27年度たかね川柳会
年間賞発表。

正賞 斉尾くにこ

獣偏ちよつと私へ付け
てみる

★第19回NANA BANA
なん大阪弁川柳コンテス
ト結果。
なんなん大賞

福田 好文

21日、家族葬で執り行わ
れました。享年九十二。

▼お詫びして訂正△

▼1月号P115中段9行
目、あれそれが増えて名
刺が落ちていく↓名詞。
本社2月旬会、5日(金)↓

4日(木)

▽新誌友紹介△

府中市 岸田 武

紹介者 小島 蘭幸

鳥取県 児玉 則雄

紹介者 新家 完司

瀬戸内市 片島 秋男

紹介者 小島 蘭幸

枚方市 山口弘智

紹介者 伊達 郁夫

常任理事会 11月7日(月)

①第22回川柳塔まつり最
終確認②ホームページの
改良③定例確認事項④各
部報告事項⑤その他

次回 2月4日(木)AM10時

福田 好文

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 わかやま 吟社	14日(日) 14時10分締切 兼題 = 禁止・見込み・しんどい 課題吟 = 練り物	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 柴原道夫
豊中 もくせい 川柳会	15日(月) 13時45分締切 人相・はみだす・ながなが 自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	16日(火) 13時30分締切 へそくり・ポーズ・破る ずばり・自由吟	キッピーモール 6階 (JR三田駅前) 「まちづくり協働センター」内のホール 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳 たちばな	17日(水) 14時締切 親・歌う	立花公民館 (尼崎市塚口町3-49-7) 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田 川柳会	20日(土) 12時30分開場 地球・待つ・今さら・オープン	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0067 岸和田市南町9-7-818 藤井康信
川柳塔 みちのく	20日(土) 17時締切 積もる・さまざま・正装	弘前市松森町73「レストラン・セーブル」TEL0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	21日(日) 13時締切 援助・囲む・説教・自由吟	産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳 藤井寺	21日(日) 14時締切 冬・クレーム	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺さくら町2-2-201 高田美代子
南大阪 川柳会	22日(月) 18時開場 保つ・妖精・テーマ・けなげ	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 すみよし	27日(土) 14時15分締切 風呂・戻る・どンドン	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山 三幸会 川柳会	27日(土) 12時30分開場 二・だるま・義理	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市川柳 会	28日(日) 14時締切 愛・まだ・ピアノ	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	28日(日) 13時30分開場 深追い・トライ・のめり込む	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
京都 塔の会	29日(月) 14時締切 オアシス・ばれる・足	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	5日(金)11時開場 待つ・そろそろ・寒	やまと会議室(奈良商工会議所東隣) 近鉄奈良駅①番出口東へ徒歩2分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城北会 川柳会	6日(土)14時締切 洗う・サイズ・ばらばら 自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄谷町線 千林大宮駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富柳会	6日(土)14時10分締切 次・おせっかい・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉吉会 川柳会	6日(土)14時締切 断る・太陽・生きる	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟　　社	6日(土)13時30分締切 選ぶ・ゆらり・ラッキー 濡れる	松江市 雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
西宮北口 川柳会	8日(月)14時締切 義務・決める・ぎくしゃく 自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる 川柳会 同好会	9日(火)13時30分締切 地・組む・安い	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 さ　　かい	9日(火)13時開場 拳・笑う・かつら(折句)	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳 あまがさき	9日(火)14時締切 寒い・麵・目立つ・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 阪急「武庫之荘」駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼
あかつき 川柳会	12日(金)14時締切 生・油・足許・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	13日(土)14時締切 期待・枕・騒ぐ	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区本通4-11-6 山崎珠生
川柳塔 打　　吹	13日(土)14時締切 きっかけ・痛い・くるくる	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	14日(日)14時締切 会釈・ぼったり・庇う・雑詠	八尾市洪川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之

編集後記

★大いなるガラスの如き
寒気あり 薫風

★本誌に誹風柳多留一二
篇研究を連載載いている
清博美先生にお目に掛か
る機会があった。先生は
今年八一歳。週に二、三回
ゴルフを楽しまれ昨春秋
に三回もエイジシユート
を達成された由。先生は
富士宮市在。壮大な富士
を眺めながらのゴルフが
健康法とお伺いした。

「古川柳は絶滅危惧種
す」と先生は嘆かれた。
中世文学の研究者は居て
も古川柳の研究者は不在
とのこと。若い人が川柳
に馴染まないことは現代
川柳にも言える。いずこ
も同じ秋の夕暮れである
★今年の読み初めはサン
ニテグジュベリの「星の
王子さま」。一〇年前に日
本での著作権が切れたた

め、たくさんの翻訳がで
ている。集英社からは池
澤夏樹が、宝島社からは
倉橋由美子が訳している。
岩波書店の内藤濯訳が有
名だが随所にカラーの挿
絵があり、コンパクトな
装丁も四七六円というお
値段も気に入った新潮社
の河野万里子訳を選んだ。

★「星の王子さま」は子
供の心を失った大人への
贈りものだ。「ものごとは
ね、心で見なくてはよく
見えない。いちばんたい
せつなことは、目に見え
ない。有名なキツネの言
葉をはじめ、たくさんの
名言に心を揺さぶられる。
心が軋む時、人恋しい時、
手に取りたい一冊。

★紙が捨てられぬ。聖徳
太子や樋口一葉の印刷さ
れた紙ではない。唯の紙
切れた。昨年の断捨離で
出るわ、出るわ・・・。
米子サンルートホテルの
メモ用紙は、二〇年以上

沖繩を旅して

ひとこと

以前、沖繩に旅行した時のこと。
沖繩県知事選挙のあとだった。地
元紙の川柳欄に第一席となった句
に共鳴しすぐに手帳に書きとめ
た。(無風では波は立たぬが帆も
張れぬ)
県政を帆掛け船に喩えてさなか
の知事選が無風でなくてよかった
という喝采ともれた。

四名の候補者が競い合い辺野古

移設反対候補が激戦の末、推進派
候補を破った。

太平洋戦争で本土の防波堤とな
り多くの犠牲者を出した沖繩に私
達は今も甘えてはいないだろう
か。

読谷村から眺める海は何処まで
も青く珊瑚礁は美しい。この自然
を破壊する行為は許せないとい
う地元の人々に少しでも寄り添え
たら、と思いつつ帰路についた。

(藤後 卓也)

も昔のきやらはく忘年句
会で泊った時のものだ。
初めて新同人を迎えてお
ります。

マルタの五つ星ホテルの
便箋は楓葉さんとの楽し
い思い出。たかが紙切れ
ではない。私の思い出を
紐解いてくれるお金では
買えない大切な宝もの。
(朱夏)
柳たちばな(尼崎市)が
開設されました。お近く
の柳のみなさまご支援
を。①「しっぺがえ
し」、②「がんじがらめ」、
③「つばみ」でありました。
でも、読めない字を勉
しい校正です。

□塔誌昨年11月号(P
123)で紹介されました。
たように、長期間同人が
空白であった岡山県で新
同人を迎え、沖繩県でも
正中、①「竹筥返し」、②「雁
おります。

(勝弘)

檸檬抄投句用紙

「打診」(2月15日締切)

4月号発表

長浜 美籠 選 — 共選 — 三浦 強一 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
 水煙抄 (8句) 川上大輪選
 愛染帖 (2句) 新家完司選
 檸檬抄「打診」 (2句) 三浦強一 共選
 長浜美籠選
 インスレクションナヒ (2句) 大西泰世選
 「うなずく」 前田楓花選
 「うなぎ」 杉本義昭選
 「鏡」 (3句) 山口光久担当
 初歩教室

4月号発表 (2月15日締切)

5月号
 檸檬抄「削る」
 一路集「配る」「自信」
 初歩教室「飽きる」

本社2月句会

とき 2月4日(休) 13時開場・13時40分締切
 ー開場時間・締切時間を変更していません。ご注意下さい。
 ところ アワイーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1444
 おはなし「江戸川柳で詠む王昭石」
 兼題「端」 西出楓楽氏
 席題「攻める」 大内朝子選
 「あほらしい」 島田誠一選
 「セツト」 鴨谷瑠美子選
 「上」等 川上大輪選
 小島蘭幸選
 会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

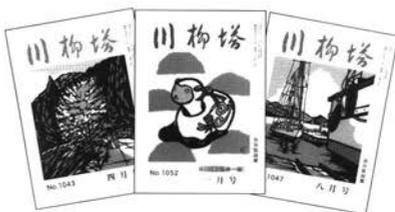
本社3月句会
 7日(月) 午後1時から
 兼題「キョトン」「激しい」「あきれる」
 「素足」「新鮮」

第34年度 夜市川柳募集

第9回「嘆く」天根夢草選
 ハガキに3句 2月20日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円(送料94円)
 半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)
 二〇一六年(平成二十八年)二月一日発行
 発行人 小島和幸
 編集人 木本朱夏
 印刷所 美研アート
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
 花野ビル201号室
 発行所 川柳塔社
 電話(06)六七七九三三九〇番
 振替〇〇九八〇一四一五八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
 新聞・広告・ポスター・伝票等
 あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
 TEL (06) 6372-1178
 FAX (06) 6372-1196
 E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

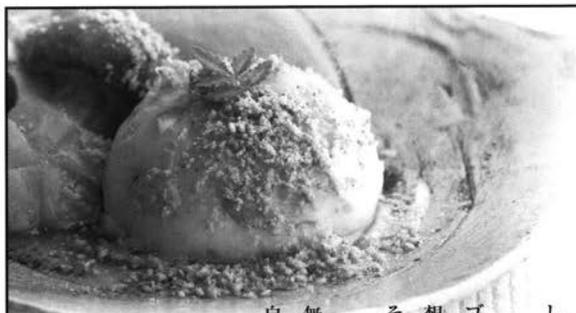
川柳塔のホームページアドレス

<http://www.senryutou.com/>

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>